

(176)

て、改宗せず。彼等は他の國民を同化せしめて、自ら同化せず。英人は印度の征服を豫測せざりき。そは彼等の性格に従つて、自然に來れり。又彼等は世界の各地に於て、あらゆる國家及び人種の法典を管理す。カナダに於ては、古き佛蘭西法を、マウリチウスに於ては、ナポレオン律を、西印度に於ては、西班牙國會の布令を、東印度に於ては、メヌーの法典を、マン島に於ては、スカンディナヴィアの立法を、喜望峯においては、古き和蘭の法律を、イオニア諸島に於ては、ジャスチニアン帝の羅馬法全典を。

彼等は深くその歴史上の優勢なる地位を自覺す。英國は法律制定者、愛護者、垂訓者、左祖者なりき。佛國新聞紙の論調と、英國の夫とを比較せよ。前者は英人の意見に對して、常に不平を訴へ、咎め立てをなし、極めて銳感的なるも、英國新聞紙は、佛人に對して決して畏首畏尾する事なく、尊大にして蔑視的なり。彼等は、至大の意力と性癖とを有する爲めに、激昂し易く、且つ頑固なり。わ

(177)

が負債を忘れず、恩惠を覚めず、何事にもわが欲する所は、わが意見を以て行はんと欲する種類の人に往々見る如く、慳貪なり。教育と交通とは、かゝる粗澁の性質を拭ひ去りて、善良の意志を澄清す。若し解剖學が國民的傾向の研究に適する如く、改良せらるゝ日あらば、思ふに、脾臟といへる忿怒の器官は、英人にもみ發見せられて、米人にはこれ無く、この點が兩者の區別を示すに至るべし。余は又、この器官が外皮的、早退的にして、英人は表面は一肚氣なるも、内心は優しく、こゝに彼等が羅馬民族及び拉丁民族との相異あるを知るべき、解剖學的發見の現れん事を豫想す。英人の心臓には、毫末の殘忍なし、毫末の卑陋なし。彼等は輕信及び激怒の發作に罹り易し。されど、この國民の情性は、いかに擾さるゝとも、速かに、且つ容易に鎮靜に歸すること、恰もこの溫帶地方の空は、いかなる暴風の後にも、再び霽れ渡り、清朗を以てその常態とするが如し。一種物を節用する如き慾は、恰も鷲の眼險の如く、英人の認識を掩ひて、こ

(178)

れを保護す。わが氣早き米人は、彼等と交渉する時、初めこれを蠢愚と斷言す。されど、後に至つては、彼等が能く服裝せる、或はその力を隠せる、人種なるを認めざる者なし。彼等の中の勝れたる銳才、忍耐強きニュートンの人物、奇思縦横の超越的詩人、或はダグデール、キボン、ハラム、エルドン、ビールの亞流が有する事業做成の力を理解せんと欲せば、先づその日傭労働者のいかに持久性に富めるかを見ざるべからず。貴きも賤きも、彼等の地質は、油の如く滑なり。彼等の體質には、一種の脂蠟あり。その状恰も精神的車輪の爲めにも油を具へ、従つて、自己を傷けずして、莫大の仕事を成就し得るものゝ如し。

英國人民がその生活の爲めに拂へる費用は、又その學者藝術家の依頼する所のものなるが、これ亦彼等筋力の強弱を證明するものなり。殊にこの重き負擔をみづから荷ひ得る者の數限りなく多きに於ておや。余は又殆んど彼等日常の食事も、其肉體の野生的氣力を證明すと云ふを得ん乎。

何れの國も英國の如く有爲の人物に富まず。チャーレス一世が、ストラップフォードの人民に就いて『その才幹は、國家の大事に干與せる大公鉅卿をして、羞づるよりも寧ろ畏れしむるに足る紳士』と云へる如き、或は男爵ヴァーアの如く、『凱旋の時にも、その沈黙は、人をして敗北したるに非ざるかと疑はしめ、退却の際にも、その快活なる元氣は、人をして勝利者と推測せしむる』如き人物は英國に甚だ多し。

次に引ける『ハイムスクリングラ』の一節は、殆んど今の英人の傳神とも見るを得べし『ハルドルは剛健にして、且つその容貌著しく美なりき。ハロルド王、彼を嘉稱して曰く、彼は總ての家臣中、危険を生ずるか、幸福を齎すかと疑はしき場合にも、これを意に介する事最も少し。いかなる事情起るも、彼は毫もその元氣を落さず、或は増さず、これが爲めに眠を減せず、或は長くせず、又、特に飲食する事もなく、全く平生と同じと。ハルドルは多辯ならずして、言葉短く、

(179)

(180)

直截にその所見を述べ、且つ強情にして頑固なりき。王の周圍には、その言のまゝに動かんことを競ふ多くの伶俐なる者共あり。従つて彼のかかる性質は、王の爲めに悦ばるゝ能はざりき。彼は暫く王の許に在りしが、頓て氷嶋アイヌランドに抵り、ヒアルダホルトに居を定めて、この田庄に高年まで住みたり」と。

この國民的情性も、平和の歴史に於ては、閃光的、若くは急驟的にあらず。鈍くして深き英國の民衆は、久しく火を貯へて燻りし後、遂に炎を發して、その四隣を燎く。倫敦の忿怒は、佛人の忿怒にあらず。長き記憶を有し、いかに猛烈なる熱度に於ても、一種の登録と規則を有す。

彼等は未だ其威力の半をも現さず。彼等は莊嚴なる決心をなすに堪ふ。されば若しかの屢々預言せられて、今や、言論の戦争となれる(壓制と自由の問題は東方歐洲より來れり)人種の戦争が、將來英國の文明を威嚇するの時ありとせば、この海上王は、再び、その浮城フロリダ、カッセルに搭乗し、數多の植民地を經營して、更に新なる

家郷と、第二の勢威赫々たる一千年を創始すべし。

英國の鞏固は、現代世界の保證なり。英民族にして、若し佛人の如く不操持ウツクキならば、何の信頼がある。されど英人は自由の味方なり。保守的にして、錢を愛し、貴族を愛する英人は、又自由を愛す。従つて自由は安全なり。蓋し彼等は他の國民よりも個人的勢力を具有すること饒なればなり。この國民は、常に、わが政府の不道徳なる行動に反抗す。彼等は佛蘭西、土耳其、波蘭、匈牙利、シユレスウイックヒ・ホルスタイン等の事件に關し、その人民に同情を寄す。たゞ遂に自國爲政者の權數の爲めに、この感情を抑制せられて息むのみ。

各民族の上古の歴史は、その民族が、植民、商業、法制、美術、文學の各方面に、活動を擴ぐるに従ひ、假令其勢力を減せざるも、漸くその表面を掩蔽せらるるにいたる、恒久不變の民族的特色を露示せずんばあらず。上古の歴史のこれをおらはすや、譬へば、音樂者が、先づその歌調を吟弄し、然る後、これを變轉窮り

(181)

(182)

なき樂波の中に覆没せしむるが如し。吾人は、アルフレッド大王に於て、北人に於て、英國社會の稟性を、即ち、私の生活を以て、名譽の場所となす特色を認む。光榮と云ひ、經歷と云ひ、野心と云ひ、巴黎を含める緯度に傳唱せらるる語は、殆んど英人の話談に上らず。ネルソンは、彼等の心情より、その素樸なる電報を發せり、曰く『英國は各人皆その職分を盡さん事を望む』と。

實際的奉公の爲めに、職務の威嚴の爲めに、或は病める、若くは厭衝せる才幹を治せんが爲めに(最少の少年も海軍に入れば能くその勤務を爲す)陸海軍に入るものあり。或は嚴肅なる公務を處辨する官省に於て、専ら政治の事務に鞅掌する者あり。又英人は勞苦多き法律の講究に従へる、辯護士を尊重す。されど平靜、健全なる通常の英人は、公の生活を講古先生ものしりせんせいの事として躲避し、これに反して、かの農業、炭坑、製造業、貿易等より生じ、能く實際的價値を造出し、以て獨立を保證する所の富を貴重するを常とす。

(183)

彼等は號令する事をも、服従する事をも欲せず。唯、家庭の王たらん事を欲す。彼等は智識明にして、深く文學を嗜み、全世界が、その書籍と地圖と、標本と、各種の精詳なる報道とを以て、彼等を慰めん事を望み、自ら美術の製作者たらざるも、その雅趣は、これを尊重す。彼等はいつにても餘暇を作り、自由に一日の時間を支配し、且つこれを仕事に用ゐ、他の國民の如く、必要といへる拘束を待つこと多からず。されど英國民の歴史は、各變動毎に、私生活の獨立に對する、先天的特愛を示せり。而して、この傾向は、曠大なる植民地が、好餌を以て、英人を其軌道以外に誘ひ出すが爲めに、いかに甚しく擾さるゝ事あるも、尙ほ衰退するに至らずして、絶えず法律、文學、風習、乃至職業を形成し、改造す。彼等は社會に適應せる福祉のみが、獨り安定なるを知りて、これを選取す。猶賢き商人が、寧ろ三分の利子に投資するを冀ふが如し。

第九章 倫敦兒

(184)

英人は奇癖家の國民なり。個人的權利は、社會の秩序と反せざる限り、極度の範圍に擴張せらる。財産權の甚だ完全なるや、そは恰も、他の地方には全く存せずして、この人種にのみ獨有の制度なるかの觀あり。王と雖も、農夫の賣る事を肯んせざる土地は、その一瓩チカーをも私するを得ず。遺言者が、その財産を犬に贈り、或は鴉の巢に贈るも、歐洲を擧つて、これが不條理に干涉する能はず。各人、皆その特殊の生活法を有して、これを痴呆はからしき點まで實行し、斷乎たる同胞國民の同情は、クラムプ氏の問想きまぐれを扶くるに、法典を以てし、衡平裁判所判事を以てし、近衛騎兵を以てす。天下に晒ふべきものは、英人の或者が、金と法律とを以て、不窮に傳へたる狂想に、終息を刺す。英國の公民權は、羅馬のものと同じく、萬能力あり。倫敦兒ロンドンツキはこれに就いて、鋭き感性を有す。この肥厚漢は、自由

とは、わが欲するまゝに行ふの權利なりと解し、わが自由を感せんとして非違をなし、而して、これを固執するの常性を養ふ。

彼は愛國の熱情を有す。蓋し、その國土小なればなり。自國々民の勢力及びその功業に關する、彼の信念は、彼をして、人の反感を買ふまで、他の國民に對して無頓着ならしむ。彼は異邦人を忌む。多く英國に住みたる、スエーデンボルクも、記して曰く『彼等の間に深厚なる精神の類似あり。その結果、彼等は自國の友とのみ親交を訂し、他邦の者とは、殆んど然せず。彼等の異邦人を見るや、譬へば、城の絶頂より、望遠鏡を以て、市外に棲める者、又は逍遙せる者を眺むるが如し』と。彼よりも古き旅行家にして、一五〇〇年の頃、『英國物語』を著し、一ヴェネチア人は曰へらく『英人は、自己、並びに總て自己の所有物を、熱烈に愛惜す。彼等は、英人以外に人間無く、英國以外に世界なしと思惟す。美しき異邦人を見れば、彼等は必らず曰く、彼は英人に似たりと。而して、その英人なら

(185)

ざるは、甚だ氣の毒とせらる。又、外人と共に何等か緻密の事を爲せば、その國にも斯かる事ありやと訊ねざる事なし」と。英人が、賞讃の形容を加ふる時に用ゐる、最上の語は『斯く英國的なり』にして、他人に此上も無き敬意を拂はんとすれば、曰く『余は之を英人ならずと見るを得ず』と。佛國は、自然の對照上、一種の黑板にして、英人は、白墨を以て、これに自己の特質を描くものなり。彼等の尊大は、常に、佛蘭西に對する暗譏の中にあらはる。余は察すらく、歐米及び亞細亞に住める、總ての英人は、皆窃に佛國に生れざりしを歎べるならんと。コールリッジ氏は、會て、或る演説の終に、神が彼を守りて、佛語を一句をも口にし得る事なからしめたるを、公然、感謝したりと傳へらる。余は、英人が英國を重んずるの深大なる、その上流社會一般に、他邦人と談話を交ふるに方りては、普通の用語を以て、自らわが所有物を貶下するするさへ、自國民の價値に對しての、抑ふべからざる推尊と思惟する如き、甚しき誤解あるを知れり。新しき國の

不便宜、丸太小屋、又は燈野を嘆ずる、謙讓の紐育人、或はペンシルヴァニア人は、忽ち滿座の卒直なる惻隱の語を聞きて、一驚を吃すべし。その人々は、明に英國以外の世界を以て、總て撒播の堆積となす者なればなり。

かゝる島嶼的偏狹は、彼等の對外政策をも窘束す。彼等はその傳説と慣習とを固執し、その島國の條規を、印度、支那、加奈陀の如き、大國の咽喉に押込まんとするのみならず、好んで維納の議會に向つて、駭くべきものを課し、その租税を拂へる長靴を以て、あらゆる國民性を蹂躪す。チャタム卿は、自由及び代議士を出さざる地には課税せざる主義とを賛す。何となれば、これ英國の法律なればなり。されど、一本の鋸釘をも、彼等は、米國に於ては製造せずして、これを英國より購ふ。これ又英國の法律なればなり。されど、英國の商業が、米國の獨立に依つて、改造せられざるべからざりし事實は、彼等をして一齋に驚き、且つ訝ましめたりき。

(188)

約言すれば、余は、英人の天性が甚だ急激、且つ侵略的にして、聊か他の民族と相容れざるかを恐るゝのみ。世界は兩雄をして並び立たしむる程廣からず。

されど、この國民性を離れて、別に承認せざるべからざるは、英國々内に於て、毎日、かの古き北人の神ブラーグに對して崇拜の行はるゝ一事なりとす。ブラーグは即ちスカンディナヴィアン派の祖先の間に、その能辯と堂々たる態度とを以て、有名なりしものなり。英人は確乎たる勇氣を有し、大なる企圖を行ひ、且つ困苦に耐ふるを得。彼等は、又、區々たる勇氣を有し、これに依つて、自己の何者なるか、自己が何事を爲し得るかを故らに他人に示すを好み、いかなる會合に於ても、自己を信するの強きが爲めに決して何人をも摸倣することなし。彼等はわが肢體、容貌、衣服、親戚 又は生地に關して、毫もその缺點を掩はず。自己の境遇は、盡く他人の意を悦ばしむるに足ると思惟すればなり。彼等はわが頭の禿げたるも、赤きも、或は緑なるも、或は脚が彎曲せるも、或は癩痕、或はあざ、或

は反芻の癖あるも、或は喉々聲、或は嘔聲なるも、尙これにも一種體裁よく、心憎き所ありて、彼等に相應きが如く、強ひて自ら信するを常とす。

されど、自然は何物をも無益に造らず。英人頭腦中の、この瑣々たる自尊の過剩も、彼等の勢力とその歴史の秘密を成すものゝ一なり。何となれば、この性癖は、彼等をして、その眞の人物と力量とを表明せしむればなり。そは狡猾と、引退思案と、人の下流に立つ態度とを除去り、公明正大にして男らしき舉動を奨むるを以て、各人皆その有する價値を残らず發揮し、試みの足らざるが爲めに、機會を逸するが如き事なし。人の缺點は、通常、その人自身の眼に留まると、同一程度を以て、社會の眼にも映するものなり。吾若しこれを輕視せば、社會もこれを輕視すべし。吾人はすべてこの缺點が簡易なる性格の測量器なるを知る。蓋し小なる人間は、これに苦みて斃るべければなり。余は、わが米國西部のある都會に住める、鋭敏なる一政治家が、余に告げて『わが瑕疵の爲めに却つて成功した

(189)

(190)

る多くの政治家を知る』と言ひし事あるを記憶す。又、イリノイ州の前知事たる、他の一人も、余に語りて曰へらく『人若し何事かを知れば、一隅に屏居して、謙讓なるべし。されど、無識の孔雀は、慌しく周旋跳躍し、遂に非凡なる發見をなす』と。

大言壯語には、又、話説者自身が、不知不識、わが理想を表明すと云へる利益あり。そは、種々様々に彼を慰撫して、その理想を残らず拙き出し、彼をしてこれに止住せしむ。英人の旅行したる者は、一般に、その修養の爲めに、生來の氣隨氣儘より晒ふべき極端を去り、これに快適の調子を與ふ。而して又、彼等は、他の國民が英人に對して、その事業を尊敬せるを見、愈々この自然的性情を増長す。ルイ十四世の風采と態度とは、斯かる偉大の君主には、充分相應しきも、他人に在つては、滑稽なるべしと稱せられしが、英人の名に伴ふ聲威も、亦佛人若くは自耳義人の荷ふ能はざる、一種自信力の強大なる舉動を思はしむ。彼等は要

するに、英國の價値に關する問題に就いては、大々の破格の口調を以て、これを論じ得るの自由を感ず。

英國のある婦人は、曾てライン河の船中にて、一人の獨逸人が、わが一行を外國人と稱するを聞き、『否々、我等は外國人にあらず。我等は英人なり。外國人は汝なり』と叫びたりと云へり。英人と佛人と相争へる話は、倫敦に於て、毎日の如く、耳にする所なり。双方共、鬪ひを開く事を欲せざりしも、その夥伴がこれを強ひ、終に、他人を交へず、二人のみ闇中にて、短銃を以て鬪ふを約し、乃ち蠟燭を消すや、英人は敵を傷けざらん爲め、高く煙突に向つて發射し、かくして佛人を壓伏したりと。彼等は異邦人に對して毫も好奇心をもたず、いかに珍しき事を告げらるるも、頻りに『オー、オー！』を連呼するのみにて、終に人をして、彼等は、いかなる助言を與へらるるも、これを顧みずして無智の儘に死すべしと断定せしむ。この自負心には殆んど際限を見ず。たゞ比較的理智の明なる者が、

(191)

大に力めて、直白ならんとするあるのみ。

かゝる誇言の風は、あらゆる階級を通じて行はれ、タイムス新聞より、政治家と詩人とを通じ、ツァーツワース、カアライル、ミル、シドニー・スミスを通じて、イートンの少年學生に及べり。國家經濟の嚴肅なる論策、哲學上の論文、又は科學の書にさへ、この忌彈なき國民性が、此上もなく無邪氣に臚列せられたるには、何人も一驚を吃せざるを得ず。極めて柔和にして且つ學識深き一人の紳士がその穀物條例を論じたる一小篇の中に記したる文に曰く『貌列嶺帝國は、假令バークレイ僧正の説の如く、高さ一萬尺の鐵壁を以て圍まるゝ事あるも、尙今日と同じく、その富に於て世界の他の部分を凌駕すべし。この富の低き意味に於ても、又、その一層重大なる自由、道德、及び科學の意味に於ても』と。

英人は、その貿易、工場、公衆教育、乃至一般選舉主義が、米國と同一の社會構成を、及ぶ限り英國に生起しつゝあるに拘らず、尙米國の社會組織と云へば、

これを嫌惡す。米國は經濟家の天國なり。破滅の原則に就いては、必らず引かるる幸福なる例外なり。されど、英人が直接米國に就いて語るや、島民輒ちその學說を忘れ、却つてこれを貶するの好話を想起す。

されど、この小兒らしき愛國心も、その若干の代價を覓むる事、すべての狹量の例に洩れず。英人の植民地における權柄には、親切といへる根基なし。彼等は、その技術と能力とを以て統治す。彼等は親切といふよりも、寧ろ公正なり。従つて、その勢力の弛みし時、未だ曾て依頼すべき好情を贏ち得たる事なし。

國家、州、若くは都市を本とせる如き、粗大なる地方的特色も、その眞實の特色なき場合には、或は有用なるべし。されど、吾人はかゝる偶然的境界に執着すべきにあらず。個人的異采は常に國民的異采の上に凱歌を奏しつゝあり。形而上學の範圍に於ては、希臘、英國、乃至西班牙の學問と分つべき塀牆なし。エソツプ、モンテー、セルヴァンテス、サーデイ等は、世界の人間なり。吾人の國旗を、

(194)

食卓の上にて、或は大學の中にて打振るは、喧嘩にして殺風景なる消防隊を、禮儀正しき交際界に繰込むものゝみ。自然と運命とは、絶えず吾人の痴行を監視しつつあり。自然は、吾人が昂々として直行する時、顛倒せしむ。而して、恰もこの國民的矜誇の點に關して、歴史に奇なる例證あり。

カッパドシアのジョージは、シリアのエピファニアに生れたる、賤しき佞媚漢なりしが、軍隊に豚肉をば納むる利益多き契約を得たり。悪徒にして密告者なりし彼は、富を造りて、不正を行はざるを得ず。彼は錢を蓄へ、亞利亞教を奉じ、書庫を建て、叛徒に推されて、アレキサンドリア府の僧正の位に陞りき。紀元前三六一年、ジュリアン帝の來るや、彼は獄舎に打込まれしに、市民暴起して、獄舎の戸を破り、彼を私刑に處したり。是れ當然の刑なりき。然るに、この結構なる棍徒は、遂に芽出度く、英克蘭の聖ジョージとなり、武士道の守護神となり、勝利と禮儀の表號となり、而して、世界善良の人類の誇となれり。

訝むべきかな、質實にして眞理を語る英人が、騙詐漢の末に出でんとは。訝むべきかな、この新世界も亦これ以上の幸運を掴まざりしとは、——この廣大なる亞米利加が、盜賊の名を負はんとは。アリメゴ・ヴェスバッチは、元セヴィルの漬物商にして、一四九九年、出で、ホゼダの配下に屬し、その最高の地置も、僅かに一度も出發したる事なき、探検船の水夫長たるに過ぎざりしが、この虚言者の世界に於て、コロンブスを排斥せん事を圖り、終に、わが不名譽の名を以て、地球の半面に洗禮を施したんぬ。かくて、何人も石を投ずる能はず。吾人は、開祖に就いては、同様に悲惨なり。不信の漬物商は、不信の豚肉商と差引す。

第十章 富

(195)

英國の如く、富に向つて、絶對的に臣服せる國は、他にある事なし。米國に於ては、若しわが大なる賁財を有する徵證を願はず時は、その必らず何等らの辯疏

(196)

を要せしかの如く、一點羞耻の色を見る。されど、英人は心よりその富を誇り、これを以て、最後の左券となす。一種粗大の論理は、あらゆる英人の精神を支配せり、——君若し價值あらば、奚ぞこれを良き衣服に示し、馬車に示さざると。葡萄酒の一樽もなくして、人は如何ぞ紳士たるを得ん。ヘイドン曰く『今や、總ての人をして、その資力に相應する生活を營ましめんと、懼るべき決議あり』と。この中、一味の宗教的信念を混す。彼等は猶太の律法を奉じ、聲も高らかに誦すらく、汝の生命は地上に長かるべし。汝は男兒と女兒と、家禽と家畜と、酒と油とをもつべしと。これと同一の比例に於て、貧に對する辱罵あり。彼等は有福の人にあらざれば。代議士に選ぶを欲せず。ある英人は、その家産を失ひたる爲め、憂悶の極、終に死せりと傳へらる。侮辱の最大なる語を『乞食』となす。チルソンも曰く『財産の缺乏は、余が到底打克つ能はざる罪惡なり』と。シドニイ・スミスも曰く『貧は英國に於ては汚名を受く』と。又、近時の一文士も、ある

民間學者の生活を論じて、『國庫の空虚に基因する畏るべき道德的退歩』に及びし事あり。讀者はこの感情が、斯くの如く明白ならざるも尙深刻の含蓄を以て、現代の小説、物語中に潜めるを見るべし。而して、番にこれ等のみならず、傳記に於て、公會場裡の投票に於て、説教の調子に於て、食卓談話ダイナミックに於て、これを見るべし。

余は、頃日、ウツドの『アセネー、オクソニンセス』を繙き、言ふ迄もなくこのオックスフォード二百年の學者を收めたる記録の中に、富以外、他の標準を搜らんとしたり。されど、余は、この中に於ても、他の大概の書に於けると同じく、二種の耻辱を發見しき。即ち第一は、教會と國家に對する不忠實、第二は、貧しく生れ、若くは貧に陥る事なり。英國の自然の果實の一は、殘忍なる財政なり。經濟學者マルサスは、労働者の子の爲めには、別に食物の貯へられざるを發見しき。一八〇九年、議會の大多數は、下院のフラー氏の語を假りて、其主張を

(197)

明にしき。曰く『諸君若し國を愛せずんば、これを去るも可なり』と。サー・エス・ロミリーが、小兒を、その家庭より四十哩以上離れたる所にて、年期奉公に使ふ事を、教區役員に禁ずべしといへる法案を提出するや、ピールはこれに反對したり。而して、ウォートリイ氏も駁して曰く『最高の階級に在りてこそ、家族的情味を養ふは、好き事なれ、下層人民の間に於ては、これと趣を異にす。寧ろ、小兒をば、これを墮落せしむる貧民の手より取れ。然り、而して製造業に小兒を用ゐるを禁ずるは、非常なる商業上の損害なり。何也、その結果、勞働賃銀を高め製造品の價額を上げればなり』と。

英國に於ける、事實の眞に對する尊敬は、その匹儔として、唯富に對する尊敬の一あるのみ。索遜人が富の製造人たるは、その技術の矜誇にして、同時に、獨立を愛する熱情の結果なり。英人は、何人も自己の爲めには自己自ら注意せざるべからず、その境遇を改善する能はざるも、他人を恨む能はずといへる事を信ず。

(199)

我負債を拂ふは、彼等の名譽の國民的眼目なり。大藏省と東印度商會より、小商人の店に至るまで、皆その支拂能力を有するが爲めに繁昌す。貌列嶺軍隊も支拂能力を有し、その取る所のものに對して拂ふ。貌列嶺帝國も支拂能力を有す。蓋し、莫大の國債を荷へるに係らず、その價額が騰貴すればなり。一七八九年より一八一五年に至る迄、彼等は重税の苦痛を訴へながら、この巨額の租税を以て佛蘭西に反對せし歐洲列國を扶持せしが、尙英國は此間、未だ曾て他の國民の歴史に見ざる速力を以て、年一年と、その富を増しき。租税の輕重は、取るところの額に依つて計るべからず、残る所の額に依るべしとは、彼等の格言なり。支拂能力は、英人の觀念にも、その機械的構制にも存す。水晶宮も、その自ら拂ふに至る迄は、正直と考へられず、——いかに便利なるも、美なるも、光輝燦然たるも、自ら支へん事を要す。彼等は快速力の汽船が損耗を來すと知る間は、遅き汽船にて満足す。彼等は、勞働と節儉と、二重の方法を以て、論理的に前進す。その家庭

(200)

は、何れも精細なる經濟を現し、米國の家族に見る如き、計算無き亂暴の出費を爲さず、彼等は拂ふ能はざれば、購はず。何也、彼等は、米人の如く、明年の好運を預定せざればなり。而して、彼等は平然として曰ふ、余はこれに堪へずと。紳士も、二等車或は二等船室に入るに躊躇せず。經濟家とは、わが資力と野心とを相應せしめ得る者、若くは、わが性格を表すに足る出費を以て、一年の計を整全し、未來の一日をもこれが爲めに窮迫に陥らしむる事なき者を謂ひ、斯の如き人は、既に生活の主にして、即ち自由民たり。パーレー卿、その子に書を與へて曰く『人はその収入の三分二以上を平常の費用に供すべからず。不時の費用は、必らず残りの一分を要すべし』と。

價値を造出さんとの野心は、各種の能力を喚起し、政府を一個の産業團體となし、あらゆる家を工場となす。性急なる功利的傾向は、一切の才能を卓布オラッキンに括くくまれて妥臥せしめず、——能ふべくんば、蜘蛛にも絹の靴下を織る事を教へんとす。

他人より多く食はず、若くは餘り多く食はざる、一人の英人も、他の歐洲國民に比して、一年間に三倍の時間を勞働す。換言すれば、職工としての彼の生涯は、他の三人の生涯に匹敵す。彼は迅速に力作す。一切のもの、英國に於ては、急歩なり。加ふるに英人は、かの現代を過去のあらゆる時代より分つところの駭くべき機械を創製し、之に依つて、その生産力を増大したり。

現代史中の奇異なる一章とも云ふべきは、機械商の發展なり。六百年前、ロージャー・ベーコンは、晝夜平分の理を説明して、曆法改正の必要を論じ、一年の長さを量り、又、火薬を發明したるが、彼明に告げて曰く、(さながら、その高く聳ゆる牢獄の密房より、五世紀を隔て、吾人に臨めるもの、如く)「機械は、全速力を出したる撓走船よりも、尙速に船を駛らしむるに至るべし、且又、この船を行するには、水先案内の外、何者をも要せざるべし。車も亦動物の助を假る事なく信すべからざる速度を以て疾走するに至るべし。最後に、一對の翼を備へて、鳥

(201)

(202)

の如く、宮中を翔ける機械を造らん事も不可能と云ふべからず』と。されどこの秘密はベーコンと共に眠り、以來六百年間、彼の言葉は實現せられざりき。二世紀前、材木を鋸る^{のこぎ}仕事は人の手を待ち、車輪は木軸の上を滑り、土地は木製の犁にて耕されたり。従つて、ワットとステイブンソンとが、蒸汽を以て、^{スチムボンプ}壓水唧筒と力織機とを動かす方法を教ふる迄は、炭坑を有するも、或は、織機を改良するも殆んど用をなさざりき。大なる進歩は、すべて最近二百年のものに係る。頃日物故したる、模範的英人、サー・ロバート・ビールの傳が、その口繪として多軸紡機^{スピニングスピナー}の畫を挿めるは、極めて至當の事なりとす。多軸紡機は、即ち彼の生涯を織成せるものなり。ハーグリーブスは多軸紡機を發明したる後、工場の中に死しき。アトクライト出で、この發明を改良し、機械は九十九人の仕事を省くに至れり。即ち、その一臺は、百人の人間が以前に成したる丈の仕事を成したるなり。この機械は更に改良せられたり。されど、職工は屢々その賃銀の爲めに同盟罷工をな

し、僱主に對して反對の團體を組み、一八二九年より翌三〇年に亘る間には、かかる妨害の爲めに、この事業は殆んど廢類に歸せんとするが如き形勢となり、紡績職工の續々白耳義又は米國に向つて移住するに至りて、大なる恐慌を惹起しき。鐵と鋼鐵とは甚だ柔順なり。一揆を起さず、不平を訴へず、顔を擧めず、或は同盟罷工をなさず、移住せざる所の紡績職工を造らん事は望むべからざるか。ステ^フーリー^{ブリッジ}橋に於ける暴動の後、マンチェスターのロバーツ氏は、數多の僱主の依頼を受け、この平和なる労働者を造りて、神の造りし好争的労働者に代へんとしたり。少許の試みの後、彼は成功して、その自動紡綿器に特許を受けたり。僱主はこれを悦びて、『工業社會の秩序を恢復すべき運命を有するもの』と言ひしが、この機械たる、實に小兒の手を假りて、線條の斷れたるを繋げば、他に何等の手續を要せざりしなり。アトクライトが家内の紡績業を斃したるが如く、ロバーツは工場^の労働者を斃したり。英國工場の機械の力は、六億の人間に匹敵すと云はる。

(203)

(204)

換言すれば、蒸氣の力を假る時、一人にして、五十年前、二百五十人を要したる仕事を成し得べし。生産の額亦これに稱ふ。英國は既に業にこの勤勉なる人種と饒なる地味と、水と、木材と、石炭と、鐵と、都合良き氣候とを有せしもの、六百年前、早くも貿易を以て、大に富み、『英國は北歐諸國の中にて最も殷富なり』と記録にも残れる程なりき。諾曼族ノルマンの一史家も記して曰く、『一〇六七年、ウイリアム王は、未だ嘗てゴール民族の間には見られし事なき多量の金銀を、英國よりノルマンディに齎し歸りき』と。されどこの勞力と、貿易と、自然力とに加ふるに、無數の腕を有し、毫も疲憊を知らず、晝夜間斷なく勞働する怪魔、蒸氣を以てしたる時、財富の集積は、全く數字を超越したり。蒸氣は最近九十年の原動力なり。汽管は、英國の人口と宮とに、更に四乃倍至五倍の英國を加へたり。ロイドの目錄には、四萬の船名を收む。小麥の産額は、スチュアート王朝の二百萬クオーター(一クオーターは二十五封)より、一八五四年の一千三百萬クオーターに躋れり。商業

界に於ける流通硬貨は、十億磅ポンドに達すと稱せらる。一八四八年、ジョン・ラッセル卿は、過去四年間に、英國人民は三億弗の資本を鐵道に投じたりと言ひき、されど、かゝる事々しき數字よりも、一層好き計量は、英國には、今現にその全人民を一年間坐食せしむるに足るの富ありと云へる見積なり。

賢明、多藝にして、あらゆる物を與ふる機械は、鑿を造り、道路を造り、機關車を造り、電信を造る。機械製造家フィットウオースは、鐵條を割きて、一時の百萬分一となしき。蒸氣は巨大なる大砲を扭ねぢて圈わとなす事、宛も彘を曲ぐるが如く、大地を捻ひねる火山の作用と、その威力を競ふ。そは赭禿の山を蔽ふに、造船用の檣樹を以てし、刀刃を造れば、以て銃身を斷つべし。埃及に於ては、林を養ひ、三千歳にして初めて雨を降らしめき。そは既に輕氣球に舵を操りつゝあり。次ぎの戦争は、空中に於て行はれんか。されど、英國に於ては、蒸氣よりも更に強力なる機械を銀行バンクとなす。この物、一度び、法案の骨子を認諾せんか、人口滋

(205)

(206)

殖し、都會起る。若し公債を拒まんか、人民は續々外國に移住して、國內虚しく貿易振はず、革命起り、王もその位を保つ事能はず。これ等の新なる動因に依りて、吾人の社會組織は形成せられき。蒸氣の爲めに戦争と商業とは改められき。各國々民はその古き萬能力を失ひ、愛國心の羈絆も用を爲さず。國民性は漸く廢れんとし、吾人は各好む所に抵りて住む。蒸氣は人をしてその欲する法律の下に住むを得しめたり。金錢は人の爲めに場所を造る。電信は戦争の虎狼を縛する柔き線なり。何也、電線は倫敦より出で、佛蘭西乃至全歐洲をつらぬくが故に、その傳送する音信が、一條の絲を以て、一信毎に、戦争に破らるべき國際關係を、次第に鞏固となせばなり。

かゝる要素の誘入は、今迄の所有者に、更に新なる財本を與へたり。遊樂を事とせる公爵は、國家は貴族院に依頼すと思惟すべし。されど技師は、蒸氣活脚スチームピストンがその一衝毎に、公爵の所有地の價値を増し、これに満たすに小作人を以てし、公

(207)

爵の資本を二倍にし、四倍にし、百倍にし、その子女の教育の爲めに、新しき方法と、新しき必需品とを供するを知る。勿論、この結果をしては、貴族を鑛山運河、鐵道、乃至蒸氣力を應用したる農業の株主として、競争の渦中に卷込み、時には商業にも従事せしむるのみならず、又大なる階級をも、同一の競争場裡に投すべし。北人民族の古き精力は、今や、新しき壯大の勢力と提携せり。新しき人は、地主に對して、わが優勢を證し、工場は城を買収す。嘗て氷に鎖されたるヘクラ火山の底にて、わが鑛マヒルを鍛へ、寂寥たる峽江の中にてわが撓走船を建造したる、スカンディナヴィアのソール神は、英國に來りて時代と共に進歩し、その鬚を剃りて、議會に入り、印度商會のデスクに向つて坐し、その大鐵槌をパーミングハムに貸して蒸氣槌となさしめたり。

英國に於ける、最近九十年間の富の造出は、現代史中の主要なる事實なり。倫敦の富は、地球上のあらゆる物價を決定す。總ての貴重なるもの、有用なるもの

(208)

或は人を樂ましむるもの、或は人を酔はしむるものは、盡くこの商業に吮^{すひ}嘔^えられ倫敦に向つて流る。或る英人の私産は、一年の収益百萬弗に達し、或はこれを超過す。幾十萬の宮殿はこの島を飾れり。わが消費物を購ふ爲めに、金錢を惜まざる、聰明なる中流社會の、感覺と慾情とを養ふべきあらゆる物、その才能を助けその手を武裝すべきあらゆる物、科學を助け、趣味を満足せしめ、慰藉を與ふべきあらゆる物、是等は總て公の市場に在り。都會の、田舎の、又は宗教的の建築に於ける、或は噴水、庭園、遊歩場に於けるあらゆる妙處、佳處は、英國の貴族が海を渡り、山を越えて、これを視、本國に歸りてこれを模造す。平和なる三十代の趣味と科學、エヴェリンの植付けたる庭園、イニゴー・ジョーンズとクリストファー・ウレンの建てたる寺院と慰樂の場、キボンズの彫りたる木版、内外國の美術家、シエンストーン、ポーブ、ブラウン、ラウドン、バクストン等の作品は、總て廣大なる羅市に出で、而して、財産世襲の法は、今日の所有者に、過去幾代の

恩恵を積業す。現在の所得者も、その欲する所のものを選んで、これを占取するの自由なる事、全く祖先の何れにも劣らずして絶對的なり。この安慰と榮華と、湖水と山嶽、耕地、牧場、公園、宏壯なる城、現代的別墅と、——總ては完全の秩序を以て並存す。英人は革命を行はず、近衛騎兵は王に命令せず。巴里人の叱^チ罵^マと防柵^{パルク}なく、一揆なし。有るものは即ち睡げなる習俗、日毎の正餐、酒、エール酒、麥酒、杜松子酒、乃至睡眠。

かゝる創製の力と、かゝる獨立を愛する勢情とを以て、財産權は理想的完全に到達せり。そは國民的生命の血として感せられ、且つ論せらる。各種の法律は財産に及ぶ限り安全なる基底を與へん爲めに制せられ、これを固定し、若くは取引するに就いての規定は、斷じて恐人を許さざる公職に於て、最も巧慧なる頭腦を煩はす。財産權は、重罪と謀反とを犯さずば、蹂躪する能はず。家は王と雖も入る事を得ざる城廓なり。銀行は王と雖も鍵を有せざる金庫なり。所有の甘味に聊かに

(209)

(210)

ても酸氣を帯びんか、英國に於ては、これを検査して滓渣をも残さず。授けられたる権利は、莊嚴なる物なり。絶對的所有は、最も貧しき自由民にも、公爵と同一の利子を與ふ。高さ石塀と盒羅鎖エビゴウを附けたる門扉とは、孤獨を欲する所有者の絶對的意志を表明す。自負心の過大より生ずる間想は、皆高價の思慮を以て、極めて詳細に、石と鐵と、金と銀とに實現せらる。

ある英人は、大后陛下が御苑の柵を、少しく我所有地内に進め、以て車道を造りて、通路に出づる一哩を省かん爲め、その権利を得んと欲するを聞きぬ。これを聞くや否や、彼はその柵關くわんを改めて、キヌマの城壁の如く堅固なる石塀となしぬ。かくて、全歐洲を擧げて、彼にその地所の一時だも賣らしむる能はず、若くは賠償に依つて和解せしむる能はざりき。英人が狂想を樂むは、これを以て、わが無上の自由を表す證據となすなり。サー・エドワード・ポインテンは、カデンハムのスピック公園に於ける、眺望絶倫の絶壁上に、長き穀倉の形をなせる一屋

を造りしが、その眺望ある側には、一個の窓をも設けざりき。ホレーヌ・ワルボ

ールのストローストロウ丘も、ベックフォードのフオントヒルの御堂も、狂想的なり。

ニユースレッドの御堂は、バイロン卿の手によりて、同じく狂想的となれり。

されど、この富の創造の、最も誇るべき結果は、そが個々の市民の自由なる行使に任せたる、偉大にして節度ある勢力なりとす。社交的世界に於て、今日の英人は最上の運命を有す。彼は平服の王なり。彼は最も力強き保護の下に歩み、最良の人と來往し、最良の教育を以て身を堅め、富に依つて扶助せらる。彼が英人の名とこれより生ずる偶然的事情と、皆彼を聲明する喇叭の曲奏なり。かゝる特權は、彼の冷靜なる態度と合して、王の階級の不自由を伴はざる、王の勢力を、彼に賦與す。余は歐洲における、何れの君主の境遇よりも、中流以上の英人の境遇を擇ばざるを得ず、——旅行に就いても、社交の機會に就いても、學問研究の便宜に就いても、或は單なる慰樂と家族間の健全なる關係に就いても、然り。

(211)

(212)

斯くの如きは、即ち英國の富なり。この一個危然たる集團は、何れの點を吟味するも、精美ならざるなし。これが原由は、英國人民の性情の富なり。貌列嶺の奇蹟は、その豊盛なる天稟なり。その英傑は常に己に劣らざる人物を以て圍繞せられ、各々強さ百人に敵す。而してかゝる人物の富は、更に各個人の能倣に依つて代表せらる、——彼は過剰の精力を有し、贏し得べき力量を有す。英人は斯くの如く殷富なり。而して、彼等は地球の臟腑に根を下したるが如くに見ゆ。何也彼等は肉體的に肥潤にして創造的なればなり。

されど、人若しわが使僕の爲めに指揮せられざらんと欲せば、これが監視を解るべからず。人間は賄しき發明者なり。常にわが身體の構造より、新なる機械の暗示を取り、わが解剖上の秘密をば、鐵、木材、又は革皮に應用して、世界の仕事に必要な作業を行はしむ。されど、結果を見るに、機械はその使用者を去勢せり。人間は、織物を造るに依つて得る所を、一般の力に於て失ふ。故に、織物

を造るにも、飲食に於けると同じく、節制の必要あり。人間は蠶兒たるべからず。國民は蠶の幕屋たるべからず。強壯なる田舎生れの索遜人は、工場に入りて、かのリースターに於ける靴下製造人に、マンチェスターに於ける柔弱の紡績職工に退化す、——蜘蛛となり、針とならんとして、既に遠くその途を進めり。同一の手工と間斷なく繰返す労働とは、人の發達を阻害し、留針磨き、扣子造り、又は其他の専門職工たらしめん爲めに、その體力、睿智、乃至自由の想像力を褫奪す。而して、靴紐の流行が扣子を排斥し、木綿が亞麻に代り、鐵道が轉關を無用となし、或は共用地が地主に圍はるゝ如き事ありて、一朝、工業上の變化を生せんか、全市を舉げて、蟻の塔の如く、犠牲に供せらる。社會は分業の弊害と、及び最善の國家經濟は人民を保護し教育するに在る事とを警告せられつゝあり。何也、かゝる危急存亡の秋に於ては、思慮詳密にして、新なる事業を選択し、且つわが智能を新なる労働に應用し得る者のみが生存して、他は盡く壊敗に歸すべければ

(213)

(214)

なり。而して又新なる禍患あり。英人は、牛乳が滋養なく、砂糖が甘からず、麵包が満足ならず、胡椒が舌を刺戟せず、膠が粘著せざるを見て、今更の如く、その工場、店舗に於ける食物、藥種、殆んど一切の製造物の不正を認めて仰天せり。眞の英國に於ては、あらゆる物が、假偽にして賈造なり。こは又、商業といへる大なる機械の反動を示す。余は、かの絶えず低賣（ポウチ）を強ひ、従つて製品の劣悪を必要としたる原因は、誠實の缺乏にあらずして、寧ろこの商業の專横なるべしと察す。

機械は、氣球と等しく、これを御する事困難にして、飛行家を乗せたるまゝ、遠く飛び去らんとす。蒸氣は、初めより、叱咤し、叫號して、人を警戒したり。そは怖るべき爆發力を有し、機關手を壓碎す。機械師は機械を造りて、これを監督したり。されど機關手と火夫とは、この怪物を馴らし、指揮する方法を學ぶに際して、幾人となき、生命を失へり、然もこれより更に拘束の困難なるは、紙の

(215)

翼をもてる毒龍「金錢」なりとす。大藏大臣と通商局と、ビットとピールとロビンソンと、其議會と、一世とは、舉げて謬りたる原則を採用し、わが實際には窮阨せしめつゝある國家をも反對に富裕としつゝある如く信じて、その墓に入れり。彼等は破壊的方法をも、策の得たるものとして、互に祝辭を交換す。逼迫（クリシス）は何故に商業に現るゝか、物價は何故に高低するか、紙幣は如何なる危害を生ずるか、これ等を明にせる商人は殆んど稀なり。國家繁盛の絶頂に於て、他國を併合したる際に於て、汽船、停車場、市街等を建設したる時に於て、無量の金銀を輸入したる時に於て、大藏大臣と多數經濟家の莞爾として笑を漏す時に於て、其裡面を觀察すれば、麵包は飢饉の相場に騰貴し、郷民は已むを得ずしてその牝牛と豚と農具と僅少の所有地を賣り、而して、貧民救助税は戰慄すべき割合に上りて、將に破産の悲境に墮せんとす。貧民救助税は、支拂能力ある階級の血肉を啜り、農夫と勞働者とを、強ひて他國に移住せしむ。經濟界逼迫の横道より來る慘苦は、

(216)

又、毎日の如く、人工的行政の横道より來れり。

斯くの如き富を、英國は、常に新しく、常に豊に、且つ愈々多量に贏けつゝあり。されど、茲に疑問あり、曰く、英國は、國民最上の富といへる點より見て、有理なる使用の方向に、その一步を進めたるかと。吾人は餘剰の資本を用ゐる態度を以て、國民の睿智を測定す。而して、英國に於ても、上記の如き弊害の點より見て、多少の賠償の企てられざるに非ず。即ち收得せられたる金の一部は、頭腦に復歸して、學校、圖書館、僧正、星學者、化學者、乃至美術家を購ひ、他の一部は、その節制なき社會組織の損傷を修整せんが爲めに、病院、貯蓄銀行、職工團、公園、その他慈善、慰樂の便宜を設けたり。されど、かゝる解毒劑は、恐ろしきまでに功能なくして、慘害は更に根本的の救治を必要とし、その手段としては唯時と一層單純なる社會構成とあるのみ。現在に於ては、英國は能く其富を管理せるものにあらず。そは僅に好き英國たるに止まりて、神性を備へず、若く

は滯者にして教練を経たる精神にあらず。英國も亦是れ運命の流れに漂ひて、末は一般的大破綻の中に滅亡を免れざる一個の犠牲たるのみ。

加之、英國はかゝる過失を犯せるが爲めに、主犯者と目指さるゝの大なる不幸を有す。英國は費用といへる物が、生殺の權を握れるに對して、責任を負はしめられざるを得ず。無量の人格と智能と忍耐とを、野鄙なる目的に傾倒せる英國の隆運、及び其榮華は、直にこれ物質主義の憑據なり。英國の成功は卑劣の富の勢力を強む。陋しき利得が、文學美術を征服するに至れる時、英國の成功其ものが、主義を拋棄して皮層に隨喜したる結果に外ならざる時、何人か、青年に向つて清貧と智識とを薦むるを得んや。無意味なる些事微物の文明、金錢と費用の文明、感覺の學問は起れり。而して、及ぶ限り多くの障害を、人と目的との間に挿入する傾向は起れり。いかに剛膽なる人間も、これに反抗して、成功を收むる程の元氣を有せず。是に於てか、英國に於て、その青年の常に念頭に置かん事を要

(217)

(218)

するは、男らしき生活の目的にあらずして、重き費用に堪ふべき手段となれり。この費用は幼稚の時期より生ず。多数の家族は不幸と考へらる。従つて、少年の死亡したる時、費用の原因の消滅したる事は、その慰藉の一なり。

第十一章 貴族

英國社會の封建的性質は、今や、漸次廢滅に歸せんとして、平民的傾向に比すれば、殆んど光輝なし。權力と財産との不公平は、共和主義の神經を刺衝す。宮殿、會館、別墅、塼壁を以て圍みたる園囿等は、英國全土に散在して、王城とその莊嚴を競へり。大館の多くは、ハッドン又はケッド・ルストーンに於けるもの、如く、美しき荒廢を示す。その所有者は未だ普てこれを見ず、或は一度もこの中に住まず。この豪華なる殿堂を建てたるものは、嫡子相續法なり。而して、余は察すらく、何れの旅客も、余と同じく、『これらの遺物が全く地に委し去らざる前

に來りしは幸なり』との感想を生ずるならんと。嫡子相續は、英國に於ては、その財産及び制度に關する基本的規則なり。法律、習慣、品行、乃至人間そのものも、その容貌も、これを實證す。

社會の構成が貴族的なると共に、人民の趣味も忠節を重んず。貴族の邸宅、姓氏、及びその態度は、人民の想像に媚び、これに依つて必要な擁護を護得す。傷つきたる信仰と、窃取したる特權と、宮廷の放肆の爲めに社會の蒙りたる殘害と、これらの事實にも係らず、吾人はチャールズ王が、王黨員と共に『その權能に復歸する』の一條を讀む毎に、彼等と、これに忠實なる英國人民とに左袒せざるを得ず、——王が無情の小人にして、その黨員も神に見棄てられたる剽盜に過ぎざるを知ると雖も。然り、英國の人民もこれを知れり。されど、固定の統治といへる、明瞭なる觀念は、故實的名稱と相合し、歐洲の記録的及び口碑的歴史と相合し、更に猶太の宗教及び世界最古の傳説と相合して、少許の不法なる事實の

(219)

(220)

爲めに、又靴屋と菓物賣子の政治の爲めに、一朝にして破摧せらるゝには、餘りに好まじき幻像なりき。平民の希望も、黨人の利害と同一の方向を取れり。何人も富裕となれば、土地を購ひ、その力に應じて、貴族の地位を堅めんとす。この地位は即ち彼が他日陞らんと欲する所のものなり。英國の僧侶は、貴族と同一視せらる。時と法律とはあらゆる點を完全に接合し、形成したり。本山と、大學と國歌と、通俗の小説とは、皆相合して、絶えず、現代の政策に侵掠せらるる門閥を支持するに力めつゝあり。英國人民の趣味は保守的なり。彼等は城樓を誇り、武士道の用語とその表號とを誇る。君といへる語すら、あらゆる國語の中にて、歴々を意味するに、最も幸運の稱呼たり。貴族の勝れたる教育と、その態度とは彼等を國民に推薦す。

ノルウエーの海賊は、その力の及ぶ所のものを得て、これを長子に傳へん爲めに保有したり。洗禮を受けたる諾威の海賊たる、ノルマンの貴族も、これと同一の事をな

しき。西邦貴族の東邦貴族に勝る利益は、斯くの如く、これを下層より充補したる點に在り。英國の歴史を成すものは、門戸を公開したる貴族階級なり。勇氣と技倆あるものは、進んでこれに入りて可なり。言ふまでもなく、この俱樂部に入るべき條件は、峻巖にして、その程度も高し。貴族の唯我的精神は、顯著なる價値を要求する、國民固有の性向を援くるものなり。海賊生活と戦争とは、貿易と政治と文學とに、その地位を奪はれ、戦争の君は、法律の君に、法律の君は、商人と工場主とに、地位を譲れり。されど、特權は依然として維持せらる。唯、これを獲るの手段に變化を生じたるのみ。

これら名門は、皆遠く溯りて、諾威人の海上に於ける冒險に、索遜人の陸上に於ける剛勇に、その基礎を有す。何れの貴族も、その草創に方つては、必ず何人かの自然的優越に依頼したり。これ等の英人が成就したる事業には、生命の危険を含まざるなく、且つ睿智と明確なる行爲の方針とを要せざるはなかりき。

(221)

(222)

而して、第一流の人物も、屢々、その名譽に對する資格を示さん事を挑まれ、若し能はずんば、これを更に優れたる者に譲るべしと迫られたるは、察するに難からず。『首領たらんほどのものは、身を以て橋となすべし』とは、ウエールスの族長ベネグリドランが、自らその部下を脊負ふて、残らず河を渡したる時の語なり。アルフレッド大王の母は、『誰にても讀み得る者に、この書を與ふべし』と言ひ而して、アルフレッドは、この條件を以て、その書を得たり。余は、領地の世襲が決して尸位素餐にあらずして、男爵、騎士、農民等、皆わが土地を守らん爲めに勤勞し、依つて以て、屢々、その武勳の記憶を新にしたるを信じて疑はず。デュー・ヴィーア家、ポーハン家、モーブレー家、ブランタゼネット家等、皆瞑想には沈溺せざりき。ウァーウィックの伯爵リチャード・ポーシャンに就いて、皇帝は、ヘンリー五世に謂つて曰く『基督教國の王にして、他に斯くの如く、明智と教養と男性的氣概とを完全に備へたる騎士を有するものなし』と、依つて彼に『禮儀の

父』といへる名を與へき。歴史家曰く『佛國に於ける英國の成功は、彼の生死と相伴ひき』と。

戦争の君は、その名譽を得たり。而して、いかに廣き領地を與へらるゝも、之れが爲めに、日夜恐るべき敵に對して、これを保護すべき義務ある限り、決して過當とはせられざりき。佛國に於ても、英國に於ても、貴族は、輒近に至る迄、戦争の爲めに生れ、戦争の爲めに養成せられき。且つ、決闘は、平時に在つても、彼等に戦争の危険を與ふるが故に、商人又は學者の階級が、その特權に對して挿むべき、嫉妬の念を滅除したり。彼等は、大なる賭物を望んで壯烈の競技をなす人間の如く思推せられき。

廣大の采邑も、常にこれを廣大に保たざるべからずとせば、決して乾俸と言ふべからず。生産的經濟は、威嚴の薪なり。上記のウァーウィック家にて、ポーシヤンより一代を隔てたる相續者は、即ちかのヘンリー六世及びエドワード四世に

(223)

(224)

仕へたる、剛氣の伯爵なりき、當時、彼の徽章たる、凸凹ある黒色の小竿を以てわが頭を飾らざる者は、殆んど自ら時粧に適せざるものとなすに至れり。彼が倫敦の邸に於ては、毎朝、六頭の牛を食ひ、何れの酒館も、彼の支給に係る肉を以て充滿し、又、彼の一家に出入するほどのものは、各々長劔に貫串して運び得る限りの、煮肉と燻肉とを備へざるべからざる有様なりき。

新しき時代は、新しき性質を需要し、海賊の道德は、開墾者、商人、上院議員、學者の道德に其地位を譲れり。禮節、社交の才、精緻なる作法の如きも、必らずや、この間に、地歩を占めたるもの。余はある所にて、一小史話を耳にしたり。こは細部の眞偽は何れともあれ、大體に於ては、確かに眞理を包含す。『ベットフオードの公爵は、如何にしてかの廣大なる土地を領するに至りしかと云ふに、彼の祖先の一人、極めて快活の性質にして、その大陸旅行中、かのラッセル氏の住みたるドルセット州の海岸を過ぐるに際し、茲にて、難破したる外國の一公子に

逢ひ、これと交を結びたり。公子は、彼をヘンリー八世に推薦せしに、王、彼と交るを悦びて、その掠奪したる寺領の中、大部分を彼に與へき』と。

或は謂ふ、貴族は諾曼以來一脈の血統にして、八百年間勞働を爲さずと。されど、事實は然らず。ポーハンは諾曼の何れより出でしや、デュヴィーアは如何。法律家、農夫、呉服商人は冠冕の下に潜伏し、歴史家に打眼色して、何事をも言はざらしむ。就中、敏腕の政治家を然りと爲す。彼等は、元來名家の出にあらず、好機會に乗じて、政府の爲めに一片の奉仕をなし、これに依つて、貂皮の衣を授けられし者のみ。

英人の國民的趣味は、彼等を廷臣の生活に導かずして、専らわが家庭の慰樂と獨立とを保全せしむ。その貴族は、田園生活に對する特愛を以て著はれ、田園の族と稱せらる。彼等の中には、倫敦に邸宅を有せざるもの多く、たゞ交際季節に方り、オペラを觀んが爲め、これを訪ふに止まり、幾代となく、その愛情と苦

(225)

(226)

心とを、わが郷家の建築、植木、修飾に集中す。彼等の或るものは、爵位を荷ふには、餘りに古く、餘りに傲慢なり。若くは、シェリダグがヨークに就いて言ひたる如く、『その頭を冠冕の下に隠すことを藐視す』。かくて種々の奇なる例證は英國家族の鞏固を示さんが爲めに引用せらる。彼等の格言にいふ、倫敦を去る五十哩の家は、百年間續くべし、百哩の家は二百年續くべし、以上これに準ずと。たゞ余は恐る、今後に於ては、時間の敵にして、同時に空間の敵なる蒸汽の爲めに、かゝる古き原則も破壊せらるゝに至らんかを。されど、サー・ヘンリー・ウオットンは、ハツキングム家最初の公爵に就いて曰く『彼はリースター州のブルックビーに生れき。この地は、彼の祖先が、大凡そ四百年間領有して、特に大に顯はるゝ事なき代りに、一度も埋没の不幸に逢はざりし所なり』と。ラックソールは曰へり、後にノーフォークの公爵と稱せられし、サライ卿、一七八一年、彼に告げて、その公爵領がリチャード三世に依つて創立せられし以來、正に三百年間

ノーフォーク騎士團體の家に屬したる紀念として、一六八三年には、その子孫の爲めに、一大祝典を擧ぐるの意ありと語れりと。ペピスは、一六六六年中、オックスフォードの伯爵の事を記せし序を以て、この名譽ある爵位が、既に六百年間その一家に傳はれる由を述べたり。

この悠久なる家族の傳統と、同一の地點に於て幾多の時代を經過したる事實とは、人の想像を培養す。こは亦國內各地の都會及び州區の名稱と關係を有す。

英國の地名は優秀なり、——一種傳說的諧調の空氣は、全國に瀰漫せり。國民の衣たる、叙事詩と歴史よりも、更に古き、この襯衣は、密に人の膚と觸接す。この名稱は實に又歴史を語り、原始的の野蠻なる觀察より成れる物語を含あり。

ケムブリッジ Cambridge は、ケムの橋なり。シェフィールド Sheffield はシール河の野なり。リースター Leicester はレーア河或はレイア河（今のソーア河）の野營なり。ロックデール Rochdale はロック河の小谿なり。エキセターはエキス

(227)

(228)

河の野營カストラなり。エキスマス、ダートマス、シドマス、ティンマスは各エキス河、ダート河、シド河、ティン河の河口マウスなり。オルサムは強き町タウンなり。ラドクリフは赭巖レッドクリフなり。其他皆斯くの如く、その命名の眞摯にして實用的なる事、米國人士をして最も感嘆せしむ。蓋し、米國の土地は、隈より隈まで、無意味の名稱を以て塗抹せられ、その人民が移住し來れる本國の脱ぎ棄てたる廢衣を着け、或は突嗟の場合、纒かに聖歌の調子を移せるのみ。されど英人はかのジャムブリカスの所謂『蠻人』にして、『その態度安定し、常に固く同一の語を使用す。この語は、又諸神の重んずる所なり』とす。

愛耳蘭の貴族が、その名を脚本より取る事は、昔より嘲笑の種とせらる。英國の侯伯は、わが名を以て、その領地を呼ばず、却つて、地名を以て、わが名と爲すこと、宛もその人がその養はれたる土地を代表するの觀あり。彼等は正しく、我を生みたる寺領地の形見カキを帶ぶ。これを見るに相互の縁毫も斷れず、却つて倫敦

の市中に於ても、アルジールの巖石、コーンウォールの野菜、デヴォンの礮礮地、ウエールスの鐵、スタッフォードの粘土等は、忘るゝ事なく、忘れらるゝ事なく、能くこれらに由つて生れ、且つ遠き昔よりの祖先と同じく、わが血液及び態度に、この巖石、水濱、谿谷、沼澤、乃至森林を運べる人間と、相識るが如し。こは又責任の尊重を暗示するの利益あり。感覺鋭敏なる人間は、嚴密の意味に於て自ら英國の或町、若くは或る郡區を代表せる名を負ひて、この中に義務と名譽との要請を聞かざるを得ず。

田舎の住居を愛する門閥の傾向は、農夫の有する自由の程度と相合して、英國の第宅を安全に保護す。ミラポーは、一七八四年、英國の地より、預言的に記して曰く、『若し佛國に革命起らんか、余は貴族の爲めに戰慄す。彼等の別墅は灰燼に歸すべく、彼等の血は急流をなして迷るべし。されど、英國の小作人は、その領主を最後まで擁護すべし』と。英人のわが領地に赴くは、その威儀の爲めなり

(229)

(230)

佛人は宮廷に住み、經濟の爲めに領地に赴く。彼等はその小作人と共に住むの心なく、これと和協せず、これより貢賦を誅求して、一錢をも剩さしめんとす。エヅリンは、一六四四年、プロアに於て記して曰く『この地には狼多く、屢々市中に出で、小兒を攫ふ。されど、此處にて絶對の主權を握れる公爵は、これを勦滅すべき命を下すを肯せず』と。

旅客は、舊家の積上げたる富の現證として、ピカディリイに散在せる宮殿、パークシャー衢のバーリングトン家、デヴォンシャー家、ランスダウン家を見るべく、降つて市中に入りても、市街の侵蝕に抵抗して、依然としてその廣袤を保てる若干の第宅を見るべし。ペットフォードの公爵は、倫敦の中心に、方一哩を圍み、或は圍まるゝ地所を有し、今この中に元モンターグ家なりし英國博物館あるのみならず、ウォーバーン衢、ベッドフォード衢、ラッセル衢等をも含めり。ウエストミンスター侯爵は、最近、數年間にベルグラヴィアと稱せらるゝ、一列の通

衢を建てき。スタッフフォード家は倫敦に於て最も高雅なる宮殿なり。ノーサムバークランド家はチェーアリング・クロスに近き地域を占め、チェスターフィールド家はオールドリイ街に残り、シオン家及びホールランド家は市外にあり。されど大概の歴史的邸宅は、商業、又は慈善事業の爲めに、其面目を變じて、現代的使用に供せられつゝあり。市中宮殿の多數は、又、貴重なる美術陳列室を有す。

田舎に於ける、私領地の廣袤は、更に一層堂々たるものあり。余は、バーナード城より公道に馬車を驅りて、ダーリングトンに向ひし途中、テイス河中の瀑布ハイ・フォースより、ラビイ城を過ぎて、二十三哩の間、クリヴランドの公爵の領地のみを経たり。ブレッダルペーンの侯爵は、わが所有地のみを通りて、海岸迄、一直線に百哩を行くと云へり。ササランダの公爵は、蘇格蘭を横斷して、海より海に至るまで、ササランダの地を領し、デヴォンシャーの公爵は、他の私領の外に、デルビイカンチ區の九萬六千エーカーを領し、リッチモンドの公爵は、

(231)

(232)

ツドウッドの四萬瓩と、ゴルドン城の三十萬瓩とを併有す。サセックスにあるノーフォーク公の園囿は、周圍十五哩に達す。一農業家は、近きころ、ヘブライツにて五十萬瓩を有するリュノイス島を購へり。ロンステール伯の所領は、議會に於て、八個の議席を有す。これ即ち寡頭政治の再來なり。一八三二年の改革前には、百五十四名にして、三百七名の議員を國會に出しき。選舉區商人が英國を統治したりき。

かゝる廣濶の土地領略は、更に愈々廣濶ならんとす。大なる私領は、小なる自由保有不動産を吸収しつゝあり。一七八六年、英國の土地は、二十五萬の法人及び個人所有者に屬せしが、一八二二年に至りては、所有主の數、三萬二千に減じたり。英國は狹しと雖も、私領の廣さを容る。貴族の天國は、全國に亘り、造船所、製造場、鑛山、鍛工場等と相伍して、少距離毎に點在せり。此勤勞と必要との雷轟より、一步を傍徑に轉ずれば、これと對照して、悠々たる安息と、文雅の

風が、彌々その度を高むるを見る。

(233)

余は貴族院出席者の概して極めて少數なるに駭きたり。五百七十三名の議員中平日に於ては、僅にその二三十人を見るのみ。彼等は何處にありやと、余の問ひしに答へて、或人曰く『領地の自邸にて、無聊に困むのみ。然らざる者は或はアルプス山中に、或はラインの上流に、ハルツ山中に、或は埃及に、或は印度のゲーツ連峯に在り』と。されど、かゝる冒險的興味を有すとすも、如何なれば、彼等は我事を閑却するを得るぞ。答へて曰く『オ、彼等奚ぞ我爲めに働かんや。英國の人民は總べて彼等に代りて勞働し、危害を及ぼす迄は、彼等を忍容す』と。強猛なる急進家も、忽然豹變して、侯伯に相應しき態度を取る事あり。一八四八年の四月十日（普通選舉主義の徒が公然運動を開始したる日）には、上流社會が初めて積極的に活動して、その利益を防護し、權門名家、各々監軍保民長官と並

(234)

んで、其の特選官と稱せられる、に至りしと云ふ。』之を外にするも、彼等何ぞ特に討論に與るを要せんや。かゝる際にも、ウエリントン公のあるあり。公は自らその衣囊の中に代表権五十を藏するもの、必要とあらば、直に彼等に代りて投票を爲すべし。』

されど、貴族院が政府の一部として存在せる爲めに、事實彼等は内閣の半数を占領するのみならず、財産と門地の威望は、彼等をして實際他の半数を任免せしむるに足るものあり。彼等は又實習の學校として、屬僚の官職をも分保す。この政權の專賣は、彼等をして自ら智力的及び社會的に歐洲の翹楚たらしむ。峻棘なる公務の衝に當るものは、少數の貴族法律家と貴族政治家なり。陸軍に於ても、貴族はその要樞の大半を充たし、これに盤費多く、盛榮にして、且つ獨占的なる調子を與へたり。彼等は生れながら饒に軍職の義務と危険とを擔ふものなり。されば、英國の貴族中、かの露國戰役の爲めに、その一家の何人かより、生命若くは

手足の犠牲を拂はざりし者は、殆んど稀なり。その他の方面に於て、貴族の牛耳を執れるは、國家的事件、及び財用の關係にして、又、趣味、社交の慣例、宴會及び私邸に於ける賓客待遇等の問題に就いても然りとす。概言すれば、社會が彼等に向つて要請する所は、泰然として坐し、公共的會合を司掌し、慈善を奨め、乃至、かの英人の感情に、極めて親善なる、禮容の實例を揚げん事、是れなり。

若し、今日の批評的精神より、この階級がいかなる奉仕を爲したるかを訊ぬる者あらんか。——則ちその効用を見る。然らずんば、彼等は疾くの昔に滅絶せざるべからず。効用の或るものは、容易に擧ぐるを得べく、更に隱微なるものは、意識に上らざる歴史の一部を成せり。彼等の制度は、社會進運の一步なり。何也吾人のいかなる名稱を以て侯伯を呼ぶに拘らず、何等かの形に於て、人種の到底貴族を生せずして已まざるは、尙その女子を生ずるが如きものあるなり。

英國の貴族は、生れながら厚富にして、權力を有し、逡邁にして、敏活、且つ

(235)

教養を経たるもの、あらゆる國を歴遊し、あらゆる國に於て、その英俊と交り、技工と自然のあらゆる秘密を目睹し、若し才違くして痴心を藏せば、更にあらゆる重要な世務の處辨を學べり。吾人は彼等に自己を貸さずしては、大なる事業を經營する能はず。而して、彼等の氣宇若しその位階と職分とに愜はんか、吾人は茲に完美なる言行の模範を見るべし。權勢は、何れの種類を問はず、必らず態度に顯るゝものなり。而して、仁愛の力、善を成すの才は、遂に匿すべからず、抑ふべからざる威風を與ふ。

彼等は、その地位に依つて喪へる所を恢復するものに似たり。彼等は譬へば、^{セント}聖ポール寺院の尖頂より社會を觀測す。従つて、平明の眞理を人々の口より聞かずとするも、各種各様の事物に就いて、その最善の相を看、煩瑣なる攻訐を要せずして、容易にその統體と主意とを推釋し得べき様に群埋集積せられたる事物を看る。彼等の嫺雅なる舉止は、總てその聲名を荷ふに堪ふ。而して、彼等には偉

大なる性質に取つて、實も美しき裝飾たる、單純と安息の風あり。

上流社會は、僅に系圖をもつも、思想を有せずと、米國人は云ふ。然り、されど彼等は儀容を有す。而して、驚くべきは無量の才智が、この儀容に向つて傾注する一事にして、斯くの如きは、英國以外に於て、決して見るを得ざる現象なりとす。彼等は自己の優越を自覺し、欲高者の階級に見る如き、厭ふべき野心的努力は、毫末もこれを有せず、その思想及び感情の調子は極めて清く、又、他の贅澤と共に、一代の俊秀を自由に我家の祝祭に招致し得る勢力を有す。

忠義は英人に於ては第二の宗教なり。彼等は法律を衣る事、裝飾を着くるが如く、其信仰を以て、五彩絢爛たるメイ・フェイアを行く事、宛も神像の間を行くが如し。貴族は何の用かあると問へる、一八五五年の財政家は、宜しく小兒は何の用かあると尋ねたる、フランクリンに學ぶべきのみ。彼等は自然の社會的教會にして愛する者と愛せらるゝ者と、互に他を稱榮する所の情性を鼓吹したり。禮節は、

祈禱が教會の儀式なる如く、社會の儀式なり。禮節は品行の學校なり。禮節は、これを養ひたる時代に對し、優しき恩澤たり。こは、濶大なる展望を以て、英人の生活を妝飾する一種の小説なり。こは中天なり。彼等の神仙禪と詩歌とを以て彼等の意識を充たせり。こは、貴族の教養たる範圍に於ては、眞に彼等をして敢爲、巧麗、修整、且つ洪量ならしめたり。

一般的根據より見て、總て容儀を整へ、若くは人物を仕立つるものは、大なる價值を有す。友情の歡を味へる者は、儀容の力に依頼する所の社會的保障が、輕佻にして趣味賤しき人間の侵迫を防ぐの作用あるを尊重すべし。何れの階級も爭ふて其階級の警備を勉むるに熱心なるは、彼等がその生活の中に眞實を發見したる標證なり。人若し、一旦、わが本性を正しく保持したる事を悟らば、貴族制度を恐怖するごときは、その自己に關する限りは、總べて、迷溺として一排して可なり。鑛坑の入口を守れる者は、そが箇拔審士なるか、水銀なるか、白銅なるか、

黒鉛なるかを問はず、殆んど社會が自己を缺きては立ち行くこと能はざるを自覺せず。眞實の人は、他の眞實なる者を容れ、且つこれと肝膽を披瀝するに躊躇せず。

加之、英國を、今日見る如く、金庫となし、博物館となしたる者は、彼等なり。彼等は、猛火に包まれたる都の中より、革命の爲めに沸騰せる國より、美術の傑作を引摺り出し、之を全世界より收めて、自國に搬送し、斯くしてこれを蒐集し、珍藏す。余は六百年、七百年、八百年、乃至かのウァーウィック城の如く、九百年の歴史を有する舊き第宅を見て、尊敬の念を起さざる事なし。余は公園の高き塀牆を是認す。何也、この裡に有するものは、鹿と雉とに止まらずして、アルンデルの大理石、タウンリーの美術庫、ホワード乃至スペンサーの書庫、ウァーウィック乃至ポートルランドの花繪、索遜の古文書、僧院建築、千年の星霜を経たる老樹、他所に於ては既に滅絶したる家畜の種類をも保存すればなり。かゝる田莊

(240)

に於て、兵火の毀壞、纔に收まりし後、考古學者は、或は羅馬の稀脆なる甕、或は將に碎けて土に委し去らんとせる埃及の木乃伊函が、未だ新に多くの塵を被らずして、連続せる歴史の系統を保ち、時に及んで、必ず來るべきわが説明者を待てるを發見すべし。彼等貴族は、その自矜と富との爲めに任命せられたる、人類の寶物掛りなり、圖書館員なり。

尙ほ又、英國の貴族には、その成すべき仕事ありき。ジョージ・ラウドン、クインティン、エヴリン等は、彼等に造園の術を教へたり。アーサー・ヤング、ベークウエル、及びメチは、彼等をして農業家たらしめたり。蘇國は、カロッデンの出づるまでは、單に蔬菜圃たるに過ぎざりき。アウル、サッサーランド、バツクローの諸公、及びブレッタルベーンの侯爵は、初めて、莖莖栽培法、牧羊場、小麥、排水法、造林術を輸入し、又、湖水、池等に於て、魚類を人工的に繁殖せしめ、狩獵地賃貸の方法を定めたり。彼等は、古き小作人の狂號と、これに同情

する國內新聞紙の狂號を顧みずして、根本的改革を施せしが、その結果、曾て三百萬人を養ひたる土地に、今や六百萬人は、従前よりも一層安樂なる生活をなせり。

英國の男爵は、何れの時代に於ても、當時の批評に依れば、常に勇悍にして豪爽なりき。沙翁が寫したる、客に厚きハムフリー公、ウァーウィック、ノーサムバーランド、トールポットの諸公は、精密に傳説と符合せり。エリザベス女王に仕へし大僧正バーカーの筆に成れる、シヨルスベリー伯の描寫、チェルベリーの自傳に現れたるハーバード卿、サー・ヒリッポ・シドニイの書簡と論文、考古學者フラーとコリンズの著述の中に保存せらるゝ逸話、ペビスとエヴリンとが記し留めたる、貴族生活の瞥見、ベン・ジョンソンの假面劇（ケニルウァース、アルソープ、ベルボア等諸貴族の家にて演せられたる）に記載し、若くは暗示せる詳細の事實より、降つてはアウブライが物せる、デヴオン伯の家に於けるホップスの生

(241)

(242)

活に至るまで、總て儀容の傳奇的様式を示す絶好の叙述ならざるなし。『アルカ
ダイカ』は、ウィルトン家にて、フルク・グレイル、ブルック卿の如き人々と雜談
の間に綴られき。而してブルック卿に至つては、その自作の詩が證明せる如く、
志操最も純潔なりき。余はミルトンをして『コムス』を作らしめたるラドロー城
が誠實の一家にして、見識と同情とを以て、これを演じたる人々が、氣高き家庭
に育ちたる事を斷言して憚らず。貴族の名簿を検すれば、詩人あり、哲學者あり、
化學者あり、星學者あり、道德堅固にして、情趣卓抜の君子あり。彼等は屢々天
才と學者の友たり、愛護者たり。而して殊に多く美術家に對して然りき。今日に
於ては殆んど何れの家も、高價なる書廊を備ふるを見る。

勿論、かゝる豪奢の光景にも、他の一面あり。勝利は總て僅に劣れる者の敗北
を意味す。城は傲然たる物なり。されどその中に居らざるを安全とす。戦争は不
吉の競技なり。されど、貴族制度の歴史にて、最も凶惡なる部分は、戦争にあら

(243)

ず。近代に至つて、貴族は、専ら兵馬の教育を受け、その頭腦は胃の爲めに痲痺
し、家に在つては、晏然として爲す所なく、肉肥え、情煽にして、陋むべき動物
と化しき。グラモント、ペビス、エヴリン等は、君臣相率ゐて劣慾を満たさん爲
めに入出したる不潔の巷を記せり。劇場より拉し歸れる賣春婦は、公爵夫人とな
り、その私生兒は、公爵となり、伯爵となりき。而して、曰く『若き男子のみ上
に座し、高年と謹直は寵を失ふ』と。王の賓客が王と試みたる議論は、『慙むべ
くして、俱に是れ泡』なりき。苟もわが頭腦を重んずる者は、これ等酒肉の朋友
が、平然として、王と交換したるが如き言語は、到底これを口に發する能はざる
べし。かゝる威力ある狂宴の論理的結果として、ペビスは、王の陥れる淺間しき
窮狀を記せり。これに依れば、王はその會議卓子の上に紙を見出すを得ず、衣裝
櫃の中には『一枚の手巾もなく』、唯『その頸に三本の飾紐』を有せしのみ。呉服
商人も文具商人も損失を被り、王を信用する事を拒みて、麵包屋も遂に麵包を齎

(244)

さびりしと曰ふ。これと同時に、英國海峽は獨逸艦隊の爲めに掃清せられ、倫敦も亦その威嚇を受くるに至りしが、この時、獨逸軍艦に乘組みたる者は、實に、年久しく王の欺く所となりて、給料の支拂を得ざる爲め、敵の召募に應じたる英國の水兵なりき。

セルウインの通信は、ジョージ三世の朝に、殆んど國家を解體せしめんとしたる、貴族社會の腐敗を曝露せり。曰く、諂諛と投票買買と爵位の榮譽と、曰く、淫蕩、曰く、賭博、曰く、騙詐、曰く、賄賂、曰く、詐偽、曰く、一年一萬金の爲めに争ふを小兒らしき不謹慎と嘲る侮慢、曰く、無思想、曰く人爵の光輝、曰く、國民に對する薄情と、是等は寧ろ教訓的也。讀者をして暫く巻を措きて、かかる惡徳を能く少許の富人にのみ留めたる、堅固の桎梏は、果して何ぞやと吟味せしむるならん。ジョージ四世の時に至つても、事態は毫も好良となれるを見ざりき。窓に板を架し、これより馬車に滑落ちて、竊に出遊したる腐腸漢は、歐洲

の恥辱とする所なりしが、その皇后も、その一族も、盡く惡評を蒙れるが爲めに遂にこれを雪ぎ去る能はざりき。

今上の治世となりては、宮中の儀禮大に整ひ、従つて貴族社會の不倫を遏絶するに至れりと思惟せらる。されど、賭博、競馬、縱飲、及び善妾の行は今尙ほ彼等を墮落せしめつゝあり。共和主義者は意のまゝに誹譏の材料を集むるを得べし。哀むべき逸話は數限りもなく、過去三十年間、世間に流布したる風説、即ち或は公爵にして碟を殘らず入質したる爲め、執達吏の處分を受けたりと云ひ、或は大なる公爵家も、その邸宅を觀物として生活し、その中一老公の如きは、錢を得て客に各室を縦覽せしむる間、椅子に乗りて、室より室へと、押し往かれきと云ひ、或は負債の爲めに流寓の生活を送りきと云へる如き、道聽途説の眞なるを證す。

バッキンガム家、ポーツフォート家、マルボロー家、ハートフォード家等の由緒ある名も、新しき光彩を添へず、却つて往々闇黒なる疑獄を惹起し、その不祥なる

(245)

(246)

オルレアン家の朝、佛國に於て、其『有名なる訴訟』に加へたる新なる段落に劣らず。忠信にして、公共的精神を有する貴族も、その巨大なる費用に進はれて困頓疲弊し、英國のメッセーナズとなり、ルクルズとなりて、大に美術文學を保護せんと志せる高名のデヴァンシアー公さへ、チャップワースの本邸には、一年に一ヶ月より住む能はずと曰べりと傳へらる。彼等は多數の第宅の爲めに食はるゝなり。されど、これを售ること能はず、繼嗣をしてこれを相續せしむべき規定あればなり。彼等は體面の爲めに肯てこれを貸さず、空虚の儘に、これを維持し、一年四千磅乃至五千磅の高價を拂つて、これに換氣を施し、その庭園を剪裁し、修治す。出費の大部分は、婢僕に係り、その數百を越ゆるの家、甚だ少からず。

彼等の多くは、單に懶惰を以て、譴めらるべき者なり。されど、彼等の懶惰は大なる厚生利用の資力を空費するが故に、罪惡の禍根たり。余の友會て余に謂つて曰く『彼等は或は地上の小造化たり得る者、然も、大概、詐欺師にして、花々

(247)

公子なり』と。カメル曰く『余は貴族と別戀を續くるに堪へず。これが爲めには遊惰にして、衣裝を飾り、且つ彼等の宴會に陪事せんことを要すればなり』と。余は察すらく、一種自尊の感情は、教育ある人士を、彼等の社會より遠ざけつゝあり、蓋し、貴族は容易に時代の教訓を受けずして、未だその地位の誇を改装する事を學ばざるに似たればなりと。天資靈慧にして、綜ねて家に巨産を擁し、且つ風流の聞えある一人の才子、會て、その友に語りて曰ひしは、彼等の家に入る毎に、彼等が大公鉅卿にして、自己が一庶民なりとの感情を抱かざる事なしと。歴々の家は、音樂者をも含めて、藝術家の種族と、決し、交際する事を爲さず。反對に彼等を峻別す。有名なる天才、ジュリア・グリシ及びマリオが、ウエリントン公及びその他顯貴の家に招かれて演奏せし時、一條の繩は、常に唱歌者と列席者との間に張られたりと傳ふ。

各貴族が盡く軍人なりし時代に在りては、彼等は慎密の教養を受けて、大に武

(248)

勇を輝したり。十九世紀に於ては、兵士の教育は、伯爵の教育よりも、單簡の仕事となれり。されど往時の教育は最も厳しく行はれし爲め、彼等は馬術のあらゆる秘奥に達したるのみならず、極めて危険の作業にも習熟し、この風、オレンヂ公ウイリアムの即位の頃に及べり。されど、比較的謹厚の者は、その子弟を文事の爲めに訓練したるが如し。エリサベス女王は、その思想を將來に運らし、サー・ヒリップ・シドニイは、その弟に與へたる書簡に於て、又、ミルトンもエヴリンも、各々平明にして温情に富める忠言を寄せたり。今日に至つては、英國の貴族乃至郷紳等、既に田舎紳士の生活を營み、穩固の費用を以て満足すべき準備をなせり。彼等は、市より市と歴遊して、パルチエ、スウィート、ワグネル、ボウデン薫香、芳粉劑、香丸、解毒劑等の製方を學び、種子、寶玉、古錢、その他種々の骨董を蒐集し、然る後、閑散の境に就きて、これ等の物を樂まん事を圖る。

貴族の子弟に智力的勞働を容赦する特權は、云ふ迄もなく、誤れるものなり。

『大學に於て、貴族は學位等に對する一般の試験を免除せられ、その權利に由つて、オノラリ名譽の學位を受く。之と同時に、彼等が入學、その他あらゆる場合に拂ふべき金は、甚だ高し』と。フラーが、その書に記せる外國人の觀察によれば、『英人は、其子が未だ成年に達せざる前に、これを紳士となすが爲め、その賢き人間たるもの殆んど稀なり』と。この溺愛は、長子繼承法を論じたる、ジョンソン博士の苦言の道理あるを證す。曰く『是れ單に夫々の家族に一個の白痴を出さしむるに過ぎず』と。

社會内部の革命は、今や、この階級にも及べり。偉大なる工業的技術の勢力は血液若くは姓氏の區別を許さず。現代的道具、即ち蒸氣、船舶、印刷、金錢、乃至一般教育は、これを取扱ひ得る者の手に屬す。而して、これ等の物の影響は、曩日、門地ある人々にのみ限られたる利益が、今や、廣く中流社會に向つて開放せられたる一事なり。威嚴が、その輕車を驅らん爲めに均したる道を、勞役は、

(249)

荷馬車に乗りて進むを得。

(250) 　こは日一日に顯著なり。されど余は其全英國史を通じて眞なるを信ず。英國歴史は、正しく讀む時は、其人民の頭腦の衛護なり。此處に、根本的に、活動的能倣を好遇する氣候と事情とありき。今勞働し、斷行する者は支配すべし。濃霧と、海と、雨との、宣言する特權、若くは公權平分主義に曰く、智力と個人的勢力とが法律を制せざるべからず、勞働と統治的才能とが統治せざるべからず、勞働が王冠を着けざるべからずと。余は、これと異なるものゝ僭せらるゝを識る。貴族とその左袒者とが、共に自ら快とする所のものは、前者が諾曼の直系にして八百年間、毫も勞働せずとの虚托なり。されど何れの家族も皆新し。古きは、その名のみ。而して、彼等は、これを擾さらん爲め、その記憶を以て、一の盟約を立てぬ。されど、名家と紳衿とを索究すれば、古き家族の急速に衰頽し、埋没して、絶えず、新しき血統より、これを填充しつゝあるを認む。門戸は、假令殿め

しく警戒せらるゝも、實は開通せり。従つて賄賂の力を許す。爵位の防柵たるものは、すべて却つて煩渴の徒を忿らしめ、賣物の價を増大するに足るのみ。ネルソンは開戦の準備を命じ、而して曰く、『さらば、貴族を得るか、然らずんばウエストミンスターウエストミンスターの御堂に葬られん』と。シドニー・スミス曰く『余は一切の空望を棄つるも、カンターベリーの大僧正を忘るゝ能はず』と。バークは『法律家のこの衆議院に在るや、單に候鳥のみ』と云ひ、更に一新語を附加して曰く『彼等も貴族院に入れば最上の錨を抛下す』と。

(251) 　次ぎの一踏歩は、紋章の廢滅に現れたり。貴族の特權が、中等社會に移ると共に、記標は信用を失ひ、閣下の尊稱は、靈臭く、且つ扱ひ難き邪魔物となれり。余は具眼者の既にこれに對して憤を含めるかを恐る。これ等は、假鬘、化粧粉、緋の上衣と共に、上代の遺物なり。寧ろ、顔料乃至文身と一括して、濠洲、ポリネシヤ等の酋長に贈るを利益とす。

(252)

無数の英人は、大學に於て教育せられ、儀容、能力、及び財産の特権をそなへて、進んで貴族の社會に伍入し、平等の地歩を占めて、彼等と對立し、屢々、名譽と勢望の競争に於て、彼等を凌駕しつゝあり。この修養ある階級は、大にして且つ絶えず増大す。今日、倫敦に出入して、所謂『高き社會』を成すものは、即ちこれ等の人々にして、有爵無爵、すべて七萬と算せらる。彼等がその眼を塞ぐ能はざる所の事實は、布位の貴族は、爵位に伴ふ不便宜を有せずして、而もそのあらゆる權力を有すること、及び富裕の英人は、世界最強の君主よりも、一層多大の順便を以て、現在、世界を横行せること、是れなり。

第十二章 大學

英國の大學中、其名簿に最も顯著の氏名を含めるを劍橋ケムブリッジとす。現時に於ては、此大學も亦牛津オックスフォードの長所を有し、その卒業生一覽は一層多くの傑出せる學者を

載す。憾むらくは、余が僅に一日の暇を以て、そのキングス大學禮拜堂、各大學に屬する美しき芝生と庭園、及びその學生教授の少數を見たるに過ぎざる事を。

されど、余は、屢次牛津より邀請せられしに乘じ、その植物學教授ダウベニイ博士、神學科の王定教授レジナスプロフェッサ、茲びにオリール大學の特別校友たる一勝友に宛てたる紹介狀を携へ、一八四八年の三月末日を以て、これを訪へり。余はオリールの友に客となり、この大學の傍に寓して、校資待遇の禮を受けき。

余の新しき友は、余に示すに、その步道、ボドレアン圖書館、ランドルフ美術館、メルトン會堂、その他を以てしき。余は許多の敬慮にして高尚なる青年を見たり。その中或るものは、心の平和の爲めに犠牲を献ぐるを厭はざるもの——其研究科目は、元より、余の容喙を許さざる也。彼等が情に篤く、群を好むの風は、余をして坐るにわがハートバート大學の青年を想起せしめしが、唯、余は此等英人が、その穩健にして磨上げたる儀容に於て、一段の價值を有するを認めざる能は

(253)

(254)

ざりき。食堂は皆檜樹の壁板乃至天井より成りて壯麗なりき。創立者の肖像は壁上に懸り、碟は食卓に並びて輝けり。一青年あり、上段の卓子に進みて、古めかしき食前の祈禱を述べたり。余は、この由緒ある式が、此處に於て幾代となく行はれたるを想察す。

英人の風習、或はその善性を見るべき、奇なる一證は、これらの青年が毎夜九時を以て出入を禁せられ、この時間より後に入るを許されたる遅刻者は、一々寮丁をしてその姓名を届出でしむる規定なり。更に明瞭なる證據は、最も惕厲の氣に饒なる貴族を含める、一千二百の青年の間に、未だ會て決闘を見ざる事實なり。

オックスフォード

牛津は、英國に於てさへ、古し。而して保守的なり。その創立はアルフレッド大王の時代に係り、若しドルイド教のフェリルト派が、この地に修業所を設けたりと云へる傳説を真とせば、更に溯りて、アーサー王にも至るべし。エドワード一世の朝には、學生の數三萬と稱せられ、この時最も宏大なる大學の開創十九

(255)

を見たり。チャーサーも、當時既にその基礎の堅き事、無窮に立てるものの如しと云へり。牛津の英國歴史に於けるや、有名なる人物を包羅し、島帝國そのものの學校にして、兼ねて英國を歐洲の學者に繋ぐところの連鎖なりき。エラスムスも、一四〇七年、欣然として爰に來れり。アルベリカス・ゼンチリスも、一五八〇年、この大學に慰藉せられ、扶持せられたり。波蘭の貴族にして、シラッドの公爵なりしアルベルト・アラスキーは、エリザベス女皇の容明を讃せん爲めに、一五八三年、英國を訪ひ、基督教會の大食堂にて演劇の饗應を受けたり。アイザック・カサウボンハ、ゼームス一世に招かれて、佛のヘンリー四世の許より來り、一六一三年の七月、クリスト大學に入りき。余はアシユモレアン博物館を見たり。こは是れ、エリアス・アシユモールが、一六八二年、奇什逸品の十二車量を送りし所。爰に又、實にアンソニー・ウッド及びオウブリーの獲物と英雄のオリンピックありて、一時の土も、光輝を放てり。何也、ウッドの著『アセネー・オクソニン

(256)

「セム」即ち牛津二百年の文人年表は、英人の儀容と器量とを鮮に留めたる記録にして、ブルチャスの『紀行』、『英國議會事録』と共に國民的紀念品なればなり。何れの方面に於ても、牛津は時代と權威を以て芳し。そは現代的革新に背きて、自らその門扉を閉ぢ、今尚ほラウド大僧正の遺制に治められ、メルトン圖書館の藏書は、今尚ほ壁に鍵着けらる。一六六〇年、八月二十七日、ジョン・ミルトンの『プロ、ポプロ、アングリカノ、デフェンシオ』及び『イコノクラステス』を燬きしも此所なり。余は、一六八三年、トーマス・ホップスの『レヴヰアサン』を公然燒棄すべしと決議したる校庭スクールのコート、若くは方庭クオッドラングルと稱するものを見たり。知らず、此博學なる一團は、既に米國獨立の宣言を聞きしや、否や。又、知らず、埃及太古のプトレミイ式星學は、コペルニクスの新發見に對して、今尚その論據を保有せざるや、否や。

子孫多ければ、恩惠者も多し。貴族はすべて、否、富める學生は、殆んど盡く

大學を去るに臨みて、その後若干の碟を殘し行くを常とす。加之、各種の貴重なる贈與は、講堂、校友給與費、圖書館より、降つて一枚の繪畫、一個の匙に至る迄年と共に絶えず増加しつゝあり。余の友ゼイ博士は余の爲めに次の逸話を語れり。倫敦のサー・トーマス・ローレンスの蒐集中に、ラファエル及びミカエル・アンジェロの下圖したづありき。この無價の珍寶は、七千弗を以て牛津大學に賣却を申込まれしかば、大學に於てはこれに應じ、其買取の任に當りし委員等、先三千弗の寄附を集めて、次ぎに大學以外の有志者中、先づエルドン卿を訪へり。卿は預想の百弗を踰え、三千弗を記入して、委員を驚かしめたり。委員等悦んで曰く、殘餘を擧ぐるは極めて易々のみと。卿、こを聞いて、彼等に謂つて曰く「否、諸君の友は既に及ぶ限りを醸出したるに相違なし。余その殘額を拂ふべし」と。乃ち三千弗の手形を收め、改めて四千弗と記しきと。余は一八四八年の四月、その美術全部を見たり。

(257)

(258)

ポドレアン図書館に於て、バンディネル博士は、余に示すに、クラーク博士が埃及より携歸りたる、紀元後八九六年の日附に係るプラトリーの寫本、これと同世紀のヴァージルの寫本、メンツに於て初めて印刷せられたる聖書（余は一四五〇年と考ふ）、及びこの聖書の謄本一部を以てせしが、後者は、終の二十葉を脱落せり。されど、ツェニスに在りし日、彼は書籍、寫本、乃至種々雑多の零墨斷簡を藏めたるまゝ、官の爲めに封せられたる、一個の書齋を四千ルイにて購ひ、後之を精細に檢したるに、かのメンツ聖書の脱落二十葉が完全に保存せられあるを發見したり。依つて、他の買得物と共に、これを牛津に齎して、一卷に纏めしが、斯く書史ヒストリカグラフィーの中にも現れたる神の攝理を畏るゝの餘り、これ等元レナに歸れる兩部分を、改めて綴合すには及ばざりしと曰ふ。茲にて、最も古き建物は、クラーク博士が、埃及より將來したる寫本に後るゝこと、僅に二百年のみ。ポドレアンにては、古來蠟燭をも爐火をも用ゐたる事なし。その目録は、牛津各図書館の卓上

にて、標準的目録たり。何れの大學に於ても、この目録中、その大學の図書館に藏する書籍の題號の下に、赤線を引くを常とす、——ポドレアンにはあらゆる書籍を藏すとの原則に由る。この豊富なる図書館は、昨年中（一八四七年）書籍購入の爲めに千六百六十弗を費せり。

論理的なる英人は、學者を訓練する事、技師を訓練するに異ならず。牛津は、ウイルトンの製造場が絨氈を織りシエフ#ールドが鋼鐵を鍛ふる如く、希臘語の工場なり。英人は馬の使用法を知れる如く、教師の使用法を知り、この兩者より及ぶ限り多量の利益を收む。讀書生は、平素、犇猛なる散歩と、激烈なる乗馬を續け、體質の許す極度に於て、盛に飲食をなし、試験前の二日は、全く勉強を止めて、唯悠悠間遊し、或は騎行し、或は疾走し、以てこの難關を越ゆる際に、神氣の爽快ならん事を力む。學士マスタの稱號を取るに要する、原則上の在學期限を七年となす。實際に於ては、既に久しく三年の在學及び更に四年の延期となれり。こ

(259)

(260)

の「三年」は通じて二十一ヶ月なり。

『牛津に於ける普通の大學授業料は、總て一年略十六ギニア(一ギニアは我々十圓二十五錢なり)』
とシユエル教授は曰へり。されど、この好辭は、主要の研究が、私教授料プライヴェートチュエーションに依
賴せる事實を知らざる讀者を欺くべし。私教授料は、一年五十磅乃至七十磅、或
は三年半の全課程を通じて、一千弗と算せらる。劍橋に於ては、一年七百五弗は
尙節儉の部に屬し、一千五百弗も贅澤と稱せられず。

かゝる教育の結果は、即ち希臘ギリシャ、拉丁ラテン、乃至數學の根本的智識にして、又、英
人の批評の堅實にして趣味洽き特色を成す。英人は天性修養を善遇す。ミルトン
も然かく考へべき。こは北人ノースマンを洗煉す。希臘精神との親昵は、彼等の標準を高むる
ものなり。彼等は考察を要する多くの問題を有し、刺戟的の性質ならざる限り、
その精神の充實し、その趣味の新に嚴密となれるが爲めに、書くこと、若くは語
ることを好まず。英國の操觚者は、常にその身邊を圍める、教養深き希臘人の偉

大にして靜默なる群集を侮蔑する事能はず。彼等は彼の辯舌を匡正し、彼の筆を
尖銳ならしむ。是に於てか、英國新聞の文體と論調とを見る。彼等は精緻と包含
とを學び、論理と、步調と、或は活動の速度とを學べり。彼等は根柢と、忍耐と
輕侮とを有す。若しその體軀強健なるときは、彼等は輒ち、かの消化力逞しき『學
問工場』となり、鑄鐵の人間となり、『堅固の翼陣』となり、その事業做成の力を
以て、わが米國人に比すれば、宛ら蒸汽槌じやうきつちと樂器の胴との如し、——コーク、マン
スフィールド、セルデン、ベントリイの亞流は是れ。而して、英邁の頭腦を有す
るものにして、この駿馬に乗る事あらんか、則ち吾人は爰に最高の事務的精力と、
絶倫の修養とを兼備する世界の偉人を得るなり。

イートン、ハロー、ルグビー、ウエストミンスター等に學びたる者は、各その
學校の情動的傾向が、高調にして男らしきを誇稱す。曰く、その運動場に於ては
勇氣が一般に賞讃せられ、卑屈が唾棄せられ、男らしき感情と寛容なる行爲が獎

(261)

(262)

勵せらる。曰く、名譽の不文律は貴族の壤子と成上者なりあがりものの子にも行はれ、公平無私の正義は、あらゆる手段をもつて、彼等を紳士となす。

仍ち復、大學に於ても、一切の事情が、かの英人の貴んで以て國民生活の花となす所のものを生成するを助くと主張せらる、——善養せられたる紳士は是れ。獨人フーベルは、その國人の爲めに、英國紳士の資格を説くに方り、淡白に承認して曰く『わが獨逸には、絶えてこの種のものなし。紳士ゼントルマンは政治的性格を備へ、獨立なる公の地位を有し、若くは之を占むべき權利を有せざるべからず。彼は自己若くは自己の家の所有に係る、世間普通の財を有せざるべからず。彼は又肉體的活動力とその強さとを有せざるべからず。而して、こはわが獨逸の事務所の座業的生活に於ては、企及すべからざる點なり。英國紳士の階級は、他國の同一人數中には決して見るを得ざる、男らしき精力、及び體格の外觀を有す。英國以外の國民はこの種族を産せず。而して、英國に於ても、こは退化せり。大學は、何

人に向つても、斷々乎として、その好意を占得す。これに屬する人々は殊に傑出し、その名簿を一瞥すれば、以て直に人をして、全世界を通じて、牛津又は劍橋に於ける、大なる大學の紀要中に名を列するよりも、一層勝れたる團體の他に存せざるを悟らしむるに足るものあり』と。

これ等の修業場は、上流社會の爲めの『仕上げフイニッシング、スクールの學校』にして、貧民の爲めにあらず。實用は排除せらる。公立學校の定義は『店檯の後に座する人間を養成すべきものを、盡く除却したる學校』なり。

基礎の歪ゆがめるは疑ふこと能はず。富に於て歐洲多數の小邦と匹敵する牛津は、『爰こゝに來りて事を共にせんとする總ての人の爲めに公にせられたる』講座を閉鎖し、『最も奮勵、貧窮、困學に堪へ得べき』青年の爲めに寄與せられたる歳入を認用し、粗魯の偏頗心を有し、多くの椅子と校友支給費は安逸の床となり、宛も大學は議會に調査せらるゝ恐怖に抵抗し、之を無効ならしむる術を知らんと欲する如

(263)

(264)

く、その學問は疑もなく陳腐となれり、——されど、牛津は、その功德を有す。而して、余は茲に於ても亦、國民的忠信及び精透の徵證を認む。彼等が貴ぶ所の智識は、彼等これを所持し、且つこれを弘通す。正課に於てすると、餘課に於てするを問はず、つみこみ押滿主義の教師を以てすると、賞物及び根本的學證に依る試験官を以てするを問はず、英人の理想とする教育は、正に實現の域に達せり。余は、ルスビー、ハートフォード、デイン・アイルランド、ユニヴァーシティー等各大學にて、各種の給費、及び校友檢定の爲めに課したる、一八四八年の試験問題（これらの謄本は希臘語學の一教授より贈られたり）を通覽したり。こは幾多の競争者が、芽出度く凱歌を奏したるものなるが、余は、その考試が、エール、ハーヴァード等にて、バチェローの學位を狙ふ候補者に取りては、甚だ困難なるべきを信ず。且又、概して牛津に於ては、特定の方角に向つて、米國よりも一層多大の研究を加ふる證據ありて、具備せん事を要求せられたる智識は、盡く

具備せらる。牛津は、年々、二十名乃至三十名の傑れたる能幹者を出し、三百名乃至四百名の素養充分なる人物を出す。

食事と運動とは、古の北人の精力を、若干保全するものなり。花々公子しやんごのも戰を辭する事なく、危急の場合に臨めば、毅然として其本分を嚴守すべし。余は、これらの青年を見たる時、既に彼等が米國諸大學の同年輩に對して、體力、顔色、乃至一般的習性の上に、一利を占むるを認めき。讀書生の氣力と明朗なる精神とが、大部分、單に體質或は衛生に本く事は疑ふを得ず。若し習慣を一層嚴肅となし、體操を猛烈となし、散歩を更に五哩増して、食物を五オンスだけ減じ、若くは、毎日馬にのつて二十哩奔馳し、これに加ふるに滑冰と競漕を以てせんか、米國學生と雖も、亦彼等と同じく、豪爽なる訓話と嬉々として暢快なる調子に到達すべし。肉體的長所は得るに易し。故に、余は、英人がこれと共に、吾人よりも一層善く讀み、一層善く文を綴るを見る事なくば、これを英人に譲りて、敢て争

(265)

はざるべし。

英國の富は、その中學大學の訓練に現れて、最良の書籍を系統的に読み、且つ學問の究極を尋ねて、その中に論ずる事物の、實際、如何なる状態に在るかを明にせずんば止まざるものあり。これに反して、小冊子製造者、新聞記者の徒は、ある黨派の辯論に資せんとして読み、書かんが爲めに読み、或は何等か私心の爲め以外には讀まざるを以て、その讀むや、勢ひ憚々たらざるを得ず。忙々たらざるを得ず。チャーレス一世の曰へらく『朕は英國憲法を、一個の紳士として理解するの必要あるだけ、理解せり』と。

次に又、英人は書籍の自由を有す。幾千萬の家に備へらるゝ豊富なる書庫は、わが米國青年の到底望む能はざる利益を供せり。ある書の名稱を聞くと同時に、これを参照し得る學生が、索求幾年尙好書を得ずして、僅にその劣れるを讀むものにして、その學ぶ所の多くして且つ善なる、眞に無量なるを思はゞ、即ち其

然るを知らん。

而して又、無數の教育ある人物は、互に他を高さ標準に維持す。多讀博聞の人と相逢ふの習慣は、簡省及び揀擇の妙技を教ふ

大學は、云ふ迄もなく、天才の敵なり。天才は自己獨特の方法を用ゐ、これに依つて事物を見んとする者、大學の彼等を待つや、教會、修道院等が青年聖者を迫害するに似たり。されど、吾人は總てわが子弟を大學に送る。従つて、彼等は假令天才にもせよ、進んでその機會を掴まざるを得ず。大學は回顧的ならざる可からず。その總ての尖塔の定風針かざりに方向を與ふる強風は「古代」の中より吹出づ。牛津は一大圖書館なり。その教授は皆司書ならざるべからず。而して、余は教授先生が、かのユークリッド、プラトール等の髯を筆取る、年若き新義唱道者を讚美せず、或はその空疎なる書架を満さん爲めに、進んで自ら獨創的著者とならざるを痛罵すると共に、その門衛が、露西亞の知事の如く、時に傲然として市中に突

出し、以てわが地位を尊嚴ならしめざるを詰責せんと欲す。

大學を譴むるは困難の業にあらず。而して、大學も、吾人にしてこれを待たば亦その對答をなすべし。大學の中にも天才の住まざるにあらず。されど彼等は下院委員の招呼に應ぜず。彼等は孤峭、不安定、奇癖、陰暗なり。英國は、混合と駭異の島なり。大學は垂死の境に在りと断定し終れる時、唯見る、一道の詩的風化は、牛津の中心より流出で、あらゆる都市の輿論を形づくり、鳥のその巢を營むが如く單純に、その戸々家々を造り、技術に眞實を與へ、人類を慰愉し、總て精神界に對する警告の爲さざるべからざる所を爲す。この回春的靈能の外、古き形式に於ける、英國現代の最善なる詩は、劍橋の二大卒業生に依つて作られつつあり。

第十三章 宗教

今日に於ては、如何なる國民も、その國教より説明する能はず。彼等はこれに向つて責任を感せず。國教は遠く彼等を離れたり。眞理に對する彼等の忠實、彼等の勞働及び費用は、現實の根基に立ちて、國家の教會に據らず。英人の生活が、アサネシアン教條アサネシアン、『英克蘭教々條』、或はまた『聖養』の如きものより發展したるに非ざるは、瞭々たり。こは猶結婚に於けるが如し。青年あり、急ぎて結婚す。然る後、彼はその眼を處世の眞諦に開き、初めて自ら結婚の制度、及び正しき兩性の關係に就いて、わが意見如何と反省す。『余は多くの云ふべき事ありしなり』と 彼は答ふべし『若しこの疑問が明かに提出せられたにせば。されど今、余には妻子あり。従つて、疑問は一切余の前に閉ぢらる。』國民はその未だ野蠻なる時代に、一種禮拜の形式を制定し、若くは輸入し、次で神壇を起し、新穀十分一を課し、僧侶を任命し、國家の教育と費用とは、この方向を取り、頓て富文化、偉人、俗界の羈絆等が、踵を接して至るや、その中思慮ある者は曰ふ、何

(270)

の故に『運命』と戦ふか、何の故にこの山の如き虚誕を積上ぐるか。寧ろ、この宗教時代に^{きりだ}所出され、彫琢せられたる、山なす石材の陰に、何等かの凹處、或は裂虧を發見して、わが身を托すべし。これを移さんとする如き、痴愚にして、危険なる企をなす事なかれと。

余は、古き城砦、寺院を見る毎に、即ち悠悠七百年の歲月を経たる、ダンディ寺院の高塔の如きものに對したる時、往々にして喟然として長嘆して曰ふ『これ今日これを仰ぐ所の人種よりも、更に優秀なる他の人種の築きしもの』と。明白なるは、曾て、この島に旺盛なる感情の活動したる事實にして、これらの建築は、その現證たり。譬へば、火山性玄武岩が、消えて久しき猛火の力を示すが如し。英國も亦、曩日、歐洲を沸騰せしめたる基督教の強熱を感じ、蠻野と文化との間に、さながら火の化學的作用に依るもの、如く、嚴然たる境界線を引けり。宗教的感情の力は、人身犠牲の風を止め、食慾を抑へ、十字軍を鼓吹し、暴王に

(271)

對して反抗を鼓吹し、獨立自尊を鼓吹し、農僕と奴隸とを制限し、自由の基址を定め、寺院建築を起し、——ヨーク、ニューステット、ウエストミンスター、フワウンテイン、リップボン、ビヴァーリイ、ダンディ等の諸伽藍、——工事の秘鑰は之を創建したる宗教的感情と共に、今や亡し、——^{イギリスの}英譯聖書、禮拜式、僧徒の歴史、リチャードの記録を鼓吹したり。僧侶は拉丁聖書^{ヴェルグ}を翻譯し、莊嚴なる聖徒傳を、英國的根柢に立つ英國的道德に翻譯せり。こは太古のカウカシアン人種の、一種確定的、若くは侵襲的態度なりき。人間は、幾代の昏睡に、氣力を新にして覺醒したり。北方蠻人の驚愕は、基督教を強めて、勢力と成せり。基督教は人民の愛に依つて生きたり。ウィルフリッド僧正は、二百五十人の賤農が大地に繋縛せらるゝを見て、盡くこれを解放せり。宣教師は、農民の爲めに日曜及び教會祝日に於ける、勞役の免除を請得たり。『土曜の日没より、日曜の日没迄の間に、農民を強ひて勞働せしめたる君侯は、これが自由を全然褫奪せし者なり』。僧侶は

(272)

人民より出でたり。従つてこれに同情しき。教會は、歐洲に於ける、調停者、防遏者にして、又民主主義なりき。ラチマー、ウィクリフ、アルンデル、コブハム、アントニイ・バーンズ、サー・ハリイ・ヴェーン、ジョージ・ホックス、ペン、バンヤンの輩は、各、その當時に於ける聖僧にして、兼ねて、民主黨員なりき。羅馬教は、この精勵摯實の國民を薰染して、世紀十四を経る間に、密に國民固有の風習及び精神と熟合し、家庭的にして、同時に威儀堂々たる、重々しき制度を産み出しぬ。そは終に、天と地と、あらゆる物を混化しき。そは祝宴と斷食と、いかなる儀式にも伴ひ、一年の各日に名を與へ、町と市場と、岬と紀念碑と、これらを命名し、更に曆書と連結して、教會より何等かの許諾を得ざる限り、いかなる法廷も開かれず、いかなる野も耕されず、いかなる馬も蹄鐵を打たるる事なきに至れり。節儉、店舗、乃至農場の格言は、盡く教會に定められ、これに端を發す。かくて、又、その農業地方に於ける勢力を見る。土地を教區に分割する制

度は、政治上の一切の特權に、教會の認可を必要ならしめたり。而して、僧侶の班次——富者には教長、貧者には牧師補——は、古典の教育が、僧侶に保有せらるゝ事實により、彼等をして『孤立的小農を、時代の智識的特典に繋ぐ連鎖』たらしめき。

英國教會は、人民を教化し、これを慰撫、開發、扶持、療醫、教育する、謙讓にして有力なる奉仕の許多の實證を示せり。そは殉教者、懺悔者の保證を有し、最高の書を有し、壯嚴の建築を有し、その儀禮も同じく世間的價值を以て顯れ、安價にして輕々しく購ひ得べきものにあらず。

この遅々として發達せる教會より、重要な反動こそは、生じけれ。即ち、少からず教養を助け、少からず今日國民の感情と意志とに方向を與へしものにして、禮拜堂には、彫刻あり、繪畫あり、満目、肖像と標號とを以て活ける如く、地方人民の眼に、一種の書籍と映じ、聖書と映じき。

(273)

(274)

而して、索遜民族が、その本能に従ひ、自國々語を以てする祭式を定め得るや、そは民衆の教師にして大學なりき。ヨークの禮拜堂にて、新大僧正の任命の日に、余は、合唱隊が夕の祈禱の勤行を歌ふを聞きしが、その中、一種異様の感を生じたるは、曾て世界の曉に、レベッカとアイザックとの唱へし美しき許婚の牧歌が、圖らずも、所は、ヨークの禮拜堂、時は一八四八年の一月十三日といへる日に、今恰も「タイムス」を閲し、酒を飲んで氣力を新にしたる、作法正しき英人の傾聴する所となり、而も、彼等が滿腔の國民的衿誇を以て、これを傾聴せる一事なりき。こは、古きと新しきとを、ある目的の下に連繋するものなり。聖書に對する尊敬は、文明の一要素を成す。何也、これに依つて、世界の歴史は保存せらるればなり。見よ、英國に於て、毎日誦せらるゝは、創世紀の一章及び「タイムス」の一論文にあらずや。

この場合の勤行中、他に亦意味深き一部ありき。ケーミッシ博士は、風琴を彈

じて、ハンデルが美なる戴冠式の和唱讃歌「神よ、王を拯へ」God save the King, をば、極めて莊重に演じたり。禮拜堂と音樂とは、相互に他の爲めに造られたる如し。こは、教會が、一種の政治機關として働ける、職能を暗示す。すべて英人は、その幼時より、毎日、女皇の爲め、乃至皇室、國會の爲めに捧ぐる祈禱を其名に依りて聞くに馴れたり。生涯の間、これらのものを神聖視する習慣は、その思想の上に、影響なき事能はず。

大學も亦、國教制度の一部にして、其第一の計畫は僧侶を造るに在り。かくて僧侶は、一千年間、國民中の學者なりき。

(275)

國民的情性は、深くその教會の連綿として絶えざる秩序と傳説とを樂めり。委しくは、その禮拜式、式典、建築、清淨なる雅趣、優秀なる交遊、及び王位と歴史とに對する關係にして、これ等は皆教會を修飾するものとする。而して、教

(276)

會が、斯くの如く、活動よりも寧ろ趣味の人間に迎へらるゝ傾あると共に、英國國民の恒常性は、その社會的秩序に對し、政治に對し、財政に對する、密接不離の交渉より、熱情を以て、これを維持す。

善良なる教會は、邪惡の人間の建てたる所にあらず。少くとも、社會の何處かに、義氣と獻身的熱心とを藏せざるべからず。これ等の禮拜堂は無神論者に依つて建てられず、又、彼等に依つて充たされず。英國の教會に比して、他に一層多くの博學、勤勉、若くは敬虔なる人物を有せるはあらず。その建築は、不死の信仰を以て輝けり。高熱と、清明の時代、或は、神の現前の完全は、歴史の中に現れたり。これに依つて、人間の靈性は、澎湃たる潮流を起し、偉大なる徳性と才能とは、おのづから露れ、即ち、十一、十二、十三世紀と更に十六、十七世紀の如くにして、この時、國民は氣魄洋溢し、敬神の念に燃えたりき。

されど、ウィクリフ、コブハム、アルンデル、ベケットの時代も、ラチマー、

モリア、克蘭マーの時代も、テロー、レイトン、ハーバートの時代も、シャロック及びバトラーの時代も、皆盡く過去となれり。思想界に於ける、無言の革命は、これ等の人物の復歸する事を、若くは、その會て神聖とせられたる地位に、再び就く事を、不可能となしき。教會に存したる精神は、今や、これより流去りて、他の活動を勵ませり。古き祠堂に入る者は、猿猴と俳娼とが、空しく古き裝束を引摺りつゝあるを見る。

英國の宗教は、優美なる養育の一部なり。人若し大陸に於て、盛粧せる英人がその大使館の禮拜堂に來り、刷毛目滑かなる帽子の中に、顔を埋めて、徐に默禱するを見れば、如何に多くの國民的衿誇が、彼と共に祈禱しつゝあるかを感じざる能はざるべし。これ即ち紳士の宗教のみ。彼はその禱詞に何等の意味をも附するなく、これを以て殆んど寛容の所業と信じ、神に祈るは、甚だ自己を卑下したるものゝ如く思惟す。曾て、勝戦の日、ある有名なる大公は、貴族院に於て、世人

(277)

(278)

が、全智全能の神を利用する事は巧ならざりしも、かゝる大成功の後には、相當の感謝をなすべき手段を取る事が、國民の雅量に適ふべしと述べたり。そは紳董の教會にして、貧民の教會にあらず。勞働者は、これを認めず。下院の紳士は頃日、その生涯に、一度も破衣を纏へる貧窮者を、教會の内にて見たる事なしと證明したり。

英人の理解力は剛健なるも、其宗教的方面は、全く萎靡せり。此事實は、睿才と痴愚とが、何程同一頭腦中に調和し得るかを示すものなり。彼等の宗教は引用文なり。彼等の教會は傀儡なり。審檢は、盡く恐怖の叫を以て、禁遏せらる。人或は上流人士の會合に於て、彼等が俗衆の迷信を嘲笑するを期待すべし。されど、彼等はこれを爲さず。彼等は俗衆なり。

英人は、恐くは十九世紀に於ける、一般基督教國民と共に、力を尊ばずして事功を貴み、その思想を重んずるは、單に經濟的効果の爲めにするのみ。ウエリン

トンの如きも、その軍隊附牧師たる限りに於て、聖僧を尊重したり。曰く、『ブリスコル氏は、その感嘆に値する行動と、明敏なる判断とを以て、能くメンディスト派を驅斥したり。この派は兵士の間に行はれ、一時は、士官の信者をも出した』と。彼等は木皮を製し、水薬を與ふる藥劑師を重んずると同じく、哲學者を重んず。而して、神興インスピレーションとは、單に一個の吹管フレイプ、或はこれよりも一層精巧なる化學機械たるに過ぎず。

余は訝む、英人の頭腦中には、機關師が蒸氣を閉塞する如く、任意に閉づる事を得る一種の瓣ヴァルヴあるにはあらざるかと。その聰明にして、智見弘き者は、恰も、僧正が宗教的事物に就いて、大藏大臣が財政に就いて、思考すると、同じく精透に思考するの力を有す。彼等は大胆に、且つ論理正しく語り、壯大なる結論に到達す。されど、この自由貿易、若くは地質學を今日の状態に進めたる、同じ人間も、談一度び英國教會に觸るゝや、驟に嚴肅莊高の態度を顯して、その瓣を閉づ。

(279)

是より後、これと語るは、ウミガハ蜃龜を對手とするに異ならず。

大學の運動は、その教ふる所に於ても、その場所の精神に於ても、聖徒、或は心理學者を産するに向はずして、寧ろ多く英國紳士を養成するの傾あり。そは僧正を發育せしめ、而して、哲學者を排斥す。余は英克蘭教會アングリカンチャーチに、他の宗派よりも一層多くの自宗獨尊カバライズムあるか、否かを知らず。されど、英克蘭僧侶は、貴族と同一視せらる。米國に於ては、人々曰ふ、若し英國の僧侶と語らんか、彼等が高雅の教養を受け、穎悟にして、直白なるを認めんと。彼は米人の意見、又は計畫を待つに、同情と賞讃とを以てす。されど、その席に第二の僧侶の入り來るあらんか、同情は輒ち盡く。吾人の思想は、到達同時に二人と調和すべからず。而して、話頭旋る毎に、僧侶は必ずその教會を擁護す。

英克蘭教會アングリカンチャーチは、その形體の秀雅にして常識に富めるを以て著れ、その僧侶の男らしき品位を備ふるを以て、世に知らる。その説く所の福音は『趣味に依つて、

拯はるべし』なり。そは古き建物を絶えず修治し、無量の金を音楽と建築とに費し、有名なる建築家ビノージンを買ひ、建築上の著述を買ふ。そは爽快にして、溫和なりとの定評を有す。そは平生迫害を事とする教會にあらず。そは異端を審理するを好まず、否、概して穿鑿を好まず、完全なる素養を有し、すべて適當の場合に臨んでは、その眼を塞ぐべし。吾人、若し之を放任すれば、彼亦吾人を放任す。されど、その本能は、政治、文學、或は社交に於て、すべて變革の生ずるを疾視す。教會は、倫敦大學、工業學ノカニツクス、インスチテュート、フリースクール院、自由學校、その他一般に智識の普及を目的とせるもの、創立者にあらず。牛津のプラトー哲學繼承者が、かゝる左道に對して苛棘なる事、神學者トーマス、テローローに譲らず。

舊約聖書の教義は、英國の宗教なり。新約聖書に至つては、その初めの一葉をも開く事なし。そは一磅の錢をも輕々しく取扱はざる『攝理』を信ず。英人は超ソラリス越論者にもあらず、基督教徒にもあらず。彼等は女皇の心の爲に、物々しきソク

(282)

ラテス流の祈禱を臚列せず、況んや聖者めきたる禱詞をや、彼等は、光をも、道をも冀はず、唯明白あからさまに謂つて曰く『女皇に許すに、健やかに、且つ富みて、長く生さん事を以てし給へ』と。かゝる猶太風の祈禱は、リチャードの『歴譜』クロニクルに見ゆる、リチャード王の祈禱より、降つてサー・サミュエル・ロミリー又は畫家ヘイドンの日記に出でたるものに至る迄、あらゆる英人の傳記に、その痕跡を認むべし。ペピスは、信神の念より記して曰く、『余は妻を携へて外遊せし間、初めてわが馬車に乗りて、心の躍るを覺え、神を讚し、これを我に恵みて、將來もこれを續け給はんことを祈り奉りき』と。猶太人歸化の法案（一七五三年中）は、國內各地よりの請願に依つて反對せられしが、就中、倫敦市は、この法案を擯斥して『極めて基督教の不名譽を來し、且つ王國一般の利益乃至商業に、極めて有害なり。倫敦に於ては、殊に然りとす』と論じき。

然りと雖も、彼等も議會の制令を假つて、人道を凍らす能はざりき。『天は常

に運行して、停滯せず』技術、戦争、發見、及び思想は、各々その速度を以て進めり。新なる時代は、新なる欲望、新なる仇敵、新なる貿易、新なる慈善を生じ、新なる眼を開いて、聖書を讀む。佛國政界の喧囂、蒸汽の號笛、工場の營營、移民乗船の騷擾等は、古き傳説を、大部分埋没し去り、現代的會衆の前に、舊來の禮拜を行はんとせば、その不適切なる事、殆んど狂に類し、古代服裝の假裝會を彷彿せしむるものあり。

如何なる化學者も、宗教を結晶せしめん事を企て、成功したる者なし。宗教は皮膚、或は重要な器管と同じく内長的なり。新しき陳述は、日毎に出づ。預言者と使徒とは、これを知れり。背教者は、遵教者の承認せざる能はざる教文を引いて、これを説破す。註疏者の爲めに宗教を要するは、宗教の條件なり。預言者と使徒とは、正しくは、獨り預言者と使徒とに理解せらるべきのみ。爲政者は宗教的要素が、纖維素、或は乳糜の供給と同じく絶ゆる事なく、却つて、その本

(283)

質構制的にして、自ら我必要なる教會を組織すべきを識れり。卓見ある立法者は寺院、學校、圖書館、大學等には、資を惜む事なきも、たゞ、僧徒を富ますを肯んせず。彼若し何等かの方法に依りて、僧侶の任命、及びその俸給を人民に委ぬるを得んか、而も、僧侶はこれが爲めに苦む事なし。例へば、クエーカー派の如く、彼等は僧侶階級の孤立を拒ぎ、その機會と期待とを社會に造り、この性質に於て、自然的の寄進を受くるに至るべし。これに反して、富を牧師、僧正、教區長の地位に加ふる時は、その執事に、有財の人間を要するが故に、是等の者は、勢ひ宗教をして、時代の神秘たらしめず、これと異なる他の方向に趨らしむべし。勿論、金錢は金錢としての作用を有す。即ち、これを得たる者を變じて、無精神となし、無教會となすべし。

牧師補の俸給は卑しけれども、主教の俸給は貴し。この弊害の結果は、使費に興味を有する貴族の子弟、又は他の不適當なる人物を教會に入らしむるに在り。

(285)

かくて、僧正は、遂に袈裟を着けたる商人たるに過ぎず。その芝生を隔て、余は商人の上着の釦子が閃々と輝くを認む。デュルハム僧正の如き豪富は、殆んど大罪をも敢てせしむる賞物たり。ブルームは下院に於て、愛耳蘭人の選舉權を論ずるに方り、謂つて曰く『上院の僧正等は、如何なれば能くも偽誓の罪惡を憎む事を明言し得るや。彼等は恐くは一年四千磅を算せる。生活費を提供せられたる其刹那に、偏に聖靈に感じて、この職務と、及びこれに伴ふ管掌とを受け、他に何等の理由を知らずと、嚴かに神の前にて宣言す』と。入道式の方法は、税關の宣誓よりも、迥に危害多し。僧正を選舉するは、大本山の副監牧師カシドラルと受俸僧徒プレバッドなり。女皇は、これ等の紳士に、選舉の特權を授く。されど、これと同時に、その選舉せん事を要する者の名を送るべし。彼等は、大本山に入りて、聖歌を誦し、祈禱を捧げ、神に向つて、その選擇を助けん事を請ふ。而して、かゝる祈願の後、常に發見するは、聖靈が女皇の推薦を允可せる一事なり。

(286)

然れども、吾人は導教に對して、その代價を償はざるべからず。吾人が國教遵奉者と共に在る間は、萬事、不可なるを見ず。されど、他の點に關して誠實なる者は、その教會の何處かに、この點に就いても正直を守り、偽りの神に跪く事を敢てせざる人あるを知れり。これと面を合すの日には、自己は偽善者の階級に墮せざるを得ず。加之、この屈從には、容易ならざる懲罰あり。人若し、虚言に與する時は、これに伴ふ一切の結果を分たざるべからず。英國は、この粧飾的、國民的教會を採用しき。而して、教會は、これを奉ずる者の眼を曇らし、肉を腫脹せしめ、聲を齟息の如く喧雜となし、理解力を鈍くせり。

英國教會は、獨逸の批評に別扱せられて、傳説の外に何物をも遺さず、論理的に、羅馬教に復歸したり。されど、その精神を呼吸し得る者は、狂熱せるもののみ。教育ある階級より見れば、一般に、驕陽を正視するは、事實ならざりき。従つて、彼等は完全に教會より乖き去れり。

(287)

大自然は、必ずや、その救治策を有す。宗教的人士は成立せる教會を脱出して、許多の宗派セクトを形りしが、この宗派は、忽ち信用を博して、既成のものを控制せり。大自然は、この他に、一層峻烈なる救治策を有す。英人は何事に就いても變革を懼れ、宗教の事に就いて、最もこれを懼るゝが故に、形式上の爛布を、一枚残さず保存し、従つて、怖るべき偽善に陥れり。英人（余はこの状態が獨り英人に留まらん事を望む。されど、事實、東西兩半球を通じて、アングロ・サクソン民族の血液に、この臭味あり）と米人とは、他のあらゆる國民に踰えて、偽善を行ふ。佛人はかゝる努力を全く廢棄す。吾人が書籍に於て、新聞紙に於て、懲勸に神に叩頭する程厭ふべき事が、他にあるべきか。通俗刊行物は、その神聖なる程度と、嚴密に比例して、破戒無殘なり。而して、時代の宗教は、舞臺的のシナイ山にして、その異端攻撃の雷火は、財産家の手に供給せらる。迷信と、偽善とは諷刺を喚起せり。「ポンチ」はその材料の無盡藏を發見せり。ディッケンズはエキセ

(288)

ター館^{ホテル}の人道に就いて、小説を作りき。サッカリーは、無精神なる上流の生活を暴露したり。大自然は、下層社會の迷溺を以て、一層簡明に、自己報復をなせり。シャフツベリー卿は、賤民を集めて、これに説教せしに、彼等はこれを「瓦斯」と罵りき。ジョージ・パローは、ロムマニイにて、ジブシイ族を喚びて、「埃及に於ける希伯人」を論じ、且つ使徒信條を誦し聞かしめしが、これに就いて、彼は曰へり「余は説終りて四邊を見廻したるに、一座盡くその顔を肇め、皆恐ろしげなる白眼をもて、余を睥睨し、一人として白眼ならざるはなし。その中の紳士なるべバも好人物のチチャロナも、コスダミイも、盡く白眼を剥き居れり。ジブシイの馬商に至つては、最も厭ふべき白眼を示しき」と。

教會は、今や、惑むべきの極に在り。そは財産を除いて何物をも保留せず。僧正、若し智識ある紳士に逢ひて、その眼中に、絶對的疑問を認めんか、これと共に酒を傾くるの外、施すべき策を知らず。虚偽の地位は、偽善、偽誓、聖職賣買

の罪を導き、従つて愈々思想と品性の劣悪なる者を、僧籍に投ず。而して、教權制度が、科學と教育を怖れ、信仰を怖れ、傳説を怖れ、神學を怖るゝに及んでは終にその教會を抛棄するの一事あるのみ。教會は、教會にあらざればなり。

されど、英國の宗教とは何ぞ。そは「成立的教會」なるか。否。宗派か。否。宗派とは、畢竟ある私人の背叛を引伸したるもの、謂に過ぎず。その成立教會に於けるは、恰も二輪馬車の四輪馬車に於けるが如く、安價にして輕便なれども、根本的には同一物のみ。宗教は、何の處に在るか。これに答へんとせば、先づ、電氣、若くは運動、若くは思想、若くは身振りの何の處に在るかを語れ。これ等のものは、遂に、何處にも住する事なく、留まる事なし。電氣は、倫敦紀念碑、或はその塔^{タワー}の如く、これを急に造り漆喰にて塗立て、完成すること能はず。従つて、その所在を知り、これを固定すること、英人が常にその物品を處置する如くする能はず。そは經過的、閃光的、身振りのなり。そは旅行者なり、新奇なり、

(289)

(290)

驚異なり、秘密なり、故に、彼等を困惑せしめ、錯愕せしむ。されど、宗教が、若し總ての善の實行にして、この爲めに、又、總ての惡の受忍ならば、この神聖なる秘密は、アルフレッド大王の昔より、ロミリイ、クラークソン、フローレンス・ナイティンゲールの今日に至る迄、實際英國に存在し、その無名の幾百千人に存在す。

第十四章 文學

顛覆せしめ、若くは擾亂せしむる事の容易ならざる、一種力強き常識は、過去一千年間、英人心性の特色なりき。是れ、野性的氣力が、直に思想の上に現れたるものにして、譬へば、近く學問したる兵卒、水兵のごとし。彼等は想像力を有せず、従つて、かの希臘、伊太利に於て珍重せられ、久しからずして、寓話と變じたる如き、隱微の語、或は警句を吐きて、その驚嘆を洩す事なし。彼等の愛す

るは、強き土臭ある語法なり。此語法は誤解の悞なく、大膽に人身の眞に迫り、王侯に用ゐらるゝも、亦暴民に相應しく、その嗜好に投ず。

この素朴と、誠實と、平明なる語格とは、現存せる最古の文學より、今日の作物に至る迄、一貫して認めらる。この精神は、歌謠及び小曲に、土の香と家畜の息とを移し、和蘭畫家の如く、皿鉢、小桶の類を厭はずして、家庭の懽娛を、是れ求む。彼等は、その生來の實用主義を、韻文の中にも要求するものなり。蔬菜と餅とは、寸時もその眼中を去らず。詩人は、其想像が閃發すれば、逸早く、その身を立直す。英國の美神は、農庭、小路、及び市場を愛す。美神は、デ・ヌステール夫人と共に、『世人がわれを強ひて雲間に昇さんとするとき、必らず木履を穿ちて泥を踐む』と謂ふ。

何也、英人は、その認識精詳にして、事物を、正しき目的に従つて保持し、これを把握して、滑澁する事なし。彼は斧、犁、槥、銃、蒸汽管を愛す。彼は、そ

(291)

の使用する機關を造れり。彼は唯物論者にして、經濟的、商賣的なり。彼は誠直と、眞實と、煎餅マフィンとを以て、取扱はれん事を欲し、煎餅の約束を以ては然せらるゝを欲せず。而して何よりも先づその截肉の熱きを好みて、最も安全に、且つ輕便に、これを食べ、浮凸型浮凸型ある紙に刷上げたる華麗の献立は、假令其機會多きも、之を後にす。彼若し智力的にして、詩人或は哲學者なるも、同じくこの堅固なる眞理と、鋭敏なる機械とを、精神界に携來るべし。彼の心は、事實の上に立たざるべからず。彼は動顛せず、雲を掴まず、その心は、觸知し得べく、抵抗を感ずる如き象徴を保たん事を欲す。彼がグンテを讀んで味ふ所は、その心象を、宛ら楯の面の紋地の如く、明瞭に眼前に浮ぶる、萬力の如き粘實性なり。バイロンは『その心を打碎くべき、何等かの峻嶮を好み』たり。聖書バイブル的語法と稱せらるゝ平明にして力強き説話は、英人を特表す。アルフレッド大王に於ても、『索遜サクソン歴史譜』に於ても、北人の『古史』ナガスに於ても、等しくこれを認むべし。ラティマーは素朴

なりき。ホップスは、其『高尚なる俚語』に妙を得たりき。ドン、バンヤン、ミルトン、テロー、エヴリン、ベビス、フッカー、コットン、及び許多の翻譯家も、かゝる文を綴りき。スウィフトは、その題目の取扱に、如何に寫實的、或は物質的なりしとするぞ。彼は虚構の人物を叙するも、宛ら警察の爲めにするもの、如くなりき。デフォーには、不安定、若くは選擇あらざりき。ハディプラスも同じく頑硬なる心性を備へ、感覺と理性とに對して、同時に眞を保ちき。

(293)

こは詩に於ても、劣れりとせず。チコーサーが明確に描きたる、カンターベリーの巡禮者は、感覺を満足せしむ。シェークスピア、スペンサー、乃至ミルトンも其高遠なる想像の中に、各々この國民的把住力と精神の收斂性とを有す。この心的唯物主義は、英國に於ける超越的天才の眞價をなす。上記の文學者及びハーバート、ヘンリー・モーア、ドン、サー・トーマス・ブラウンの如きは即ち是れなり。索遜人の唯物主義と偏狹とは、心智の世界に昂められたる時、沙翁とミルト

(294)

ンの天才を成せり。こは、一度び純潔なる澎氣に達する時は、金剛石を履むが如く、安全に、雲より雲へと傳ふ。その騰揚するに方つても物質的なり。その詩は、神興に乗じたる常識のみ。若くは、白熱せられたる鐵のみ。

彼等の説話には、二重の特質の混化あり。その國語に於ける諧默の規則は、索遜系の語を以て、輪廓、若くは骨子を組立て、超拔、或は粧飾の必要に逢へば、羅馬系の語を交ふる事なり。されど後者は、これを節用するを力め、又、これのみより成れる文章も、遒勁の致を缺く事なし。小兒、勞働者は純粹の索遜語を用ふ。純粹の羅馬語は、大學と議會との自由行使に任ず。混合は、英島國の秘訣なり。而して、日用の言語にも、男性的本質は、索遜語にして、女性的本質は、羅馬語なり。兩者は、如何なる議論にも併用せらる。老巧の文士に至つては、少しく羅馬系の圓満を含咀すれば、輒ち急ぎて純英國的の單綴語を以て、その詞句を淨清し、緊縮す。

(295)

ゴール民族の初めて歐洲に入り來るや、彼等は、その既に希伯來、希臘の天才の日月に照されたるを見たり。久しく闇中に鎖されたる、彼等の腦髓は、この複合的光耀に對して、極めて鋭敏なりき。その精神は、此雙生的根源（基督教と希臘美術との）より發する映像に依つて、聖靈の胚胎に依るもの、如く富厚となりぬ。英人の心は、そのあらゆる能才に花を開けり。常識は警醒せられ、鼓吹せられぬ。二世紀の間、英國は、哲學的、宗教的、詩的なりき。心的裝具は一層大規模となれる如く、記憶は天水桶の如く容量大に、研究は熱心にして忍耐強く、心的構制力は粗豪且つ輕捷に、空想と想像に富み、思想は容易に濶大の距離を測量するに足り、新なる問題の企畫、及び之を爲すの容易なる事、一般に我意のまゝに精力を發揮し得たる事は、ウァーウリックのガイの勇戦のごとく、駭くべきものありき。索遜の精確と、東洋的高翔との結合は、沙翁を以て、完全の實例となし、而して、稍低き程度に於ては、二世紀の間、他の文學者も亦等しく具備する所な

(296)

りき。余は、此二世記の間に、世界無比の偉大なる文豪を認むるのみならず、當時の文章が、總て男性的勢力と自由の風を具ふるを識れり。

一種衛生的單純と、粗豪の元氣と、現在取扱ふ事物に對する逼密とは、二流三流の文士も亦これを有す。而して、余惟へらく、こは世間通用の文體にも在り、遺言、書簡、乃至公文書の拔萃に、俚諺に、演説の形式に、これを認むと。快暢にして、豪宕なる語法は、北人の野性の未だ全く銷盡せざるを示すもの、彼等の力學的頭腦が、その言語を放抛するや、宛ら輾白が麥屑を擲出するに似たり。余は、十九世紀にその比を見ざる如き、尖銳の文章、詞句を、十七世紀より抄出するを得。その詩人も、單なる心意の力に依りて、發達せる吾人の科學と顔顔す。田舎の紳士は、その所謂「十月」^{オクトー}と稱する飲料を用ひしが、詩人は、恰もこの暗示に依れるもの、如く、秋の全部を蒸溜して、その秋の詩句に包含せしむる方法を識れり。而して、自然と同じく、一段の効果を誇らんが爲めに、醜を改造して

美となし、絶世の佳人アスバシア、或はクレオパトラとなし、希臘美術の所産たる花瓶、柱等が、長きに過ぎ、軟脆に過ぎ、或は結節、或は穴隙、或は瑕玼あるに依つて、却つて美なるが如く、その詩は、生氣潑瀾たるが爲めに、卑近、凡俗の事物を詠じて、尙能く微妙、豊麗の趣を贏ち得たりき。

雄渾なる様式に、大膽の情感を充たせる事、例へばベン・ジョンソンの作物の如き、^{マスケ}假面劇及び詩が特に歓迎せられたる時代は、教化普くして、思想に富めりと考へざるを得ず。文學史上に於ける獨一の事實、平然として、沙翁を受認せしこと——その受認は、彼が財産を作れるに依つて證明せられ、その平然たりしは、當時、何等の讃辭をも喚起さざりしに依つて證明せらる——は、英人心性の豪邁を表影するもの、如し。ある國民の盛華を判断するには、その中の偉大なる個人の藐視せらるゝ程度に依るに若かず。曩日、彼等が希臘、拉丁語を學ぶに方つては未だ吾人の有する如き便宜を有せず、辭書、文典、索引の類もなく、僅に講師の

(297)

講義を聞きつゝ、自ら研究に従事せしかば、吾人に比して、一層強固なる記憶力を要し、又、各種性能の共働を要しき。従つて、その學者たるカムデン、ウッシヤ、セルデン、メード、ギヤタカー、フッカー、テロー、バアトン、ベントリイ、ブリアン・ウォルトン等は、機械師の堅密と方法とを獲たり。

プラトリーの感化は、英人の天才に着色す。彼等の心は、比論を愛し、類似を認知し、統一の梯子を攀づ。特に一致を見んとする者と、特に差別を見んとする者と、相互の間の争は極めて古し。而して、こは、貌列頭フリトシに於て、又新にせられたり。詩人は、無論、その一方にして、世俗の人、他の一方に居る。されど、貌列頭には、プラトリーの弟子多し。曰く、モリア、フッカー、ベーコン、シドニイ、ブルック卿、ハーバート、ブラウン、ドン、スペンサー、チャプマン、ミルトン、クラッシュョー、ノリス、カドウォース、パークリイ、ゼルミイ・テイロー。

ベーコン卿は、英人特有の二元的性質を備へき。彼が實用的科學に就いて試み

たる幾百の考説、及びその實驗は、余惟ふに、半文にも値せず。フランクリン、ワット、ダルトン、デーヴィ、乃至苟も實驗に秀でたる者の提案は、その一を以てするも、尙ベーコンの生涯に亘れる絶妙の諧語たはごごと匹敵す。されど、彼は神聖の流に飲み、英國に注ぎ入りたる理想主義を標致す。この精神の往く所には、常に詩あり、健康あり、進歩あり。その創生及び普及に關する法則は、未だ世に知られず。吾人若しこの智識を有せば、そは、彼の心理學なるものを廢棄すべし。そは、人種に關するが如く、又形而上的化學の如し、——根本的要点は、統一の意識、若くは類似を索むる本能が、何程精神を支配せるかに在りとす。何也、精神は、何れに向つて、一步を進むるも、是れ、今迄關係したる劣弱の階級を超えて、更に濶大なるものと一致するものなればなり。斯くて、あらゆる詩歌と、積極的活動とを生ず。

ベーコンは、その精神の構制より、類推論者アナロジスト、理想主義者、及び(最上の代表

(300)

者の名を假りて普通に言ふ如く「プラトニスト」屬するものなり。比論を信ぜずして、ある理論を立つる前に、必らず事實の堆積を要する者は、詩的能力を有せず。従つて、獨創的なるもの、美なるものは、決してその手に依つて造らるゝ事なし。ロックが、分拆と散文の誘入者なるの疑ふべからざるは、ベーコン及びその他「プラトニスト」の生長發達に於けるが如し。プラトニスト的は、詩的傾向なり。所謂科學的は、否定的、毒壞的なり。スペンサー、バインズ、バイロン、乃至ウアーツワースが「プラトニスト」にして、他の遲重なる人間が、「ロッキスト」なるは言を俟たず。政治と商業とは、教育ある階級より、天才なき能才者を吸収すべし。何也、斯くの如きの輩に限りて、抵抗といふ事を爲さなければなり。

ベーコンは、概念を取扱ふに長じたるも、目的を重んじて、その精神の圖形中に、何よりも先づ、普遍性、即ち第一哲學を立つるを必要としたり。こは哲學の各専門の範圍に落ちずして、共通性を有し、且つ高き段階に屬する、一切の有

(301)

益なる觀察、及び公理を容るゝ器に外ならず。彼はこの要素を根本的となし、これを念頭に置き、これを閑却するを謹めて止まず。信すらく、總て完全なる發見は、平面、或は平地に於ては成就せらるゝ事なし、これが爲めには、更に高き科學に昇らざるべからず。『人若し哲學と普遍性とを無用の學問と思はゞ、彼は總ての業務が、これより扶持供給せらるゝを知らざるなり。余はこれを以て學問の進歩せざる大なる原因となす。何也、これ等基礎の智識が、單に一時的に研究せらるればなり』と。彼は、撮要的、若くは共通的法則の種々の奇なる例證を出して、これを説明せり。各種の科學は、これが専門の註解を與ふるものなり。彼、嘆じて曰く『余は、この種の學問の甚だ不足せるを見る。特に深邃なる睿智は、己が使用の爲めに、往々、一桶づゝを汲取ると雖も、源泉に至つては、絶えて訪はず。こは大概の人の水氣を爆燥し、戕殘する、乾光なり』と。プラトニストも、同一の意味を説きて曰へらく『總て、偉なる藝術は、自然の大法に對して、幽渺な

る思索的研究を加へん事を要す。蓋し、思想高遠にして、あらゆる題目を、完全^レに會得し得るは、斯かる源泉より由來するなり。ペリクレスも、その偉大なる天才に加へて、これを有しき。何也、この種の人間たるアナクサゴラスと逢ひし時、彼は、これと深交を訂し、絶對の智慧に、崇高の思念を凝らして、以て自ら蘊蓄し、而して、雄辯の術に資すべき者は、残らず、これを應用したり」と。

若干の概括的命題は、常に世界を周行す。吾人は、正しくその作者を知らず。されど、其眞理は駭くべくして、宏大なる思想の王國に達する大道のごとく、例へば物理学に於けるコペルニクス及びニュートンの法則の如く、この世界の常數^{コンスタント}たり。英國に在りては、これ等は**大抵**シュリークスピア、ベーコン、ミルトン、ブッカー、乃至ヴァン・ヘルモント、ベーメン等より出で、而して、總て**プラト**ーその他の希臘人に對して、一子相傳の關係あり。この命題の中、**ベーコン**の文には『自然は、これに服従するに依つて、支配するを得べし』と言ひ、その詩の本義

を以て『事物の外観を、心の要求に随つて按排するもの』となせるあり。ゾロアスターの詩の義に至つては、神秘的なれども、精確なり。曰く『不明晰なる自然の明晰なる畫』と。スベンサーの教條に曰く『靈性は形式なり、肉體を成す』と。パークリーの説には、吾人は到底物質の存在する確たる證據を有せずと言ひ、サミュエル・クジーク博士は、空間時間の性質より有神論を主張し、ハリントン^ハは、勢力は土地に在らざるべからずと云へるを、政治上の原則となせり、——この原則は、廣義に解釋せられん事を要するもの。スウェーデンボルグは、その學說を宇宙的に演繹し、人間は、その天國と地獄とを造ると稱しき。ヘーゲルは、文明史を以て、觀念と觀念との抗爭、及び一層深遠なる思想の勝利となしたり。シェリングの大同哲學は『あらゆる差別は量のものなり』の數語に盡く。斯くの如くにして、又、引力說、及びケプラーの三大調和律より、降つては、ダルトンの定比例に至るまで、これを言明すれば、直に精神の内部に於て、協應を喚起す

るものなり。而して、此事實は實驗的論證よりも一層確實の證明なり。これらの概括命題中、ある物は殊に近代に屬す、されば余は單に一斑を示さんと欲するのみ。嘗にこれ等特殊のものに限らず、これを發生したる心的素地、若くは空氣は吾人が汎く『エリザベス時代』(假りに文學の歴史に於ては、一五七五年より、一六二五年に至るとすべし)と呼ぶ頃の著述家、及び讀者の郷土にして、又要素なり。而も、この時期は、更に短くして、ベン・ジョンがベーコン卿に關して言へる所を、殆んど事實と見るべきものあり。曰く『彼の時に方りて、且つ彼の目睹する所に於て、凡そ、國民を擧尊し、或は學問を助くべき英才の士は、殘らず生れ出でたり』と。

斯かる天才の殷富は、この時代より前には、一度も現れたる事なし。その高度は、維持せらるゝ能はざりき。吾人は瘦せたる土地に、大木の古株を發見し、又其土地が曾て肥澤にして、農業を助けし傳説を聞く。これと同じく歴史も亦、聲

名ある民族の智力が、既に衰廢に歸したる時期を算す。英人の天才も、この運命に遭へり。その超高に繼いで起りしは、卑陋にして、又、精神が低き地面に降下せし事實なり。已に翼を失ふ、奚ぞ高き思索を縦にするを得んや。觀念の意味を知らざるロックは、哲學の模範となり、その『悟性』は、あらゆる國民の中にて英人の智力の尺度となれり。彼の國人はバルナッサスの崇高なる方面を棄てたり。こは、彼等が曾て足音高く踏鳴らして濶歩し、又、その絶愛の學問を論議せし境地なるが、茲に至つて、思想の力、全く廢弛し了れり。近世の英人は、プラトー、アリストトールの性能を缺き、爲めに少數或は唯一人の生活より、原則を演擇するも、宛らその無數よりすると異ならざる如き、深邃なる一般的法則の洞見を以て、自然の種類に、人間を配列する事能はず。この點に於て、最も傑出したるは、總ての心的精力に於けるが如く、沙翁なりとす。獨逸人は、概括す。英人は、獨逸人の精神を解釋する能はず。獨逸の科學は英國の科學を包括す。この性能の不

(306)

備を示すは、即ち、英人が事實を山の如くに集積する、小心翼翼の態度にして、恰も、弱將がその勇氣と統率との不足を補はんが爲めに、幾千萬の軍兵と、蝮々幾哩の角而堡とを求むるに似たり。

英人は、概括を躲避す。『彼等は汎く普遍性を見ず。若くは、臨時の使用に、第一哲學の泉に就いて、その一桶を汲上ぐるも、絶えて、その泉の源に溯る事なし。』この語を爲し、ペーコンは、この能力に關しては、その國人中、或は少くともその散文家中、殆んど唯一無二の人物なり。ミルトンは、英人の天才を、沙翁といへる絶巔より降下せしめたる、一種の梯子、若くは裾野にして、この天稟を往々、詩中に現し、又、稀には散文にも現しき。以來、久しくこれを見ず。パークは概括に腐心したり。されど、そは極めて短き語句なりき。何也、彼の思想甚だ深からずして、その範圍隘ければなり。ヒュームの抽象は、深からず、又、賢ならず。彼の名聲は、唯銳利なる一の觀察に負ふもの、即ち、原因と結果との間に

何等の連鎖も發見する能はず、原因と云ひ、結果と云ひ、これらの術語は、單に吾人が繼起的と認めしのみにて、決して因果的ならざる事物に、漫然として、若くは、理由なく、興へたるのみと、ジョンソン博士の、書きたる抽象は、殆んど價値なし。これが主要の價値を成すものは、感情の調子のみ。

ハラム氏は、博雅の君子なり。彼は、三百年に亘る歐洲文學の歴史を著したるが、この業たる、大なる野心に本くと曰ふべし。何也、一定の判斷を、あらゆる書籍に下さんとしたればなり。されど、彼の眼は、未だ理想の標準を見ざりき。評決は、すべて倫敦より發し、新しき思想も、盡く古き鑄型に打込まれ、文學を創造する濶大の要素は、全く否認せられたり。プラトロー、及びその學派も拒絶せられたり。ハラム氏は、徹頭徹尾、禮讓を守れり。されど同情に至つては、これを缺如す。氏の文章は極めて寛厚なり。されど、かの深く秘密の中にかくれ、時に、或は勢力の種子、或は革命の原因の如く、突如、當代に於ける無瑕完璧の文

(307)

學者を凌駕し、若くはその赫々たる令名を掩殺する、別箇の價值ある事を覺らず。彼は、深奥の思想家を黙過し、或は、一種の輕蔑を以て、これを排斥す。觀念の愛慕者の如きは、常に趣味性向を異にするのみならず、全く認知するを得ず。彼は、その智識と忠信とを以て、且つその善書に對する明瞭の愛情を以て、世間の尊重を博し、進んでは、殆んど一切の文豪よりも、沙翁の偉大なるを承認し、又ジョンソンよりも、ミルトンを嘆美したり。されどハラムに於ても、或はハラムよりも更に鞏固の智的神經を有するマッキントッシュに於ても、吾人は尙英人魂の同一型を見るべし。そは賢明にして、豊富なり。されど、そは自己の資本を食ひて生活す。そは回顧的なり。この物、安んぞ、かの地平線上に彷彿として頭を擡ぐる、新しき形式を看破し、且つ喝采する事を得んや、——新にして尨大なる思想、こは是れ、過去の衣裝櫃よりしては、到底、服裝を調ふる能はざるもの。

今日の散文、小説、及び詩も、同一の首都的限界を有す。デイッケンスは、各種

の動作を表す言語と、都會生活の變化とを了解せる事、不思議とも言ふべく、悲嘆と笑とを以て、愛國的にして、愈々益々擴大する所の寛仁の心を以て、倫敦の巷衢を描けり。彼は、英國細部の畫家なる事、ホガースの如く、その色彩と文體とに於て地方的なると共に、その目的に於ても亦地方的なり。勤勉の文士にして、かねて偶發の才を有せし、ブルワーに至つては、智力を一種の財産として推尊し、専ら學生の世間的野心を鼓吹せり。彼の集めたる物語は、かゝる低き炎を煽ぐの傾向を有す。その物語の作者は、心情に絶望せり。サッカレイの如きは、神が、この世界に於ては、貧しき者の爲めに、その口糧を残し置かざるを見たり——従つて愈々惑むべしと、彼は思惟す、——されど、今よりも更に賢明ならん事は、吾人の務にあらず、吾人は理想を放抛し、而して、倫敦を受認せざるべからずと。

當代に於ける、英國統治者階級の口調を代表せる、才氣爛熳のマコーレイは、

公々然として教へて曰く、『善』とは食ふ事の善く、衣る事の善き謂にして、物質的の利益なり、現代哲學の光榮は、その『結果』に向つて進み、經濟的發明を生ずるに在り、その功勳は、觀念を棄絶し、道德を棄絶するに在りと。彼は、ベーコン哲學の、顯著なる功績は、その古きプラトール哲學を破りて、『全美』、『全善』より、智識を救出し、これをして、病人の爲めに、良好なる病室用椅子と、混酒^{ツイン}乳漿^{フエー}とを造るに至らしめたるに在りとす、——こは反語的にあらず、充分の信仰に出でたり。又、彼が呼んで『堅實なる利得』となす所のものは、常に肉體的裨益を意味し、これのみが唯一の善なり。星學の非凡なる恩恵は、そが航海を便利にして、檸檬^{レモン}と酒を、倫敦の雜貨商に運ぶ、果物船を助くるに在り。英國一千年の文化と宗教とが、遂に道德を否認し、智力をソース鍋に還元したるは、又奇なる結論と謂ふべし。批評家は、その懷疑を、實際的と云へる、英人常套の用語の下に隠匿すべし。理性を説破し、良心に觸るとは、小説的假作のみ。美術は地に

墮ちたり。美は、贅澤の商品としてより外、存在せず。されど、余は序を以て言ふべし、ベーコンにして、若しその批評家の言の如く、單に實感論者に過ぎざりしとせば、彼をして、今日、この恩主たらしめたる所の名譽は、決して獲る事能はざりしならんと。彼が、世人の想像に親切にして、侮るべからざる潜勢力となるに至りし所以のもの、その自ら想像に膽にして、心神の餘裕を存し、あらゆる現代英國の空氣計を超越せる、一種瞑想の靈氣に浴せしが爲めのみ。サー・デヴィッド・ブリスターは、ベーコンの高き地位を見て、ニュートンが彼に負へるを知らず、惟へらく、是れ謬れりと。ベーコンは、比重に依つて、その地位を占むるもの、その事業の爲めにも、或は、多少とも、ニュートンその他の學者を教へたる爲めにもあらず。其地位は、後年、フック、ボイル、乃至ハリイに依つて、殊に明白に説明せられたると同一の原因の結果のみ。

コールリッジは、氣宇曠恢にして、理想を渴慕し、絶えず前後を顧みて、詩人、

(312)

聖者を求め、筆舌併せ鼓して、當代唯一の高等批評を下し、英國を、既にこの島國が産したる、異常の天才を玩味する能はざるに至れりとの非難より、救へる者の一人たり。されど、その生涯は不幸に沈み、その宏大なる計畫は、大抵實行に適せずして、一個の傑作をも成就するを得ず、宛ら時代の末期を表するものゝ如し。彼に於てさへ、傳說的英人の性質は、哲學者に比して餘りに強く、彼も亦遂に『和解』を事とし、パークが「英國國家」を理想化せんと方めたる如く、ゴールリッジも、その精神を狹めて、ゴシック的規則及び英國教會の教條を、永遠の理想と調和せんと試みき。されどコールリッジ微りせば、又、隠れたる無言の少數が、往私の論議に於て、批評の聲を擧ぐる事微りせば、人或は言ふべし、英國最良の人物は、却つて獨逸、米國に於て正しく尊重せられつゝありと。是れ、國民的衰頹の確實なる標徴にして、婆羅門が婆羅門哲學を讀み、若くは理解する能はざるに至れるの秋なり。

(313)

解體と氣絶とは、かゝる唯物主義に繼いで起れり。カアライルが、紛々たる皮糠、及び乞食的説話に憤を發し、猛然として『運命』の説教を始めたは、此際なりき。この一切の腐敗に比すれば、如何なる禁制も、如何なる淨清も、そは假令火を以てするも、寧ろ望ましくして、美しと見えき。彼は何れの力士にも、或はその互に相争へる『理由』の中にも、大差あるを認めず。惟らく、唯一の喜ぶべきは、彼等が相率ゐて地獄に駛りつゝある事なりと。彼の想像は、如何なるものを見るも、これに慰めらるゝを得ず。乃ち却つて滅亡の法則の堂々として美しきを讚稱す。心的構成の必然性は、あらゆる精神を少許の絶類に拘束す。而して人間の小巧に苦みて、『應報』が柔順となり、世人が消極的の『神』に聖壇を築くに至れるとき、免るべからざる反動は、英雄的資質、即ち個人的情感より發したる慷慨悲憤が、運命對意志の不利益なる闘争を開き、その獻身的行爲を飾るに光榮を以てする事なり。

(314)

スエーデンボルグの纂輯者にして、又、フリーエーの註疏者、ハーネマンの戰士たる、ウイルクソンは、その生得の活氣を、形而上學及び生理學に現し、且つ博く事物の關係を識認し、高遠の研究をなすに堪へ、又、古の精悍なる騎士の武術にも譬ふべき修辭法を解す。彼の精神活動には、獨り深海にのみ見らるゝ、一大洪濤の澎湃として捲けるあり。唯、斯かる勢力に必ず伴ふべき、明確の集中性を缺如せるのみ。若し彼の精神にして、動かすべからざる性癖に安する事なくば、その軌道、恐くは一層大なるべく、従つてその復歸は、他日にあるべし。されど、良匠たらん者は、わが信念を守らんと覺悟をさだめ、且つわが研究に何時も同一の高い地位を與へん事を要す。

狹隘なる英人思想の傾向にも、これが例外を附せん事は容易なるべく、その枝葉の點に、優秀なる例證を引くに至つては、更に一層容易なるべし。而して、吾人もし一度び教學の範圍を超えて、一般的修養の天地に出でんか、學問ある階級

の文雅と適意と、睿智と、感性と、博識とは、殆んどその際限あるを見ず。されどあらゆる英人の事業を特標する技巧的幫助は、文學の上にも現れたり。その美學的生産の大部分は、考古的にして、製造せられ、文學上の聲名を博したるものは、いづれも精力逞き人間にして、彼等の文學に對する關係は、純粹に偶然的なり。彼等は、目前に流行する趣味と風習とに誘はれて、各種の活動に従事したりき。今日に方つては、野心ある青年は、皆地質を研究す。かくの如くにして代議士を生じ、僧侶を生ず。

實際的技倆を貴ぶ英人の性向は、その國民的精神に影響を與へたり。彼等は、無用の事物に堪ゆる事能はずして、その歌謳の中にも、五種の機械的勢力を推讃す。その現代的美神の聲には、微かに汽笛の調子あり。その詩は、宛ら彼等の王國の仕上げにして、粧飾なるかの如くに作られ、決してかの過去の世界を忘れ、専ら現在の生成を樂む、新しき晨の小鳥の如くなる能はず。彼は理想的なるを難

(315)

(316)

んじ、極めて條件的の人間にして、且つ宛ら最良の條件を具ふる者の如く、これを棄絶すること能はず。彼等は各一千歳の高齡を積み、わが記憶に依つて生活す。而して、人若しこの事を告ぐれば、彼等は讚辭として、これを受く。

書肆の店頭に出づるものは、政治、旅行、統計、表、乃至工學の書にあらざるは無し。哲學、文學と稱せらるゝ物と雖も、その組織は盡く機械的にして、恰も神インスピレーション興イ既に息みて、遠大の希望も、宗教も、歡の歌も、智慧も、比論も、最早存せざるものゝ如し。大學の調子も、及び學者、文學會等の調子も、皆この致命的傾向を有す。余は、宛ら、何物も生出でざる、大理石の床を歩む如き心地す。彼等は、低き地面にて、各種の才能を發揮しつゝあり、或は副意識にて生活し、活動する者とも謂ふを得べし。彼等は、何れも文學、哲學、及び科學に於ける、濶大の見解を失へり。普通の英人は、自らその精神の四分三より出でて、残り四分一の中に住す。彼は學識、常識、勤勞の力、及び論理を有す。されど、アルキ

メデスの有したる如き、精神の法則に對する信仰や、經驗は精神の法則に従ふものにして、これを指導するを得ずとの、ケラー又はフケラーの如き確信や、フッカ一、ミルトン、ハリントン等の抱きし如き、政治の理論に對する獻身や、これ等に至つては、現代の英人は、厭然として顧みず。

余は怖る、同一の過誤が、その科學の上にも存せん事を。何也なんぢや、英人は科學を不快のものとし、自然より其美を褫ふの術を解すればなり、——假令、この譏の及ぶ所は、英國科學者の範圍を超え、弊害は彼等より一層多くの者に存すとすも。抑も博物學者の眼は、自然其ものゝ如き自由を有し、あらゆる印象に感じ易く、萬物の論理に對すると等しく、その感情に對しても敏活ならん事を要す。されど、英國の科學は、人性を排斥す。そは天才の證左たる「關係」を缺く。科學は、その詩的ならざるが爲めに虚偽なり。科學はその説明せんとする所の爬蟲類又は軟體動物を孤立せしむ。されど爬蟲類も、軟體動物も、單に系統の中に、關

(317)

(318)

係の中に、存在するのみ。獨り詩人は、これを見て、以て、造化の進程に於ける必然の一步となす。これに反して、英國に在りては、隱者の一人、此事實を認め、他の一人、彼事實を認め、斯くして、各その見る所の眞價を知らずして死す。唯、偉大なる例外には、大思想家ジョン・ハンターあり。或は植物學者ロバート・ブラウンも然らん。及びリチャード・オーエンあり。彼は獨逸の「純一發生」を貌列嶺に輸入し、更に自家の貢獻を以て科學を富ましめ、往々、英人精神の屹々息まざる勞働的勢力に添ふるに、古の大家の占考を以てしたり。されど、大體より見れば、英國の自然科學は、精神に對する忠實の聯合を忘れ、想像及び自由なる思想の躍動を缺く事、代書人のなすところと殊ならず。そは獨逸人の天才と著しき對照を爲す。この半希臘民族は、比論を愛し、その高邁なる見地に據つて、わが熱情を維持し、全歐洲に代つて思索す。

希望も、莊嚴なるト占も、絶えて學生を勵ますものあらず。實驗より、預想の

(319)

法則へと、安全に歩を進むる事なく、僅に、カリホルニアの坑夫が、利益ある『鑛床を穿鑿する』が如く、目當も無く、此處彼處と揣摩するのみ。蝙蝠傘の大きさの視界は、彼の五感を四方より塞げり。慣例に向つての垢染みたる満足と、哲學宗教の名に對する嘲弄と、偏狹にして店頭の錢箱に似たる政治と、風習の偶像的崇拜と、みな生命及び氣魄の減退を曝露す。英人は他の國民性を蹂躪し、歐亞諸國に於て、わが倫敦と倫敦兒とを複製すると共に、思想、詩歌、宗教の反抗を畏れ、——彼等の斃す能はざる沃魔——英國風の大巾羅紗と行藤むかばきを以て基督を家族的に裝はんと企て、而も、茲に一舉にしてその國家を掃蕩し去るべき一大勢力の伏在するかと、恐怖の念に苦みつゝあり。藝術家は曰ふ『自然は彼等を惑はしむ』と。學者は無理想となれり。彼等は諧謔と輕佻を以て、眞摯の談話を回避し、人を笑倒し、若くは話題を他に轉ず。酒に乗じて、彼等は曰ふ『事實を言へば、總て自由と云ふが如きものは、皆過去れり。最早、そは用をなさず』と。實用的に

(320)

して快適なる物は、斷乎たる權威を以て、彼等を壓服し、極めて微弱なる力の摩擦も、英雄の資質と稱せられ、詩の題目に用ゐらるべし。如何なる詩人も、その韻律の境域を出で、美を歌ふ事なく、如何なる僧侶も、英人の實利を尊重せざる『攝理』を説く事なし。英島國は、運命と、物質的價值と、税率と、禁制の法律と、充溢せる市場と、安價と、これ等のもの、轟々たる噴火山なり。

最高の目的なく、智識に對して、純粹の愛なく、加ふるに自然に屈從したる結果、想像は抑壓せられ、感覺と理解力とは強直せり。吾人は自然的ならずして、技巧的となり、無趣味の資用を要し、安逸の術を工夫し、苟も人間と、其目的との間に、更に一個の迂遠なる手段を挿入する事を案出する者あれば、顯著なる發明家として、これに賞賜するを懈らす。

斯くの如くにして、詩は退歩し、且つ裝飾的となれり。ホープ及びその派は、粗糖菓ワッフルの面に記すを適當とする詩を作りき。ウォーター・スコットは定課を外に

(321)

して何物を書きしか。そは律語の蘇國案内記にあらずや。英人の印刷する韻文の書は、盡くこのパーミンガムPermingam的特色を有す。吾人は擴充せられ、教へられ、新にせらるゝ前に、無量の品よき詩を乗越さるを得ず。吾人は奇蹟を要す。何れの工場に於ても製造する能はざる、説明する能はざる美を要す。チョコサーChoc-sarとチャマンChamanとが、その秘密を得たる美を要す。通常の詩は、低くして散文的なり。唯時にウアーヅウェアUerzwearに於ける如く、良心的なるか、バイロンByronに於ける如く、熱情的なるか、或はテニスTennisに於ける如く、技巧的なるかに過ぎず。されど、若し現在英國の寶典に、今日尙ほ炎々たる光輝を放つところの、有力の指導たり、慰藉たる章句を寄與したる詩人を數ふとすれば、——噫何ぞ、その寥々たる事や。余は、かの一世を率ゐる詩宗に向つて、天なる麵包を見出すべきか。偉大なる意匠は、英國現代の詩の何處に在りや。英人は忘れたり、詩は靈界の法則を語らん爲めに存するものにして、この條件の充たされざる限り、何程豊富なる叙述若くは

(322)

想像を有するも、未だ根本的に新からず、又、散文の境界を出でずと云へる事實をば。古の嚴なる詩人は、希臘美術家の如く、その意匠に苦心して、彫琢を思ふ事稀なりき。彼等の任務は、是等一切のもの、及び更に多くのものが、滾々として湧き出づる聖なる源頭に溯るに在りき。而して、若しこの精神にして、詩に在らんか、そは吾人を何等かの志向に擧揚すべく、吾人は能く他の礙滯、生硬、若くは通俗的諧調の不具を忍び得べし。

この時代の例外的事實を、ウァーツウァースの天才となす。彼は自然と孤獨の外には、師と云ふ者を有せず。ランドルフ曰く「彼は詩を作るに戦争の助を假らず」と。彼の韻文は、卑俗にして羈氣に富める時代に於て、獨り純眞の聲たり。人或は彼の情性が、今少く流動的にして、且つ音樂的ならざるを惜む。彼はその鼓吹せられたるよりも長く書けり。されど、他の點に於ては、彼はその匹儔を見ざる者なり。

テニスンは、恰もウァーツウァースの缺けたる點に於て、天の寵幸を享く。今や彼よりも一層精微の耳を有する者なく、彼よりも一層自在に國語を操り得る者なし。色彩は、曙光の如く、彼の筆下に生じて、滿天に溢れ、その波紋の絢爛なる、これが中心たる形相を認めざる能はず。その典雅なるに依つて、彼は、又公衆の意に投じたり、——是れ常識と一般的勢力との證票なり。何也、英國の詩人たらんと抱負を有する者は、倫敦の特質に於てするなく、専ら自家の本色に於て、倫敦の如く廣からん事を要すればなり。されど、テニスンハ、題目を缺き、幻影の山を攀ちて、その神秘を世間に傳ふる事なし。彼は自己其まゝの英人を描くに満足し、これよりも優れたる者を提出せず。詩に數多の段階あり。吾人は各種の美しき技能に對して感謝せざるべからず。されど、耳を獲るは、單に最初の成功たるのみ。從來、最大詩人の最大任務は、その通常の様式が極めて低く、且つ神韻を缺き、彼等が崇高なる琴線を打つは、僅に一二回に過ぎざることを示すに在

(823)

りき。

(324)

詩的本質の要素たる擴張性は、彼等の有する所にあらず。『我等は薔薇の冠を戴き、酒を飲み、物憂き天の古屋根を碎きて、新なる形相を造らんかな』と云へるは、牛津卒業生にあらずして、波斯の詩人ハビツなりき。自然の歌は、その一節だも牛津卒業生の耳に入らず。彼は、眞理を窮めて、他に成心なき智的活動の、活潑にして醫藥的效果ある感化を重んぜず。

矛盾の法則によりて、余は東洋學オリエンタリズムに對する、強烈の趣味を、英國に期待す。物質文明に縋り、理想を忌み、猥些の事物より成れる、衒氣滿々の時好的生活に對しては、東洋の博大に勝れる救濟なし。そは英人の文飾を驚殺し、打壞す。英國は、茲に突如として、古來未だ曾て聞かざる雷霆を聞き、未だ曾て見ざる電光を見、時間と空間とを藐視する大勢力に逢へり。ウォレン、ヘスチングズの如き英人が、印度舊記に現れたる宏壯なる思想の様式に、心膽を打たれ、その同胞國人

の偏見を陋なりとして、これに詩篇『バアグヅァット』の翻譯を薦めたるは訝むに足らず。『不文無識の余にして、若し敢て批評の境地に境界を立て得べしとすれば、余は斯の如き作物の眞價を知るに至つて、歐洲古今の文學より推釋せられたる一切の規則と、わが英國々風の思想及び活動に於て、合宜の標準となれる如き感情、若くは儀客のあらゆる憑據とを排斥すべく、並びに、わが宗教及び道德的義務の明白にせられたる主義よりの、あらゆる要請を排斥すべし』と云へる彼は、更に『想像の華飾、英人の趣味に適せず、文章又崇嚴の極に達して、英人襲套の判斷にては、これを理解するに困難なるべし』とて、讀者の寛假を要求せり。

これと同時に、余は英國民族が、如何なる反動をも自由に現し得るとき、一種回復的勢力を暗藏せるを認む。委しく言へば、常に少數の思想深邃なる人物はこの國民の中に在り、彼等は如何に高邁なる智力をも、如何に微妙なる傾向をも、盡く、これを領會す。たとひ創作的能力は、矮短して、且つ皮層的となれる時

にも、彼等の批評は、屢々この上もなく高尚にして、眼に見えざる神靈の現前を示唆す。余は、從來屢々、英國に二様の國民の住める由を述べしが、爰に至つて愈々その然るを信ず。されど、それは貧民と富民とにあらず、諾曼と索遜ノルマン サクソンとにあらず、「ケルト」と「ゴス」とにもあらず。これ等は常に互に轉換しつゝあり。ロバート・オーエンの説ける境遇の力は實際なり。唯、精神上の二種の狀貌、或は二様の形式と云ふべきもの、即ち、認識的階級と、實行的終極的階級とは、絶えず對稱の地位を保ちて、相互に影響を與へつゝあり。一は頼なき少數者たり、他は尨大の群衆たり、一は篤學にして、思索に耽り、實驗を事とし、他は忘恩の弟子なり、智識に依つて、その利を收めつゝ、これが源泉を蔑視す。この天才より成れる國民と、動物的精力の國民とは、前者が僅に一ダスを數ふるに過ぎずして、後者が幾千萬に上るに拘らず、永久にその不協和と、協和とを以て、英帝國の實力を産みつゝあり。

第十五章 「タイムス」新聞

新聞紙の勢力は、米國に於ては、何人も慣熟せる所にして、その政體と調和せり。英國に於ては、こは封建制度に反抗し、従つて愈々、隠れたる君主國の潮流を排撃する所の惠深き救護者也。有名なるサマース卿の語に曰く「余の時代に提出せられ、可決せられたる、善良の法律中、新聞紙が、余の注意を、これに向はしめざりしなし」と。隅もなく、夜もなし。容赦なき穿鑿は、一切の秘密を曝露し、その太陽顯微鏡の大閃光を、あらゆる匪行の上にそゞぎ、自國の公衆を、異邦人よりも、一層怖るべき間牒となす。従つて、如何なる弱點も、敵の爲めに乘せらるゝことなし。何也、全國民が既に業に警戒せられ居ればなり。かくて、英國は能く古代の諸國を殪したる、各種の皮殻を擺脫せり。新聞紙の監視が、人の恐るゝ所たるは、云ふ迄も無し。如何に由緒ある特權も、如何に愉快なる壟斷も、

(328)

その生命を予測せられざるはなし。世人は改革の理由に慣れ、一步は一步より、その防礙たる論據を奪取す。マンヌフィールド卿、ノーサムバーランド公に謂つて曰く『閣下は新聞紙を讀むをたのしむ。故に余の言を記せよ。閣下も余も生前に、これを見ざるべし。されど、この青年紳士(エルドン卿を指して)はこれを見るべし。或は少しくこれに後る、やも知れず。然りと雖も、多少の遲速はあれ、これ等の新聞紙は、必ずや、爵位も采邑もなきノーサムバーランド公を記し、王なきこの國を記すの日あるべし』と。英國に於ても、米國の如き社會的、政治的組織を生ずる傾向あるは、防ぐべからざる勢なり。而して、その新聞紙の能倣は猛烈なる勢力なりとす。

英國は、男らしく、機敏にして、豊なる素養を有する人物に富み、彼等の才は即座に辛辣の文章を綴り、人物或は事件に關して、明瞭に、大膽に、わが意見を發表するに足れり。貴ぶべきと否とを問はず、こは英國新聞界の外には、殆んど

見る事を得ざる技術なり。英人のこれを爲すは、その詩を作るが如く、その馬に乗り、闘拳を爲すが如し。即ち、これに教育せられたればなり。百を以て數ふる敏快のブレード、フリーア、フルード、フック、マギン、ミル、マコーレイの徒が、新聞紙の爲めに、詩又は小論文を作るは、その議會、選舉場等にて演説をなし、或は獸を狩り、馬に騎ると殊ならず。こは彼等の一般的能力が、全く偶然に、且つ任意に、傾注せられたる結果にして、粗豪の體力及び氣力、牛津教育、社交的習慣等より成り、獨り天才の光は與らず。こは職業の割合に人物の過多、世人一般の猛烈なる政治趣味、新聞にての實習の容易、及び多額の報酬に由來す。

かゝる才能の最も顯明なる結果は、「タイムズ」なり。凡そ英國々内の勢力にして、これ以上に感せられ、恐れられ、服従せらるゝはあらず。朝、この新聞にて讀みたる事は、夕に至れば、社交場裡、聞かざる所なし。そは到る處に耳を有す。

(329)

(330)

故に其報道、最も敏速、最も詳細にして、且つ最も確實なり。そは、一年又一年、一勝又一勝、漸次興隆して、終に今日の權威を得たり。余はその最も古き寄稿者の一人に向つて、曾てこの新聞が今日よりも一層有力なりし時ありしかと訊ねしに、その答に曰く『否、今日はその全盛の日なり』と。「タイムス」は、わが目的を守るの不屈不撓といひ、贅澤極まる智的能力といひ、堂々たる斷言といひ、英人に取つて、最も貴重なる特質を示し、これを支ふるに、その印刷所に於ける整然たる組織、及び全世界に互れる通信、報道の機關を以てす。そは自己獨特の歴史と、著名なる勝戦の鹵獲とを有す。一八二〇年には、皇后カロリンの訴を採用して、王の意志に反し、これを主張したり。貧民救恤法案を採用せし時は、殆んど獨力を以て、これを通過せしめき。ブルーム卿の權柄を執るや、斷乎として、これに反對し、彼をその地位より引摺落せり。そは愛耳蘭に向つて戦を宣し、而してこれを征服しき。そは、穀物條例に反對せる聯合會を助け、コブデンが絶望の聲

を放ち始めし時、却つてその勝利を公言せり。そは、一八四八年の佛國共和政府を否認し、同時に、英國に於ける總ての同情を抑壓し、終に二十萬の警保官を擧げて、「チャーチスト」の徒を監視せしめ、四月十日、これをして滑稽笑ふべきものたるに終らしめき。そは、初め、新佛蘭西帝國を否認し、次ぎに、これを承認して、英佛同盟、及びその結果を強制しき。そは殆んど命令的の聲を以て、總ての市政、文學、社會上の問題に干渉せり。そは商業社會を脅せし奸曲を曝露し、大膽にして時宜に適せる功績を擧げたり。而も、この間、そは着々として、わが印刷機械を改良し、その競争者を攻撃し、その發行高を奪はんとす。何也、「タイムス」に在つては、その發行高を制限する原因は、充分に早く印刷する能はざる一事の外に存せざればなり。これ日刊新聞は、その新しくして時機を得るもの、僅々數時間のことなればなり。そはわが正反對に立てる新聞を除いて、他の總ての新聞を斃すべし。何也、多數の新聞は、その大小を問はず、第一流の新聞を攻

(331)

擧するに依つて生存を保てばなり。

(332)

この程物故したるウォーター氏は、「タイムス」の印刷者にして、漸次に、その總ての材料を整頓し、これを完全無缺の組織と爲せり。傳ふる所に依れば、彼、曾て、この社の有所權に對し、僅少の配分を求めしに、これを拒絶せられしかば『さらば卿等の隨意なり。而して、卿等は、何時にても、「タイムス」を、この社より持去りて可なり。余は次ぎの木曜の朝より「新タイムス」^{ニュー}を發行すべし』と言へり。所有主は、以前より、その印刷料金の高價なるを憂ひしが、爰に至りて既に彼の權力の中に陥れるを認め、唯々として、その要求に従へりと。

余、一日、友人と共に、プリンティング・ハウス^{スタエテ} 街に、「タイムス」社を訪へり。美しき一小庭園あり。これを過ぐれば、入口に達す。余等は、宛も火薬工場に入らんとするものゝ如く、暫くその外觀を眺めつゝ、徘徊せしが、内より物優しき一老婦の扉を開くあり。乃ち刺を通じ、終に、温乎たる風、一點の争氣を露さ

(333)

ざる好紳士、モリス氏の室に導かれたり。次ぎの統計は、今日に至つては、その實を失へり。されど、余の記憶に依れば、氏は、余等に語りて言ひき、當時の發行高は、三萬五千にして、一八四八年五月一日には、五萬四千といへる、未曾有の紙數を發行し、二月以降八千枚を増加せり。その使用する舊印刷機は、一時間に五千乃至六千枚を刷出し、現に汽機を据附けつゝある新器械に至りては、一時間間に一萬二千枚を印刷すべしと。モリス氏は、余等を懇切なる助手に托して、建物の内部を案内せしめしが、爰に使役せらるゝ者、すべて百二十名位と見えき。余は記憶す、探訪員の室にて、彼等がその速記を整理しつゝある所を見たるを。唯、余も亦世人と共に、記者室に就いての好奇心を抱きながら、遂にこれを見ず、又その内に働ける人をも見ざりき。

「タイムス」の幹部は、常に有爲の人物を以て充つ。老ウォーター、スターリング、ペーコン、バートン、アルシガー、ホレーヌ、トウイス、ジョーンズ。

(384)

ロイド、ジョン・オクスンフォード、モースリー氏、ヘイリー氏等、各々独自の欄に於て、この新聞の聲價を高むるに貢献せり。加之、そは第一流の文豪よりも、時々、その助力を受けざる事なし。その秘密の報道は、深伏暗藏、説明すべからず、かの奈翁幕中の大警視フーシェの偵察を想はしむるものあり。タイムスは、外國の各都會に商業上、及び政治上の通信員を置き、その早達便は、政府の急使より尙早し。世人は、その雇人の昇進が、宛も、印度政廳の官吏に於ける如きを耳にす。余も、その探訪員の一人の、巧妙なる手腕を聞けり。彼は、ある時、官憲の嚴重に新聞探訪員を禁じたる場所に立てるを悟り、その雙手を、上衣の袷袋に突込み、一方の手に鉛筆と、他方の手に手帖を持ちて、その仕事を爲したりと。

この新聞の威望は、普く歐洲の認むる勢力なり。而して、勿論、これを識るの深切なる、その管事者自身に過ぐるはあらず。その論說の聲調は、往々大陸諸宮廷の政治機關より注疏を加へられ、時として、外交上の怨嗟を買ふ事あり。タイム

(385)

ス」がこれを何と言ふべき乎、是れ巴黎に於ける、伯林に於ける、維納に於ける、コッペンハーゲンに於ける、ネポールに於ける恐怖なり。その周匠なる思慮と成功とは、配合に巧なる、英人獨特の長技を示す。この日刊新聞を成すは、多數人間の協力なり、彼等は、概して新に大學を卒業し、暫く倫敦市内の辯護士事務所にて、法律を實習したる青年也と云はる。従つて、學者の雍々と、古典的の引喩とは、その紙面を飾り、従つて、その攻撃する時の強熱と、勇猛とを有す。されど、その目的の堅固なるは、別に、この活火を養ひ、これを導く老機關士の、存するを示唆す。即ち背後に於て、精細なる知識と、一定不變の政見とを有する人物が、記者に給するに事實の根柢、及び占取すべき目的を以てし、その年少銳氣と雄辯を假りて、自己の主張を貫かんとしつゝあるが如し。かの元老院、及び行政々府も、各々、かゝる分業に依りて利益を收むるのみ。才幹匹敵する二人あらば、自ら書かずして、絶えず世務の進行を注視する者が、勢ひ、他の一人よりも

(836)

も、一層高き見識を得るに至るべし。されど「タイムス」は、各部完全に戮協し、その論説は、盡く單一の意志より出づるが如し。「タイムス」は未だ曾て前言を否定せず、記者の不在或は執筆者の粗忽といへる辯疏を以て、自ら不具となすが如き陋態を演せず。その語るや、露骨にして大膽を極め、その論ずる所に膠着す。そは學識豊厚、文章雄麗の士を、幾人にも、意の儘に、寄稿家となすべし。されど、一層博學にして能文なるもの、これを監理し、訂正し、平等にす。そはわが密室以外に、秘密を洩らす事なし。何れの記者も、ある特殊紙面の執筆者たることを言明する事を許されず。いやしくも價值ある言論は、何れの方面より來れるを問はず、その社説として現るべし。かくて紙面は一切萬物たり。毫もこれに書かざる者と雖も尙、この新聞事業の成功の品性たり、威容たり。

英人は、報道詳悉の故に、「タイムス」を好む。「タイムス」に現るゝ事實の叙述は、議會速記録の引用と等しく信頼すべし。英人は、又、その獨立を好む。彼

等は、何時、これを採用するかを知らず、又、この新聞が、何事を説けるかを知らず、唯、就中、その論調の國民的にして、自信に富めるを好む。「タイムス」は彼等の總てに代りて思考す。「タイムス」は彼等の理解力なり、又、寫眞に撮りたる今日の理想なり。余は、彼等が、この新聞を讀むを看て、その一刻々に愈々益々英人らしき風手を具へ來る如きを感じず。「タイムス」は、國民的勇氣を有す。そは燥急にして怒り易きものにあらず、思慮深く而も斷々乎たり。權威と雖も、富と雖も、これが攻撃を禦ぐの楯たるに足らず。一人の公爵を搏つに猶豫せざるは、一人の巡查を搏つに殊ならず。「タイムス」は、海軍本部に向つて、手荒き仕事をなす。全國僧正の椅子も、一層安全なりとせず。一人の僧正は、貪慾の故に、辛き目に逢ひ、他の一人は、固陋の故に、更に、他の一人は、柔媚の故に攻撃せられたり。進んで、時に皇帝にも、言を進め、往々諷説して容れらるる事あり。一種自由の風格は、その廣告欄のうちにも仄見え、他邦人に向つて、英國の長所

(837)

(338)

を標示す。一八四七年、余が初めて倫敦に到着したる頃、日々の廣告の中にて見しは、ある人、詐欺取財の罪に問はれしとて、何人にも、前の國會議員なる貴族某を、英國内何れの地方監獄へにても敲込みたる人あらば、その報酬として五十磅の金を呈すべしと言ひ、その貴族の姓名爵位を詳記したるものなりき。

この新聞の論調の如く、尊大なるは、古來未だ曾て無し。牛津又は劍橋の卒業生が、入社後、初めて草する社説は、その一語一句、眞に過去幾千年の文明の進歩も、畢竟、この一「タイムス」を書かんが爲めの準備なりしかの觀あり。吾人は、世界はその朝餐の爲めに「タイムス」社に向つて平伏せるかと怪むべし。されど、この尊大には根據あり。若し「タイムス」にして他の新聞と同じく『想像し』、若くは『敢て自白し』、若くは『試に預言す』とせば、誰か、これを顧みんや。否、「タイムス」は『そは斯く々々也』と斷言す。従つて、そは斯く々々あるべきのみ。

「タイムス」の德義と愛國心とは、單に代表的たらん事を求めて、決して理想

(339)

的なるを求めず。その論を立つるも、多數の意見に依らず、命令者の階級に従ふ。その記者は、抽象的理論としては、何人にも踰えて、露國、若くは埃太利を防禦し、或は英國既得の權利を保護すべき方法を識れり。されど、彼等は現在の社會を指導する階級に代りて辯論し、時々刻々、所在を變ずる勢力の、今何處に移れるかを發見する本能を有す。彼等は、現在を支配する階級に同情し、これが爲めに辯じ、而も、絶えず、一切の大暴浪と、一切の「チャーチスト」の決議と、一切の寺院争ひとの報知を受くるが故に、苟も何等かの異變あれば、何人にも先じて、第一にその微動を感じるものなり。彼等は、各種の改進黨に從事する文學者の惡戰を監視する事、一年又一年——偏へに、これを罵倒し、阻害せんが爲めにのみ——遂にその漸く事實を確立し、勢力の將にこれを去らんとするを見るや、一大獅子吼を擧げて、その中に突入し、わが苦めたる敵と、救ひたる味方とを、同時に吃驚せしめ、以てわが捷利を確實にす。言ふ迄もなく、向上的精神

に富める者は、「タイムス」の賛成は、所詮、運命の賜にして、自らその原因を作る以外に、これを獲ること能はざるを識れり。

「ポンチ」誌も、「ロンドン・タイムス」と共に英人常識の表現なり。そは同一常識の好笑的翻譯のみ。その諷刺畫の多數は、各最良の一小冊子と匹敵し、世務の變動ある毎に、これに對して現るゝ公衆の見解を、直に看者の眼前に展開す。その寫生畫は、大抵大家の手に成り、時として、天才の面影を見る。「ポンチ」は總ての階級に喜ばる。何也、徹頭徹尾、全英國を支配する所の趣味に従へばなり。「ポンチ」に現れたる如き、従つてジロルド、ディッケンズ、サッカリー、フッド等の滑稽作者に現れたる如き、英人の機智と談諧とが、人道及び自由の方向を取るに至りしは、正に第十九世紀の新特色と謂ふべし。

「タイムス」も亦他の一切の重要な施設の如く、一層善なるものに進むべき道を示す。そは巨大なる英國勢力の活ける索引なり。その存在は、我知れる所を盡く

印刷せんと欲し、あらゆる事實を識らんと欲し、而して、社會の弊害を蔽ふて、我に媚びるものを欲せざる人民の榮譽たり。勇敢には常に安固あり。望むらくは、この新聞は、その勢力に辜負せざらん爲、常に人民の感情を正義に導きたりと附加し得たらん事を。英國の新聞は高尚なる調子を有すと、議會其他の所に於ては、普通に唱へらる。されど、「タイムス」はこれを有せず。そは帝國的調子を有す。これ強大なる獨立の國民に見る所のものなり。されど、他の帝國に於ける如く、この調子は、官廳的オラシヤルに傾き、時に進んで藥局的オラシニアルならんとす。「タイムス」は、治者の階級の總ての制限を忍び、少數に屬することを悦ばず。「タイムス」にして、若し、直に正義を劈開し、正義が唯一無二の手段たるを示し、その電槽を養ふに、人道の中心熱火を以てすとせば、その寄稿家の中に、かくも多數の有爵者を網羅せざるべく、却つて天才こそ、その懇切なる、且つ打勝つべからざる同盟者ならん。そは時に或は畏るべき聯合軍の襲撃を受くるやも知れず。されど、

(342)

賢明なる勇氣を以て戦へる新聞の滅びたる例はあらず。そは英國改革の自然の指導者たらん。そが全歐洲の聲としての、及び僭王に反對する亡命者、愛國者の庇護者としての、傲然たる使命も、更に能く果さるゝならん。そは多くの理想家の夢に上りて、而も未だ實現せらるゝに至らざる『インターナショナル・コングレス萬國議會』の爲めに必要とせらるゝ權威をも實際に獲得するならん。而して、その捷利の最も小なるものも、英國に、惠深き勢力の新なる一千年を與ふるに足るものあらん。

第十六章 「ストーンヘンジ」

余は我友シイ(カアライル)君と、余が英國を辭するに先ち、余等の何れも未だ見るを得ざる「ストーンヘンジ」に、兩人相携へて、旅行をなさんことを約したり。この計畫は、古蹟と同行者と、二重の愉快を以て、余の思想を悦ばしめき。今の一切の書籍に、感化の痕を印せる、英國最新の思想家と共に、國內最古の宗

教的記念物を訪ふは、極端と極端とを一結合したるものゝ如くなりき。余は、聊か我見聞を概括し、英國の外観に就いて、シイ君の如く、余が大にその天才を敬重せる人にして、且つ又、洞察の明に、義務の觀念の嚴肅なること、その國人の何人にも劣らざる人と、少許の道理ある議論を交換するを樂みたり。

七月七日、金曜日と云ふに、余等はサウスウエスターンレイルウエイ西南鐵道に依り、ハムプシャーを過ぎて、ソリスベリイに着し、此處より馬車に乗りて、エムズベリイに到れり。天氣朗晴、且つ、我友は、毎夏幾日を、ハムプシャーにて送るを例とし、この地に就いて、特別の智識を有せるが爲めに、殆んど道の長さを覺えざりき。余等は又、米國の旅行家、及びその倫敦に於ける通常の目的に關しても、語る所少からず。余謂へらく、米人が倫敦に來り、その自國に在つては、見る能はざる藝術品に、若干の時を費し、又、方今、倫敦をして世界の注目點たらしむる、諸種の科學上の俱樂部、博物館等に、その少許を費すは、最も當然の事なりと。されど我哲學者

(343)

(344)

は、これに満足を表せず。藝術及び高等藝術は、彼の嘲罵に對して、絶好の標的となりき。彼曰く『然り、藝術は、大なる迷妄のみ。ゲーテも、シルレルも、これが爲めに貴重なる青年時代の、大部分を費したり』と、——而して、彼は自ら、ゲーテも晩年これを悟りて、その著述の調子を改めたるを、發見せりと思惟す。人が藝術、建築、古物の如きを口にするに至つては、決して好き結果を生せず。彼は、無言に、英國博物館を觀覽せん事を望み、又、眞摯の人間は、何物かを見るべく、而して何事をも語らざるべしと考ふ。斯くて、彼がこの頃の意見によれば、建築家に相應しきは、唯嚴密なる必要を圖り『余は卿等の如き死せる人間の爲めに、又卿等の有する如き、死せる目的の爲めに、一種の棺廓を送るを得。されど卿等に裝飾の要なし』と斷言するに在りとなり。何也、科學に對しては、彼は、更に一層、假借せず、ソマセツト家の學者を、かの孔子と問答したる少年と比較すればなり。少年問ふて曰く『天の星は、その數幾何かある』と。孔子答ふる

に、その『自己に近き物にのみ注意せる』を以てす。少年輒ち曰く『果して然らば卿が眼に幾何の睫毛ありや』と。孔曰く『未だこれを知らず、思はず』と。

尙、米人の事を語り、シイ君は、彼等が、英人の冷淡と排他とを忌みて、佛國に趨り、その國人と相率ゐて去り——、而して愉快を取り、却つて、男らしく倫敦に留まりて、英人と對抗し、實際大に學ぶべき所のものを有する彼等より、その修養を取らざるを惜めり。

余が、友に告げて言へるは、余は、元來、物に眩眩しやすく、且つ、英人として要請するところのものは、總て承認するを常とす。余は國內到る處に、智解と氣力の實證を見、各種の成功を見たり。余はこの人民を好む。彼等は、美なると共に善なり。彼等はあらゆる物を有し、あらゆる事を成すに足る。然りと雖も、余は確實にこれを知れり、余が、一旦、マサチューセツツに歸る時んば、直にかの米國の風土に鼓吹せられ、吾人は無量の便宜を以て運命の開拓に従事せり、貌

(345)

(346)

列嶺民族の住地にして中心なるは、此處にして彼處にあらず、如何なる技倆も、活動も、同一人種の手に在るかぎり、強盛なる自然的便宜に及ぶ事能はず、従つて英國と云へる、古く且つ涸渴せる島は、他の老親と等しく、その子の強きを以て満足せざる能はざる日に遭ふべし」との感起さん事をと。然れども、こは如何なる階級の英人も、容易に歓迎する能はざる説なりき。

余等は、サリスベリイにて汽車を棄て、茲より、馬車を備ひて、途中、曾ては、議會に二人の議員を出したる町ながら、今や、赤裸の丘と變じて、一軒の茅舎をも有せざるオールド・サラムの地を過ぎ、エムズベリイに着し、そのジョージ館に馬車を停めて、晝餐を認めたる後、徒歩にて、サリスベリイ平原プレーンに向ふ。暗澹たる岩の下、漠々たる岡陵の上、一望人家なく、唯見る、かの「ストーンヘンジ」は、鳶色の矮人の一大集團かと疑はれ、多くの古塚は、廣原を飾れる浮凸彫のごとく、別に少許の乾草堆の散在せるを。山上の廢寺も、斯くの如く、深き

(347)

印象をば、與へざるべきか。遠く、迥に、寥々たる牧人あり。その獸群と共に、原上所々に亂點し、商旅一人、野徑を追ふて行く。この人口稠密なる島國に於て、この原始的寺壇に與へたる、廣濶なる餘白は、宛ら貌列嶺民族が、その一切の宗教的建築と歴史とを産したる、古き卵を尊敬するの餘り割愛したるものとも謂ふ得べし。「ストーンヘンジ」は圓形の柱廊コロナドにして、その直徑百呎、内部に更に三重の柱廊を有す。余等は、その石柱を旋り、又、その上に攀ちて、その異様な形狀と配合とを精査せしが、これ等の間に、風を避けたる、一隅を發見して、友は、その紙卷シガーに火を點じぬ。愉快とも言ふべきは、この單純なる建築中の最も單純なるもの、——二基の直立せる石材に、一個の楣石まぐさいしを架したる——が、これに後れて現れたる一切の寺院、一切の歴史の亡びたる今日に至つても、尙殘存し、恰も地球表面にて最も恒久的なるもの、如き觀ある事なり。これ等柱石と古塚は即ち「ストーンヘンジ」の周圍三哩の間にある一百六十個の單なる古塚は、譬へば

(348)

希臘トロイの郊野に立てる古塚が、ヘレスポントスの海峡を過ぐる水夫に向つて、
 ホーマーの勇壯なる物語と、アキレスの大名を思はしむにも似たり。圓周の内
 部には、風呂草、蕁麻を生じ、その外には、一面に茴芹、野菊、繡線菊、麒麟草
 薊、地氈類を敷く。余等の頭上には、雲雀あり、雲に冲り、頻りに囀す。我友曰く、
 『この雲雀は去年を以て化生し、この風は、幾千年の昔に化生したるもの』と。余
 等は石柱の大なるものを教へ、且つ歩幅を以て、これを測量し、突嗟の間に、こ
 の不可思議の寺壇に就いて、人の識り得る限りは、苦もなく、これを検出せり。
 石柱の數、九十四、以前は恐くは百六十を算したるならん。寺壇は圓形にして、
 屋蓋なく、その位置を星學的に定め、大門は、アペリイに在るものと共に、正し
 く東北に向へる事『總て古代の石窟寺院の門の如き』ものあり。而して、この石
 材は何處より齎來りしか。こは皆サルセン、即ち德雷的の沙石にして、この附近
 に於ては決して發見せられず。その中、火に耐ふるは、獨り犧牲石と稱するもの

なるが、こは余が書籍に依つて知れる如く、遠く一百五十哩の彼方より搬ばれた
 るものなり。

余等は、殆んどあらゆる石の上に、鑛物學者の椎と鑿の痕跡を認めたり。内部
 の圓環を成せる石柱の中、比較的小なる十九個は、花崗石なり。余は今恰もシジ
 ユック教授の管する劍橋博物館にて、太古の大關獸、蝦蟆龍等を見たり。乃ち、
 これ等岩石を運送して、積累ねたる動物が、一層智識ある巨象、若くは磨齒獸な
 りし事を主張するに躊躇せず。巧妙なる笥附の細工を加へ、又は、石の表面を琢
 く方法を解せるは、獨り進歩したる動物に限る。あらゆる詩人が、今に至る迄、
 一千八百年の間、その眼を留めたる國土に於て、斯くも顯著なる遺蹟に、到底、
 何等かの神秘を許さざるを得ざる一事は、則ち神秘中の神秘と曰ふべし。吾人は、
 この建築に關して、從來知られたるよりも、更に多くを研究するに、時尚遅しと
 せず。致々吃々として倦む事なきフェローズ、レヤードの徒は、その周匝なる英

(349)

(350)

國的精神と忍耐とに依り、一石又一石、終に歴史の一切を闡明すべし。彼等はその目的物を選ぶに極めて幻想的にして、自國の「ストーンヘンジ」或は「エイル・ゴール」を雉兔に委しつゝ、金字塔を開き、ニネヴェの故蹟を發掘したり。「ストーンヘンジ」は、その規模の單純にして保存の良好なるが爲めに、宛ら新にして近きもの、如し。されば、これより一千年後、人類は、頓て解釋せらるべき精細の歴史の爲めに、今の時代に感謝する事あらん。

余等は内に入り、外に出で、幾度となく、この奇怪の石柱に向つて、新なる睥視を投じぬ。悠悠萬古の「スフィンクス」は、區々たる國籍の差別を無視す。この精神的石柱に對しては、余等二人の巡禮者は、均しく相識にして相近し。余等は共に、その古き貌列嶺的意味を尊重するを得たり。我哲學者は、神怯し、氣沮めり。この寂然たる運命の堂に臨んで、彼は圖らずも口外すらく「余は何處に到るも常に扁柏を植う。斯くして勞を求むるのみとするも、余は決して謬るの處な

(851)

し』と。この地點と、この蒼々たる石材と、及び處理せらるゝを拒めるこの粗拙なる配列とは、彼の心中に、時代の飛奔と、宗教の繼起とを示唆せり。英國の上代が、我友の心を壓するや、深し。彼曰く、「余は近年殆んど讀書と云ふ事をなさず。唯、倫敦圖書館に藏する五十三卷の「神聖法規」を讀むのみ」と。彼は、この中にあらゆる英國の歴史を含むとなし、これを讀む時は、イオナの古聖が、世人の前に坐して、筆を取れるを感ずと言へり。「神聖法規」は、當時の人が、神を信じ、靈性の不滅を信じたるを、明白に告ぐ。譬へば、當時の堂塔伽藍の然るが如し。されど、今や清淨教と云へるものだに無し。倫敦も邪教に墮せり。彼の想像に依れば、曩日、英國には、その文學者よりも迥に偉大なる人物ありき。然れども、事實として、これら文學者の現れ初めたる頃には、偉人は既に業に地を掃つて空しかりきと。

黄昏、余等は古塚を辭し、明朝を以て家路に就かんと、二哩を隔てたる旅宿に

(352)

歸る。途上、小雨あり。且つ、時既に遅く、人々出で、乾草を掩へり。驟雨多き英國とて、荒草離々と繁りて、仄暗し。宿に到れば、一杯の茶に牛乳あるのみ。更に多くを命ずるに、三滴を齎せり。余の友は英國旅宿の信用を問はれて、大に迷惑せしが、これに止まらず。翌朝となりて、余等は「ドッグ、カート」と稱する二輪馬車より外には、乗物を得る能はず、兩人、これにてウイルトンに送られざるべからざる窮状に逢へり。

余は途中ブラウン君と言へる一人の講古先生を備ひ、これと共に「ストーンヘンジ」を訪ひて、その「天文石」及び「犠牲石」に關し、識る所を聞けり。余が後者の上に立ちし時、彼は眞直の、寧ろ少しく傾きたる、天文石を指し、その頂が天際と一致せるに就いて、余の注意を喚べり。然り。太だ然り。看よ、夏至の日に於ては、太陽嚴密にこの石の頂より昇るべし。而して、アペリーの德雷的教の寺院にも、これと同一の關係的位置に、亦一個の天文石ありと。

傳説の默する時、この科學との唯一の關係は、極めて重要な導線なり。されど、

余等はこの問題を岩石と共に後にするに満足したり。こは果して、マンモスのジ

ョフレイが言へる如く、ヘンジストに殫されし英國貴族の爲めに建てたるユーサーペンダゴラスの記念にして、即ちメルリンが愛耳蘭のキルラウスより持來りし

『巨人の舞踊』なるか。或はイニゴー・ジョーンズがゼームス王の爲めに説明したる

如く、羅馬人の遺業なるか。或は又デウイスが、その『ケルト研究』の中に唱導

せるが如く、太陽を祀れる東印度の寺院と、意匠も様式も同一なるものか。多數の論者中、最も信憑するに足るは、スチュークライなり。この大膽なる考證家は、

その廢址の幾何學的整齊に眼を留めて、これを世界最古の記念碑、及び宗教と共に説明し、且つ英人特有の勇氣をもちし彼は、強ひて『神はストーンヘンジの意匠に従ひて世界を創造せり』と主張せざりき。彼に依ればサリスベリーの郊野の「カーサス」は、恰も、地球表面の緯線の如く、高原を横斷し、「ストーンヘンジ」

(353)

(354)

の子午線は、正にその中央を貫けりと。而して、爰にこの説の要點を含めり。即ち德雷の派は磁石を有し、これに依つて、方向を定めたり、僅に正東、正西より動ける、「ストーンヘンジ」、アムブレスベリイ、其他に於ける基礎點は磁針の變差に従へるものと。德雷の派はフェニシア人なり。磁石を呼んで「レピス・ヘラクリュース」(ヘラクリュースの石)と言ひ、而して、ヘルクレスはフェニシア人の神なりき。この希臘の英雄ヘルクレスは、傳説に依れば、太陽に向つて弓を引き、日神より黄金の杯を授けられ、これを用ひて海を航しきと。こは磁針の函にあらずして何ぞや。この磁針を盃又は小皿の中の水に泛べて、北を指さしむる装置は、恐くは未だこれをビンの上に載せざる前に行はれたる、最初の形なりしならん。されど科學は一種の秘藥なりき。貌列嶺がフェニシア人の秘密なりしが如く、彼等は羅針盤を秘密に保ちしが、そはタイヤ人と貿易を開くに至つて失はれたり。次に、ゼーソンの金色の羊毛と稱する物も亦磁針にして、その一片の磁石

が、世界の寶貨なりしは、容易に推察せらる。従つて、そが海業國民の年若き英雄の貪望と野心とを煽り、彼等をして、この賢明なる石を占取せんと企てたる探險隊の中に入らしめたるも自然と言ふべし。斯くて、「アルゴ」と呼ばれる船は僥倖にして、詫宜をなすとの寓話を生じき。又、種々の名稱の間に奇なる暗合あり。アポロドラスはマグネスを以て、ナイスを娶りしエオラスの子となしき。これ等の暗示に本きて、スチュークリイは、更に歴史と調和せる壯大の柱廊を築み、羅針盤に現るゝ既知の變差より推算して、この寺壇の創立を、大膽にも基督降誕前四〇六年と斷定したり。

この大さの石材を取扱ふは、極めて困難なるに係らず、かゝる仕事は、毎日の如く、各地の都會に行はれ、而も僅に馬の力を假るに過ぎず。余は、昨年、ボストンのポードウイン衢にて、ある家の建造に従事せる人々が、通常の動臂を用ひて、「ストーンヘンジ」石柱の最大なるものと等しき花崗石の截片を揮廻すを見た

(355)

り。彼等は普通の石工にして、愛蘭人を助手となす者、元より特に目覺しき事となす如く考ふるにもあらず。余惟らく、千年前の人間も敢てこれに劣らざるべしと。然り、而して吾人は「ストーンヘンジ」が如何にして造られ、且つ如何にして忘れられしかを訝めり。茲に半時間を費したる後、余等は再び「ドックカート」に乗り、野を降りて、ウイルトンへと向ひしが、我友は、今日幾千萬の貧民が餓ゑて職業を求めつゝあるに方り、かゝる廣大の平原を、空しく劣悪なる放羊場として委棄せる地主に對して、激しき罵倒を禁ずる能はざりき。されど、余が後に至りて聞きし所によれば、この土地は、開墾の時一回の收穫を生ずるのみにて、その後は無用の瘦土に歸するが故に、これを耕すは不經濟なりと。

余等はウイルトンに着き、ウイルトン邸を見たり。この地はベムブローク伯爵の有名なる住地にして、邸はシェークスピア及びマッシンジャーにも知られ、又サー・ヒリップ・シドニイも屢々茲に住みて、その著「アルカディア」を草し、プ

(357)

ルック卿とも、談話を交へたりと。ブルック卿は思想深遠にして、一個の詩人たり、自らその墓石の銘を撰して曰く『こゝに眠れるは、サー・ヒリップ・シドニイの友、フルク・グレイル・ロード・ブルック也』と。この家、今はベムブローク伯爵の所有に屬して、その兄シドニイ・ハーバード氏の本邸となり、英國諸侯の田宅を見るべき、貴重の標本と稱せらる。余の友はハーバート氏より、その執事に宛てたる添書を携へき。輒ち許されてこれを視る。大廳は、高さ三十呎、幅三十呎、長さ六十呎の廣さを有し、附屬室は上下四方各三十呎とす。これ等の室及び長大なる圖書室は、皆ヴァンダイク其他名畫工の手に成れる祖先の肖像、及び優秀なる畫幅を以て充たされ、方形の修道院には、古今の彫像を所狭きまで藏す。これに對して、友は、その手に目錄を練りつゝ、殆んど相當以上の讚辭を下せり。されど、余等の眼は尙窓外に惹かれざる能はず。其處には壯麗なる芝生ありて、國內最美の檜樹を生せり。余は斯くの如く好ましき庭園を見たる事なし。余等は

家を出で、邸内を漫步し、イニゴー・ジョーンスの架したる橋を渡る。園丁、この小流の名を知らず。恐くはアルフならん。暫く鹿を眺め、又、別に離れて、森に掩はれる丘の頂に立てる、彫鏤^{ほりもの}美しき涼亭に上り、伊太利風の庭に降り、佛國風の東屋^{あづまや}に入りて、佛國傳來の胸像^{ブスト}を見、再び本邸に歸れば、余等の爲めに、麵包、肉、桃、葡萄、乃至酒を満載せる食卓の用意せられたるありき。

ウイルトン邸を去つて、余等はサリスベリイへの汽車に搭す。この地の大禮拜堂は、六百年前の竣工に係れども、尙、一種瀟洒にして近世的なる空氣を帯び、その尖塔の高さは、英國第一なり。されど余はその何故なるかを知らざるも、曾てコヴェントリイにて、餘り世に聞えざる一基の高塔を見しとき、これよりも一層深くその美に打たれたり。そは地面を抜く事、三百呎、細き小草の如くに輕快にして、全く主寺院の建築と關係を有せざるものなりき。サリスベリイは方今、英國に於ける、ゴシック美術極盛の地と目せらるゝ程ありて、その傍牆^{パトレス}は、全然

露出し、且つ主屋の構造に従ひ、誠實に、その形狀を規定せらる。大禮拜堂の内には、その中央に風琴^{オルガン}ありて、恰も衝立の如く、これを劃れり。余は、眞の建築に於て、長き線に相對する視覺の要求が、多くは満足せられざる理由を解する事能はず。美術の原則に依れば、柱廊はその長き丈、愈々美にして、こは際限を有せざるものなり。況んや、寺院の本堂に、衝立を以て、これを分割せざるべからざる程、長きに過ぐるものは、殆んどこれ無きに於ておや。

余等は堂内にて、その勤行^{こんぎやう}の間、内陣の外を逍遙しつゝ、風琴の音に耳を傾く。わが友は曰く、音樂は佳し、されど未だ充分に宗教的ならずして、僧侶の唱歌が、譬へば、美しき天女に、戀慕の情を運ぶものゝ如く聞ゆるを惜むと。友の望まざる爲め、余等は内陣の一覽を請ふに及ばず、更に他の古き寺院を訪ひたる後、旅宿に歸れり。余等は汽車にてクライレンドン公園を過ぎしかば、我友が『クライレンドンの法令』の産地を仔細に見物せん事を欲せしに拘らず、僅にその森の一

角を望み得たるのみ。ピシヨップストロークにて下車し、エイチ君の馬車を以て余等を迎ふるに逢ひ、與に共にピシヨップス・ワルサムWalshamの氏の家を抵る。

日曜日は非常の雨にて、余等は盛に議論を闘はせり。友曰く、米國に何等か米國的理想を抱ける者ありや、——自國の將來に關して、何等か公正の説を有する者ありやと。斯くの如く挑まれて、余が竊に思ひ浮ぶるは、豫選會にもあらず、議會にもあらず、大統領にも、國務大臣にもあらず、或は又、彼の米國を以て、第二の歐洲たらしめんとする輩にもあらず。余は唯彼の心最も素朴にして潔き人々を想へり。余曰く、『確に然り、されど、これを抱く者は、一種の夢想家なり、余はその夢を英人の耳に入るゝを欲す。英人に取つては、それは單に滑稽なるべし。されど、たゞこれを眞とす』と。乃ち、余は無政府Anarchismと無抵抗Non-resistanceの教義を開き、これに對して反駁と嘲笑とを期待せしに、圖らずも一種の傾聽を羸得たり。余曰ふ、余が從來何れの國に於ても、この眞理を擁護するだけの充分なる勇氣を具へたる

(360)

人に逢はざりしは事實なり。されど、これ以下の勇氣が、余の尊敬を博するに足らざるも、亦余に取つては明白なり。余は容易に野鄙ラスケット、ウァレンツなる銃器崇拜の破産を看破す、——假令、偉大なる人物が銃器崇拜者なりとも、——而して確實にして秋毫の疑を容れざるは、更に他の銃を要するに及ばざる銃、愛と正義との大法、これのみが獨り十全の革命を成就するを得べし、と。余は我物語の一二條が、友に多少の感興を興へたるを想像す。

午後、余等は宿の主人の東道にて、ウインチェスターを訪ふ。途すがら、友は米國に關して余に種々の質問を爲せり、風景は奈何、森林は奈何、家屋は奈何、一例として余の住宅は如何と。これ等の質問に對し、満足の答を興ふるは容易の業にあらず。余は米國に在りし時惟へらく、自然は昏睡を貪り、鬱々として繁茂し、殆んど意識ある如くにして、これを描けば、畫中の人間に對して均衡を失ふること極めて甚く、従つて、一種の「悲哀」を呈する事、宛ら、夜中、森林、沼

(361)

(362)

澤の蒼蔚たる樹木が、その嗜める雨露に浸されたるを見るにも似たり。この偉にして頽然たる大陸に於て、高きアレガニイの牧場に於て、海濶天空の大草原に於て、英國の剪採美しき籬色と、隙間もなく耕されたる園圃とより、遠き昔に趁ひ出されたる大なる母は、今尙靜に眠り、謔き、隠れ居れりと。而して、英國に來りて、余はこれを悟る事殊に甚し。英人は皆正しき容儀を守り、六時の正餐には、必らず衣裝を改めざるべからず。かくて、余は極めて不適切なる細事を告げて、能ふ限り友を瞞過せり。

將にウインチェスターに入らんとして、余等は聖クロスの教會に歩を停め、その奇異なる寶物を一見したる後、一片の麵包と一盞の麥酒とを求む。これ即ち教會の創立者ヘンリー・デュ・ブローアが、一二三六年、何人を問はず、入口にて乞へる者には與ふべしと命じたる所のものなり。余等も共に、これを寺院を管せる老夫婦より得たり。その語る所によれば、この要求をなす者、毎日、大抵二十人はあ

りと。この七百年繼續の歡待も、我友をして肯かしむる能はず。彼は、その主僧が貧民の爲めにとて一年二千磅の金を受けながら、この僅少の麥酒と麵片の外には更に費すを知らずとて口を極めて罵れり。

大禮拜堂に至つては、余は少くともその幅員の大なるに感謝す。線の長さ、何れの寺院にも踰え、長徑五百五十六呎、短徑二百五十呎を有す。余はウエストミンスター及びヨークの伽藍を除けば、從來見たる中にて、最もこの寺觀の好ましきを感じず。カノートを葬れるも茲なり、アルフレッド大王の王冠を戴き、後、葬れたるも茲なり、其他、索遜諸王の墳塋もあり、近くはこの寺の建築家ウィッカムのツイリアムをも葬れり。こは甚だ古し。余等は地下殯葬所の一部に降り、古代の建物の索遜式、及び諾曼式迫持を見しが、これ即ち現在の建物を支ふるものにして、今より千四五百年前の築造に係る。シャロン・ターナー曰へり「アルフレッドは、その創立したるウインチェスターの寺に葬られき。されど、王の遺骸は、

(363)

(364)

ヘンリー一世に依つて、市の北部ハイドの草原に立てる、新しき御堂に移され、高き御堂の下に横りき。この建物、宗教改革リフォメーションの際に破壊せられしかば、アルフレッドの遺骨は、今や、現今の堂宇に覆はるゝに至れり、即ち舊建物の廢址の間に埋れり』と。案内者、余等の爲めに、ウイックカムのウイリアムが神龕を開く。我友、その中に安坐せる大理石像の雙手を執りて、親しげにこれを拊つてり。蓋し、彼はウインツォール宮殿と、この大禮拜堂と、この地の學院と、牛津オックスフォードのニュー大學カレッジとを建てたる、この豪健なる藝術家を正しく尊重すればなり。されど、時既に暮るゝに近し。余等は徐にこの古刹を出で、主人と別れて、倫敦へと汽車に搭じき。

第十七章 交游

匆惶たる七年の歲月は、以來、英國の人と事とに多大の變革を生せしめたり。今に及んで、かの古き旅行より得たる、以上の評論を閲するに、余は交游の人

人に關して言及せる所なし。唯、最後の一章、及びその人の名聲甚だ高く、自己に關する總てのことによりて、社會に一種の財産を寄與したるの觀ある、一二の場合を例外となすのみ。余は、單に、到底償ふに由なき、負債に對しての答謝としても、進んで、更に少許の陳疏をなさざるを得ず。

余は新なる朋友より甚深の厚意を受けて、最も愉快なる旅行をなしたる爲め、余が英國の印象は、公の會合、並びに家庭の樂しき記憶を以て、燦然たる光輝を放てり。而して、英國以外の地に於ては見るを得ざる現象として、修養ある紳士が、幸福なる家庭に圍まれて、『名譽と、愛と、服従と、多數の交友を有する』は、その總ての制度の中、最も善美なるものなりとす。初めてリヴァプールリヴァプールの港に着きし時、余は、我マンチエスター通信員の余を待てるに逢ひしが、彼はこの際の懇なる歡迎に繼いで、續々余に與ふるに、情恆に富める有力の注意を以てし、余の英國に留まれる間、暫くもこれを休めざりき。識見廣く、文藻膽にして、勢力

(365)

(366)

ある一地方新聞の記者たる彼は、堅實の美德に加へて、無限の溫藉と澹泊とを有し、宛ら、その胸に甘露の池を湛へ、これより迸る濃液の爲めに、そのあらゆる言語と動作とを圓轉滑脱ならしむるものゝ如くなりき。これと同じき幸運は、余が旅行中の總ての出來事に伴ひ、終に、余は英人の好意の眞摯に駭かざるに至れり。

余の英國を訪問せしは、幸にもバンククロフト氏が米國大使として倫敦に駐劄せし際なりければ、氏の家にて、或は氏の職掌を通じて、余は容易に知名の人士に接し、或は禁制の場所にも入るを得たり。カアライルの家にては、余は社會上、文學上の英俊と會せり。アセネオーム文學俱樂部、並びに矯風俱樂部の特權も、慇懃に余の爲めに開放せられき。余は又地質學會、考古學會、及びローヤル協會等の圈内にて、至大の利益を收めき。倫敦滞在の間、余は目として一代の光華たる紳士淑女と相會するの新しき機會を得ざりし事なし。曰くロージャース、曰く

(367)

ハラム、曰くマコーレイ、曰くミルンズ、曰くミルマン、曰くペリイ・コーンウォール、曰くデイケンズ、曰くサッカレイ、曰くテニスン、曰くレー・ハント、曰くデイスレリ、曰くヘルプス、曰くウイルキンソン、曰くベイリ、曰くケンヨン、曰くフォースター。青年詩人の中には、曰くクラフ、曰くアーノルド、曰くバトモア、科學者の中には、曰くロバード・ブラウン、曰くオーウェン、曰くシジウィック、曰くアラデー、曰くバックランド、曰くライエル、曰くデュ・ラ・ペーシユ、曰くフッカー、曰くカーペンター、曰くバビッジ、曰くエドワード・フォーブズ。而して、ベイリイ嬢、モルガン夫人、ゼームソン夫人、及びサマーヴィル夫人と相語るを得たるは、亦、余の特典とする所なりき。余は又手厚き待遇を受けて、以上の諸家にも劣らず、多くの私人の家庭を知り、且つこれと親みき。聰智と高潔なる性格とを、常に見る所は、必ずしも顯門勢家にあらず、或は、然りとするも、この中に限らるゝ事なし。余は最も幸福なりし時間として、國內各地

(368)

に於て、殆んど世に知られざる人々と交へし談話を記憶す。然れども、余は又、元より、若干の高貴なる第宅にて、快く余に與へられたる禮遇を認めざるにあらず。唯、事々しくその名を擧げて紙面を飾らざるのみ。倫敦にて受けたる格外の利益中余は楽しんでその最も大なる二三を想起す。一は、キューにて、サー・ウィリアム・フッカーが、その廣大なる植物園を余に示したるもの、他は、博物館にて、サー・チャールズ・フェローズが、その希臘イオニヤの戰勝記念物を明細に余の爲めに説明したるもの、更に、他の一は、オーエン氏が、わが米國人エイチ氏及び余を伴ひて、隈なくハンテリアン博物館を觀覽せしめたるもの。

これと同じく、實際の便宜を圖れる、心おきなき款待を、余はバッキンガム、牛津、リースター、ノッチングハム、セッフィールド、マンチェスター、リヴァプール等の到る處にて、貴賤上下、種々の人より受けたり。エディンボロに於ては、サミュエル・ブラウン博士の厚意に依りて、デクインシー、ジェフリー卿、

ウイルソン、クロウ夫人、チンバース氏、その他品性美しく、天才に富みながら、不幸短命にして終れる畫家デヴィッド・スコットと相識るを得たり。

アムブルサイドに於ては、一八四八年の三月中、余は、二日間、折しも新に埃及の旅行より歸りたる、マルチノー嬢の客となりき。日曜日の午後、余は嬢と連立ちて、ライダル・マウントに抵れり。余は、數年前にもウァーヅウァースを訪ひしよしを記せしが、この再度の會見をも、忘るべからず。余等の着きしとき、ウァーヅウァースは寢椅子の上に眠りつゝありき。初めの中、彼は未だその假睡を終らずして眼醒めたる老人の常として、口數少く、不嫌機に見えしが、間もなく盛に佛國の新聞を論じ出せり。彼は敵愾心より佛人に對して苛酷なると共に、蘇國人に對しても苛酷なり。曰く、否、蘇國人は英語を綴る能はずと、即ち二種の例を擧げ、歴史家ロバートソンの文章は、總て、この中何れかに従つて組立てらると云へり。ゼッフライも、エディンボロ評論の記者輩も、英語を綴る能はず、

(369)

然り、ゝゝゝも英語を綴る能はず、彼は英語を犯す所の悪疫ペストなりと、爰に、彼は序を以て、ギボンも英語を綴る能はずと云へり。エディンボロ評論の記す所は、單に有効なる文章と、售らるべき文章とのみ。されど、そはコールリッジが主筆記者に若干の書簡を與へてより、その文學批評の調子を改めたり。ウヰーツウヰーツ夫人は記者の答辯書を所有す。テニスンは、彼の意見に依れば、真正の詩的天才なれども、多少の銜氣を藏す。彼、初めははテニスンよりも、その長兄を優れりとなしゝが、今日に至つては、弟のテニスンを眞の詩人と許さざるを得ずと。余が文體と云へるものゝ何なるかを知らずと云へるに答へて、彼は曰く、『必ずや、そは容儀なり、されど、足下識らん、事件は常に容儀より生ずるを』と。彼は、リオジャ・ネイロを大なる首都の所在地として、最も勝れたりと思惟す。余等は又英人の國民性を論じたり。余、彼に告げて曰く、英國に於て、プラトリーの祖述者たるトーマス・テローを知る者絶えて無しとは、信すべからず、米國

の如き、その圖書館は、何れも彼の翻譯を備ふと。又曰く、若しプラトリーの『理想國』が、今日、一部の新しき書として英國に現れたりとせば、讀者を得べきか、如何と。彼はその然らざるべきを自白し、霎時しやうじ、沈黙に落ちたる後、生粹の英人とは、決して離るゝ事なき、一種熙々として樂しげなる顔色をなして曰く『されど、されど、吾人はこれを實現せり』と。

彼の佛、英、愛、蘇等に關する意見は、彼及びその家族が、辻馬車、乗合馬車等の中にて、偶然遭遇したる、少許の逸事より、亂暴に概括したるものゝ如く思はる。彼の面には往々光輝の上る事あれども、その談話は何等の著しき強さもなく、超拔の風もなし。されど、吾人が斯くの如き人物を特に顯著と認めざるは、或は、これ一般英人の修養を高しとする深厚の禮儀なるべし。彼は打見たるところ壯健らしく、その顔は日に焦けて、皺を疊み、殊に巨大なる鼻を有す。

マルチノー嬢は、彼の近くに住めるもの、彼を賞讚するに、その詩を以てせず

(372)

して、却つてその節儉と經濟とを以てしき。そは、彼が毫も外觀を飾ることなくして、慰樂と修養とを求め得べき、質素なる家庭の實例を、その近隣の田舎人に示せし爲めなり。彼が初の程住みたる家の生活を言へば、客には、何時も麩包の外、極めて粗末なる食事を供するのみにて、これより多くを請ふ者は、自らその代價を拂はざるべからず。而して、こは彼の家の規則なりしと。余、これを聞きて曰へらく、こは余が知れる何れの逸話よりも能く英人の膽氣を證明するものなりと。この邊の一紳士の告げたる話に、曾てウォーター・スコットが、彼の家に一週間滞留したる事ありしが、その間、スコットは毎日散歩と稱して家を出で、スオン旗亭を訪ひて、一片の冷肉と、ポルター酒とを取れり。然るに、彼一日ウァーズウァースと連立ち、この旗亭に通るかゝりしに、内より主人、ポルター酒を求めらゝにやと、聲をかけしかば、端なくその秘密を露したりと。無論、かゝる特色も、倫敦に於ては、別様の觀を呈すべし、吾人は各方面の文學者より、ウァー

ズウァースは個人としての朋友を有せず、彼は親み難し、彼は吝嗇なり、等の評を聞く。常に寛厚なるランドルも亦、ウァーズウァースは何人をも賞揚したる事なしと言へり。倫敦の一紳士、曾て余に一個の時計を示せしが、こは元ミルトンの所有に係り、その蓋に彼の頭文字を刻めり。而して、紳士は語りて曰ふ、これをウァーズウァースに見せたるに、彼は片手にこれを取り、次ぎにわが時計を抽出し、二個を竝べて、一座の面前に突出したり。されど一人も豫期の言葉を發せざりしかば、默然として我時計を收めきと。余は、倫敦の學者間に傳へらるゝ、ウァーズウァースの諷刺に重きを置く者にあらず。能く彼の作を讀む者は、彼がその強大なる天才の傾向に従ひて、多數を顧みず、同じく少數をも顧みず、斷々乎として、自ら『わが樂むべき趣味を創造』せずんば休まざるを見るべし。彼は幸に長壽を保ち、わが開始したる革命を目睹し、『わが豫想したる所を見』たり。彼の心には無感覺の部分あり。その詩は、聊か艱澁潤澤を缺き、典雅と變化とを

(373)

(374)

缺き、相當の正大と宇宙的見解を缺き、而して、彼は自國の政體、傳説を恪守し、その題目を選ぶに方つては、自大の稗氣を有す。然りと雖も、吾人は曰ふべし、人の精神を充分に、且つ絶對的信念を以て取扱ひたるもの、彼の時代に於ては、獨り彼あるのみと。彼がその詩の教條を固執するや、眞實の神興を基礎となす。『無窮を歌へる』の一篇は、現代知識の最高度を示す量水標なり。彼の勇氣に依つて、新なる手段は使用せられ、新なる版圖は、美神の國に加へられたり。

第十八章 結論

英國は、現存せる國家の最上なるものなり。こは理想的細工にあらず、種々の時代を通じて建てられ、修繕と、増築と、臨時の處置を経たる一大老屋なり。吾人は、吾人の得たる、慙むべき最上のものを看る。倫敦は、當代の梗槩にして、今日の羅馬^{ローマ}なり。廣面、廣底のチュートン民族は、磁石の針と正しく合へる、堅固

(375)

の密集方陣を形れり。彼等は現代世界を成し、形勝の地域を占領して、代々、これが苦しき所有を持続しき。彼等は鮮^{あざやか}なる特色を備へて、他の優等國民と類を殊にす。英國民は情に脆^{もろ}し。羅馬人は然らざりき。英國民は、その天性、甚だ公開的にあらず。私的生活を、その名譽の居るところとなす。私的生活には眞實、公的生活には不眞實、これをこの家庭愛護者の特質となす。彼等が政治上の方針は一般の見解に依つて決せられず、却つて、内部の密事と、個人乃至家族の利害に依る。彼等は、英國國境を踰えては、明確に見る事能はず。希臘、羅馬の歴史も、その學者の筆に上れば、英國といへる黨派の論文に、墮落す。彼等は英國以外を見る能はざるのみならず、英國内に於ても、その支配者階級の利害を超越する能はず。『英國主義』とは、財産上の利害を最大視するの謂に外ならず。英克蘭、蘇格蘭^{スコットランド}、及び愛耳蘭^{アイルランド}は、聯合して植民地を抑制す。英克蘭と蘇格蘭とは、聯合して愛耳蘭の工業、及び貿易を抑制す。英克蘭は、國內舉つて蘇格蘭を抑制す。英克蘭